総社市埋蔵文化財発掘調査報告 23

一丁坦古墳群

市指定史跡 古墳確認調査

２０１４年１２月

岡山県総社市教育委員会

総社市埋蔵文化財発掘調査報告 23

一丁坦古墳群

市指定史跡 古墳確認調査

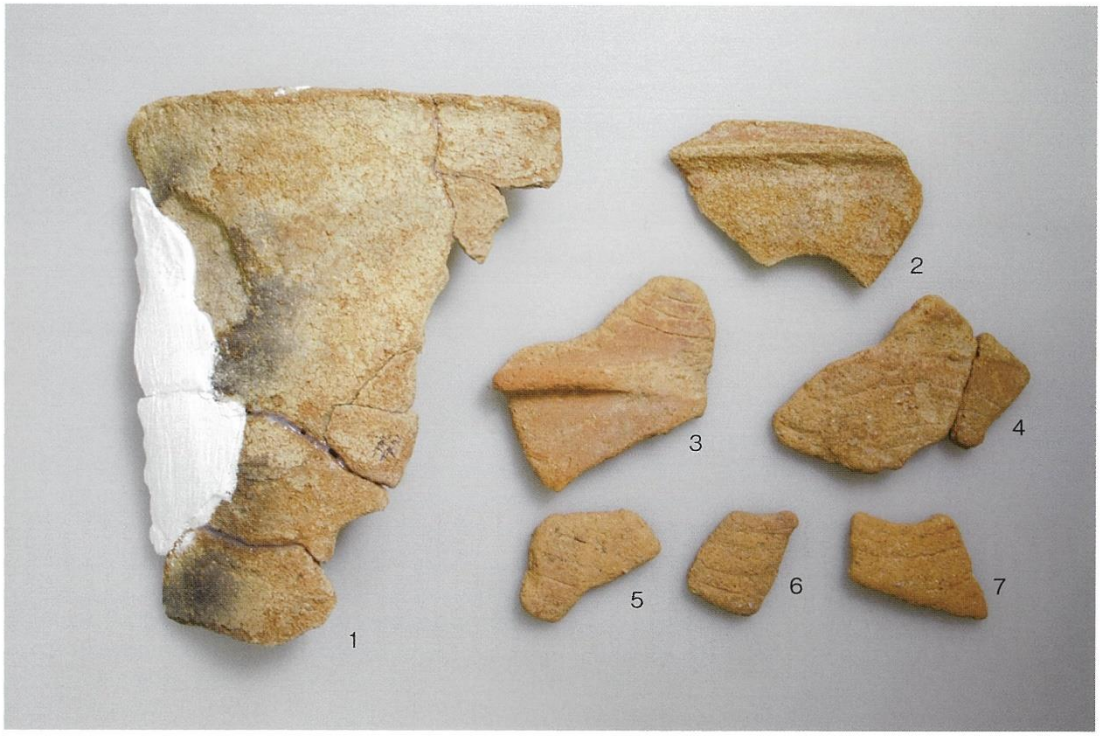
２０１４年１２月

岡山県総社市教育委員会

１　一丁坂古墳群空撮（西から）

２　一丁坂古墳群空撮（真上から）

巻頭図版２



1　一丁坑１号墳出土特殊器台形埴輪

2　一丁坑４号墳出土馬形埴輪・人物形埴輪

序

総社市は，県内でも有数の古墳密集地帯で，全国第10位の墳長を誇る作山古墳や，長大な横穴式石室を有するこうもり塚古墳などが存在します。これらの古墳の存在は総社市が古代において吉備の中心的な地域であったことを物語っています。

今回報告する一丁坦古墳群の存在そのものは早くから認識されていたものの，未調査のため実態の把握ができず，その評価も不確かなものでした。

そのような中，地元の方々の熱意と協力をいただき，一丁坦古墳群の測量調査を実施する運びとなり，その成果をもとに1～4号墳は市指定史跡となりました。その後，さらに地元秦地区を中心に古墳群の解明と活用の機運が高まり，市指定史跡となった4基の確認調査を実施することとなりました。

調査中の現地説明会には100人を超す見学者があり，現在も市内外から多くの方が訪れるとお聞きいたしております。

一丁坦古墳群の測量調査は平成23年以来3年間続けられ，多くの資料を得ることができました。この報告書により，広く一丁坦古墳群の内容を知っていただき，貴重な資料として活用していただけますよう願っております。

最後になりましたが，岡山県をはじめ調査に係わった多くの方々に感謝を申し上げます。

平成26年12月

総社市教育委員会
教育長　山　中　榮　輔

例　言

1．本書は市指定史跡　一丁坑古墳群の整備に伴い，平成23年度に総社市教育委員会が実施した確認調査の報告書である。

2．調査は，総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導・助言のもとに実施した。

3．確認調査は，平成23年7月19日から平成23年11月30日の期間で実施した。調査面積は約430㎡である。

整理作業は，平成25・26年度，報告書作成作業は，平成26年度に実施した。

4．一丁坑古墳群の概要は，総社市教育委員会刊行の『総社市埋蔵文化財調査年報』22で報告をしている。その内容において本書と相違がある場合は，本書の記述の方が優先する。

5．確認調査は，総社市教育委員会文化課課長補佐　武田恭彰が主に行い，主査　高橋進一が図面補助を担当して行った。調査作業員は以下のとおりである。

上野忍，上野知章，上野清，上野勝，上野輝巳，糸島三喜男，浅沼雄貴，橋本郁男，橋本勲，
川西正樹，松盛将倫，糸島信夫，小林弘幸，川西隆志，河合眞作，川西巧躬，森山博，糸島雅春
小谷義徳，平田久志，糸島竜也，上野智津子，板野しのぶ，板野浩子，小原春子，佐伯浩子，
登森晶子，川西いずみ，東栄子，糸島三枝子　（順序不同）

6．整理作業は，文化課課長　谷山雅彦，主事　村田　晋が担当して行い，整理作業員は以下のとおりである。

総社市埋蔵文化財学習の館　犬飼真弓，田中富子

7．本書の執筆は，谷山，高橋，村田で分担し文末に名を記した。編集は谷山，高橋，村田で行い文化課で校閲・校正した。

8．発掘調査で出土した遺物，発掘調査および整理作業において作成した遺構・遺物の実測図や写真等の記録類は，総社市埋蔵文化財学習の館（総社市南溝手265-3）にて保管している。

9．本書の刊行にあたり御指導・御協力頂いた関係機関ならびに関係各位の皆様に厚く御礼申しあげます。

凡　例

1．挿図の複製・一部加筆は，第1・54図で総社市発行の都市計画地図2,500分の1の地形図を，第7図で同じく都市計画図10,000分の1の地形図である。このほか挿図の複製についてはそれぞれの箇所で明示している。

2．トレンチ番号は調査時のものを基本的には使用している。

3．遺物実測図における断面は埴輪を白抜き，須恵器を黒塗りとした。

4．本書の標高値は海抜高であり，遺構実測図の方位は世界測地系による座標北である。

5．土層断面図において，古墳盛土と地山の関係を明確に表示すべきであるが，今回の調査では確認していない。そのため，基本的には掘削停止線を実線とし，明確に地山と認識した部分は地山表示とした。また，地山と掘削停止線を実測図で表示してあるものは，そのように区別した。

目　　次

序文
例言・凡例
目次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査にいたる経緯 …… 1
　第２節　調査の体制 …… 2
　第３節　調査の経過 …… 2

第２章　遺跡の位置と環境 …… 11
　第１節　地理的環境 …… 11
　第２節　歴史的環境 …… 11

第３章　確認調査の概要 …… 13
　第１節　１号墳 …… 13
　第２節　２号墳 …… 30
　第３節　３号墳 …… 30
　第４節　４号墳 …… 31
　第５節　６号墳 …… 45

第４章　まとめ …… 48

付載　秦大坑古墳測量調査について …… 50

図　目　次

第１図　一丁坑古墳群分布図（Ｓ＝1/5,000） …… 5
第２図　確認調査予定協議図 …… 6
第３図　平成23年10月8日　現地説明会資料 …… 7
第４図　平成24年４月19日　県報告測量図 …… 8
第５図　Ｃ地区　平成24年度測量図（Ｓ＝1/800） …… 9
第６図　Ｄ地区　平成25年度測量図（Ｓ＝1/800） …… 10
第７図　周辺主要遺跡分布図（Ｓ＝1/40,000） …… 12
第８図　確認調査実施全体図（Ｓ＝1/1600） …… 13
第９図　墳丘測量図，トレンチ配置図（Ｓ＝1/800） …… 14
第10図　Ｔ－１平・断面図（Ｓ＝1/80） …… 15
第11図　Ｔ－16平・断面図（Ｓ＝1/80） …… 16
第12図　Ｔ－３平・断面図（Ｓ＝1/80） …… 16
第13図　Ｔ－６平・断面図（Ｓ＝1/80） …… 17
第14図　Ｔ－７平・断面図（Ｓ＝1/80） …… 17
第15図　Ｔ－８平・断面図（Ｓ＝1/80） …… 18
第16図　Ｔ－９平・断面図（Ｓ＝1/80） …… 18
第17図　Ｔ－14平・断面図（Ｓ＝1/80） …… 19
第18図　Ｔ－15平・断面図（Ｓ＝1/80） …… 19
第19図　Ｔ－５平・断面図（Ｓ＝1/80） …… 20
第20図　Ｔ－４平・断面図（Ｓ－1/80） …… 20

第21図　T－11平・断面図（S＝1/80）　……21
第22図　T－10平・断面図（S＝1/80）　……21
第23図　T－13平・断面図（S＝1/80）　……22
第24図　T－12平・断面図（S＝1/80）　……22
第25図　一丁坑１号墳出土埴輪①（S＝1/４）……26
第26図　一丁坑１号墳出土埴輪②（S＝1/４）……27
第27図　一丁坑１号墳出土埴輪③（S＝1/４）……28
第28図　一丁坑１号墳出土埴輪④（S＝1/４）……29
第29図　トレンチA断面図（S＝1/80）……30
第30図　トレンチC断面図（S＝1/80）……30
第31図　トレンチF平・断面図（S＝1/80）……30
第32図　トレンチI断面図（S＝1/80）……30
第33図　2号墳　トレンチB・D断面図（S＝1/80）…31
第34図　3号墳　トレンチE・G断面図（S＝1/80）…31
第35図　4号墳　トレンチH・J平・断面図（S＝1/80）…31
第36図　一丁坑４号墳出土埴輪①（S＝1/４）……33
第37図　一丁坑４号墳出土埴輪②（S＝1/４）……34
第38図　一丁坑４号墳出土埴輪③（S＝1/４）……35
第39図　一丁坑４号墳出土埴輪④（S＝1/４）……36
第40図　一丁坑４号墳出土埴輪⑤（S＝1/４）……37
第41図　一丁坑４号墳出土埴輪⑥（S＝1/４）……38
第42図　一丁坑４号墳出土馬形埴輪（S＝1/６）…39
第43図　一丁坑４号墳出土人物形埴輪（S＝1/４）…40
第44図　一丁坑４号墳出土須恵器①（S＝1/４）…41
第45図　一丁坑４号墳出土須恵器②（S＝1/６）…42
第46図　６号墳測量図（S＝1/400）……45
第47図　トレンチ①平・断面図（S＝1/80）……46
第48図　トレンチ②平・断面図（S＝1/80）……46
第49図　トレンチ⑤平・断面図（S＝1/80）……46
第50図　トレンチ⑧平・断面図（S＝1/80）……46
第51図　トレンチ⑥平・断面図（S＝1/80）……46
第52図　トレンチ⑦北部分平・断面図（S＝1/80）…47
第53図　トレンチ⑦中央部分平・断面図（S＝1/80）…47
第54図　調査位置図（S＝1/5,000）……50
第55図　秦大坑古墳測量図（S＝1/500）……51
第56図　秦大坑古墳採集埴輪（S＝1/４）……51

表　目　次

表１　当初計画と変更計画の比較　……3
表２　実施時期　……3
表３　実施内容　……4
表４　トレンチ規模一覧　……13
表５　特殊器台形埴輪出土古墳　……49
表６　遺物一覧　……52

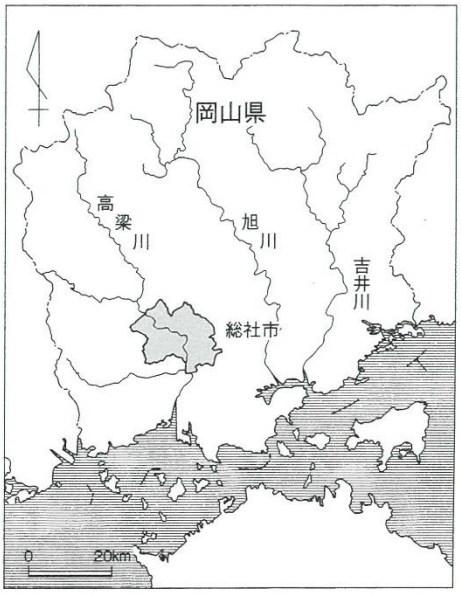
巻頭図版目次

巻頭図版１　１　一丁坑古墳群空撮（西から）
　　２　一丁坑古墳群空撮（真上から）
巻頭図版２　１　一丁坑１号墳出土特殊器台形埴輪
　　２　一丁坑４号墳出土馬形埴輪・人物形埴輪

図　版　目　次

図版１　１　一丁坑１号墳全景（南東から）……57
　　２　当初列石とされた石列（北西から）
　　３　T－１全体（南西から）
図版２　１　T－１近景（南東から）……58
　　２　T－１近景（南東から）
　　３　T－１近景（南東から）
図版３　１　T－６近景（南東から）……59
　　２　T－６近景（南東から）
　　３　T－６葺石（北東から）
図版４　１　T－７近景（南東から）……60
　　２　T－７近景（北東から）
　　３　T－７葺石（北から）
図版５　１　T－８近景（南から）……61
　　２　T－９近景（南東から）
　　３　T－14近景（南東から）
図版６　１　T－15近景（北東から）……62
　　２　T－３近景（北東から）
　　３　T－３葺石（北西から）

図版７　１　Ｔ－16近景（北東から）……63
　　２　Ｔ－16葺石（北西から）
　　３　Ｔ－５近景（北西から）
図版８　１　Ｔ－10近景（南西から）……64
　　２　Ｔ－12近景（北西から）
　　３　Ｔ－13葺石（南西から）
図版９　１　４号墳トレンチＦ墳頂部（西から）…65
　　２　４号墳トレンチＦ遺物出土状況（南東から）
　　３　４号墳トレンチＪ完掘状況（南東から）
図版10　１　６号墳トレンチ⑦北端（南東から）…66
　　２　６号墳トレンチ⑦中央部分（北西から）
　　３　６号墳トレンチ②（南西から）
図版11　１　６号墳トレンチ⑤近景（北東から）…67
　　２　１号墳調査前（南から）
　　３　３号墳から１号墳をみる（北東から）
図版12　１　一丁坑１号墳出土埴輪①　……68
　　２　一丁坑１号墳出土埴輪②
　　３　一丁坑１号墳出土埴輪③
図版13　１　一丁坑１号墳出土埴輪④　……69
　　２　一丁坑１号墳出土埴輪⑤
　　３　一丁坑１号墳出土埴輪⑥
図版14　１　一丁坑４号墳出土埴輪①　……70
　　２　一丁坑４号墳出土埴輪②
　　３　一丁坑４号墳出土埴輪③
図版15　１　一丁坑４号墳出土埴輪④　……71
　　２　一丁坑４号墳出土埴輪⑤
　　３　一丁坑４号墳出土埴輪⑥
図版16　１　一丁坑４号墳出須恵器①　……72
　　２　一丁坑４号墳出須恵器②
　　３　一丁坑４号墳出須恵器③



総社市位置図

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯

一丁坦古墳群は総社市秦に所在している。所在地では総社市からの要望で平成21年から県事業として保安林改良事業を実施していた。この事業計画地内には岡山県遺跡地図上では遺跡は確認されておらず，計画そのものが土地の形状を大きく変更するものでもないことから，文化財の取り扱いの協議はなされなかった。事業地からやや離れた位置には「山根古墳（前方後円墳といわれる）」の記載があり，この古墳が一丁坦１号墳と考えられ，位置が誤記された可能性もある。

しかし，遺跡地図の古墳と位置が異なること，現地での確認においても詳細がわからないことから，治山事業が進行することとなった。県営植林事業として平成21年10月から約７haを対象に，枯死した松の伐採とその後の植林がなされた。

その後，平成22年６月に調査地南に所在する金子古墳群の立会調査時に，一丁坦１号墳周辺で樹木の伐採・植林が終了していた状況が確認できたため，伐採範囲の分布調査を実施した。この結果，丘陵の尾根線で一丁坦１号墳を含む数基の古墳が事業地内に所在することが明らかになった。

さらに平成22年12月から平成23年１月にかけて事業地内の分布調査を実施し，広範囲に古墳が存在することが確認された。特に一丁坦１号墳は全長70ｍを超える前方後方墳である可能性が高まり，地権者の承諾を得，測量杭を設置し平成23年２月16～18日に測量調査を実施した。しかし，この期間で測量が終了しなかったことから，３月に職員２名で追加測量を行い１号墳から４号墳までの測量図面を完成させた。この成果を元に地元から市指定史跡の申請がなされた。この時点で名称について昭和12年に刊行された『吉備郡史』にこの古墳が一丁坦古墳群として紹介されていることが確認できたため，正式名称を一丁坦古墳群とした。

平成23年５月20日に開催した総社市文化財保護審議会において一丁坦古墳群の市指定史跡の審議がなされ，４世紀前半に築造された県南最大の前方後方墳であることから指定にすることが承認された。また，同年６月23日に開催した総社市教育委員会に議案として諮り承認された。

指定名称は「一丁坦古墳群（４基）」とし平成23年６月27日付け，教文財第44号で文化庁長官あて「総社市指定文化財の報告」を提出した。ここで指定理由として「１号墳は，墳丘測量の結果から全長約74ｍの前方後方墳であることが確認され，周囲から採取された埴輪片から４世紀前半に築造された可能性が高いと考えられる。古墳の形状と規模から総社市で最大の前方後方墳であり，岡山県内においても第２位の規模であることが判明した。また，２～４号墳が並んで築かれており，後続する古墳群と考えられる。」とした。

その間，地元秦地区において一丁坦古墳群の所在する丘陵に全体の整備活用の動きが大きくなり，一丁坦古墳群のさらなる解明を望む意見がでた。

このため，まず古墳群の基礎資料を整備する目的で，確認調査を実施することとなった。

地元秦地区では平成24年４月には「秦歴史遺産保存協議会」が発足した。

第２節　調査の体制

調査対象が市指定史跡であり，調査の重要性から熟練の調査員２名で開始した。主は前年の測量調査に係った武田であり，もう１名は今後の対応を考慮して高橋を担当とした。

現地は民地であり，地元自治会をはじめ調査に地元の多くの方々の多大の協力を得られたため，調査を実施することができたことを感謝します。

また調査時には文化財保護審議会委員をはじめ多くの方に現地でご指導ご助言をいただいた。銘記し深く謝意を表します。

調査の組織

教育長　　楽田　交三　～平成24年3月31日
　　山中　榮輔　平成24年4月1日～
教育次長　浅沼　節夫　～平成24年3月31日
　　松尾　一夫　平成24年4月1日～
　　平成26年3月31日
　　矢吹　政行　平成26年4月1日～
参事兼文化課長
　　守安　正道　～平成25年3月31日
主幹兼係長
　　谷山　雅彦　平成25年4月1日～（課長）
課長補佐　武田　恭彰　～平成26年3月31日（商工観光課へ異動）
係　長　　平田壮太郎　平成25年4月1日～（課長補佐）
主　査　　高橋　進一
主　任　　石井　淳一　～平成24年3月31日
主　任　　村間　紀子　平成26年4月1日～
主　事　　津下　晴美　～平成26年3月31日
主　事　　村田　晋　　平成26年4月1日～

整理の組織

（埋蔵文化財学習の館）
館長　　村上　幸雄　～平成26年3月31日
　　平井　典子　平成26年4月1日～
　　（～平成26年3月3日　文化課　主幹）
臨時職員　田中　富子
　　犬飼　真弓

第３節　調査の経過

市指定，地元要望を受けて，古墳群の正確な形状・規模を把握するための確認調査を平成23年度事業として開始した。前年度の測量時には古墳周辺に，数メートル間隔で伐採された雑木が棚状に積み上げられており，その部分の測量が正確とはいえなかったため，再測量も実施した。そのため，測量図が２枚あるが，本報告では再測量の図面を基本とし補足的に前回の測量図も参考にした。

現地は保安林内であるため，岡山県備中県民局森林企画課・森林整備課へ平成23年６月16日付け，教文財第40号で協議書を提出した（行為面積0.0560ha）。協議の中で，試掘溝を最小範囲にとどめ，植栽木の育成を阻害しないことに留意し，あわせて古墳周辺の事業地約３haの雑草木の草刈を行うこととなった。

平成23年6月28日付け，岡山県指令備中局農第19号で保安林内作業許可を受け，平成23年7月19日付け，教文財64号で保安林内作業許可の行為着手届けを提出した。

しかし，「現地の確認調査の事前準備として，現地の下刈，棚積みの整理を行っていたところ，想定外の箇所に石垣（古墳の一部）が出現し，1号墳の規模が当初の想定よりも大きいことが判明した。このため，1号墳周辺の確認調査の計画（試掘溝の延長，確認調査期間）を変更する必要が生じた。」ことを理由に平成23年9月2日付け，教文財第88号で変更協議を提出した。変更時期は平成23年7月19から9月30日を平成23年9月2日から11月30日までとし，前許可は中止し新規申請を行った。実施内容の変更は下記の表とした（行為面積0.1040ha）。

表1　当初計画と変更計画の比較

	幅	長さ	深さ	本数
当初	1 m	5 m	0．3 m	26本
	1 m	150 m	0．3 m	1本
変更	1 m	5 m	0．3 m	11本
	1 m	10 m	0．3 m	3本
	1 m	15 m	0．3 m	7本
	1 m	20 m	0．3 m	3本
	1 m	30 m	0．3 m	4本
	1 m	150 m	0．3 m	1本

この変更は，平成23年9月12日付け，岡山県指令備中局農第42号で保安林内作業許可を受け，平成23年9月21日付け，教文財第95号で保安林内の行為着手届けを提出した。

平成23年10月8日には調査途中であったが現地説明会を実施した。この時点での所見は

1　全長76 mの前方後方墳。

2　葺石が良好に遺存している。

3　墳丘の外周に二重の葺石状の列石を巡らしている。

4　古墳時代前期，4世紀初頭の築造と推定。

5　さらに周囲には前方後円（方）墳が数基存在する。というものであった。

調査は引き続き2～4・6号墳の確認調査を行い，平成23年12月8日付け，教文財132号で完了届けを，平成23年12月26日付け，教文財138号で「一丁坦古墳群に係る確認調査等の完了について」報告を岡山県備中県民局長あてに提出し終了した。

表2　実施時期

種別	計画	実績
草刈	7月19日～8月31日	7月19日～8月31日
1号墳試掘溝掘り下げ	保安林作業許可日～10月7日	9月13日～10月7日
一般公開	10月8日	10月8日
1号墳試掘溝埋め戻し	10月9日～10月15日	10月10日～10月15日
2～4号墳及び延長試掘溝掘り下げ（6号墳）	10月16日～11月15日	10月16日～11月15日
2～4号墳及び延長試掘溝埋め戻し	11月16日～11月30日	11月16日～11月30日

確認調査終了後に5号墳，さらに南に所在する7～11号墳の下刈り・測量調査も継続して実施し，それらの結果を，平成24年4月19日付け，教文財第18号で「埋蔵文化財確認調査の報告」を岡山県教育委員会教育長あて提出した。

測量調査結果は総社市文化財保護審議会へ報告し，7号墳については測量図から前方後方墳とはいえないと判断された。

表３　実施内容

区分	幅	長さ	深さ	本数	延長
1	1 m	5 m	0.3 m	11 本	55 m
2	1 m	10 m	0.3 m	2 本	20 m
3	1 m	15 m	0.3 m	7 本	105 m
4	1 m	20 m	0.3 m	3 本	60 m
5	1 m	30 m	0.3 m	4 本	120 m
6	1 m	120 m	0.3 m	1 本	120 m
合計				28 本	480 m

また，報告書作成のため古墳調査に精通した県内の専門職員から意見をいただき，１号墳の規模の変更や周辺部にある集積された外周石列については時期が確定できないことや，連続しないことなどから，１号墳との関係は述べられないことなどの指摘がなされた。

測量調査は平成 24・25 年度中も継続され，完成した測量図からは現地説明会で述べた１号墳以外に存在するとされた複数の前方後円（方）墳は確認できなかった。現地説明会の方法・内容を再考する必要を痛感している。　（谷山　雅彦）

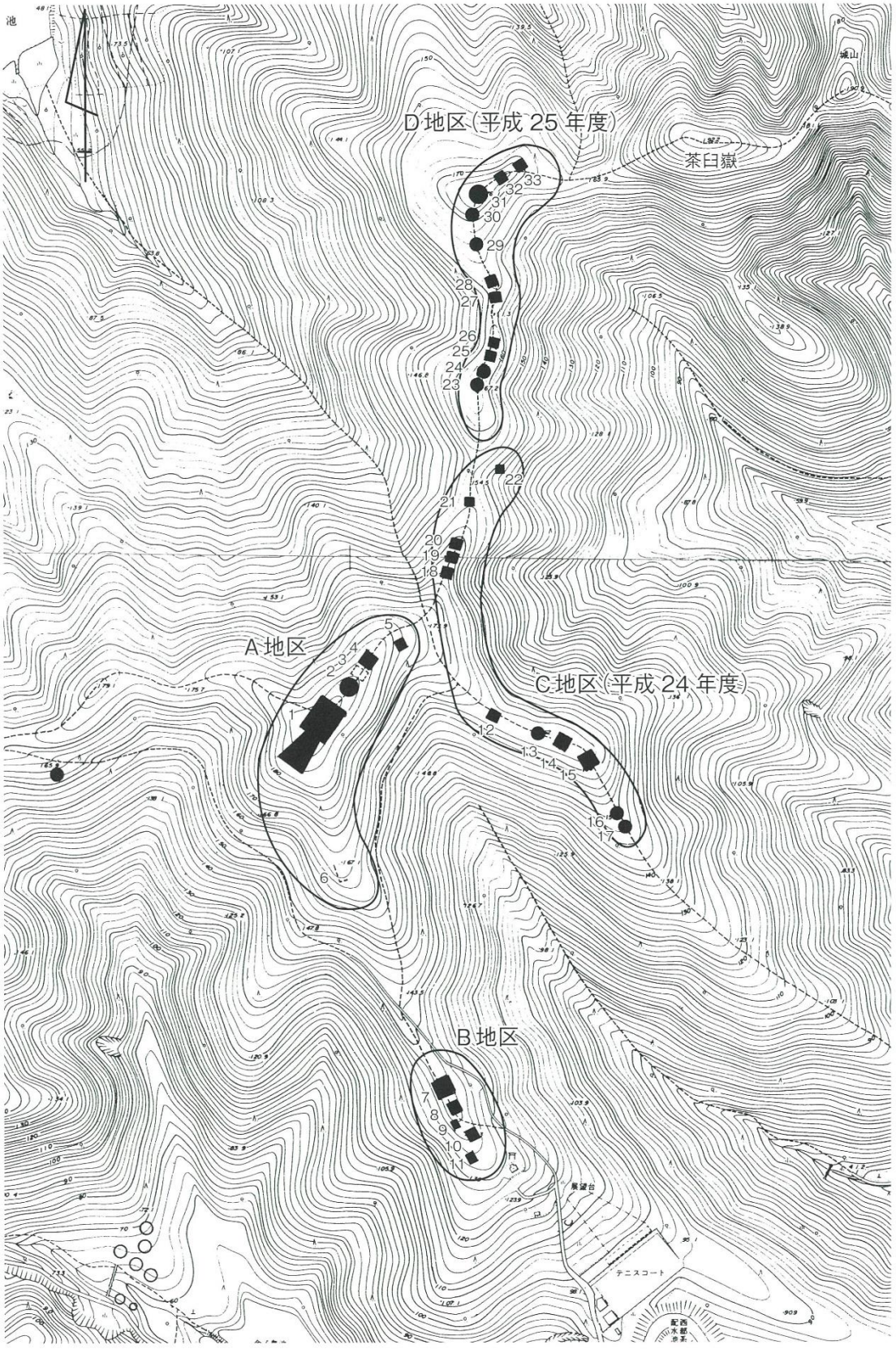
参考文献

「長良小田中遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』22　岡山県総社市教育委員会　2011 年

「一丁坑古墳群の測量調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』21　岡山県総社市教育委員会　2012 年

「一丁坑古墳群確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』22　岡山県総社市教育委員会　2013 年

平成 26 年度では一丁坑古墳群の北方にある金刀比羅神社の裏山（茶臼嶽）で地元の方が発見された前方後円墳状の高まりが古墳であるかどうかの確認のため下刈りを実施した。地形の制約や後世の土取りなどの影響を受けているため，正確さを得るため測量調査を実施した。



第１図　一丁坑古墳群分布図（S＝1/5,000）

一丁坦古墳群確認調査範囲面積
★　1～4号墳：6120㎡
★　延長トレンチ：300㎡
計　6420㎡

この範囲内に1m×5mの試掘溝を堀り下げる。

1号墳
2号墳
3号墳
4号墳

凡例
当初計画
変更部分
中止箇所

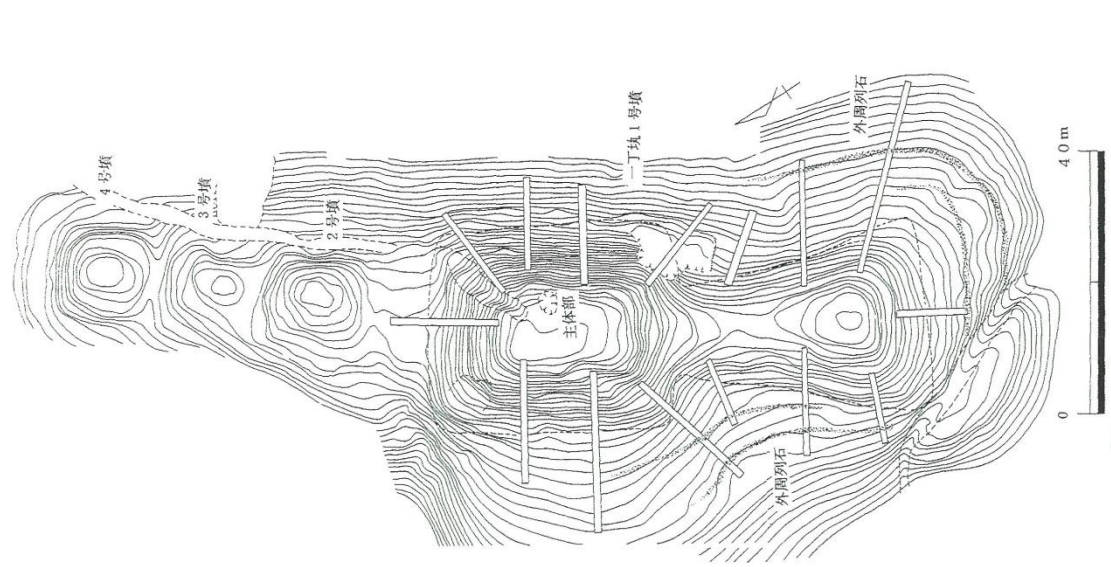
1号墳
2号墳
3号墳
4号墳

0　40m

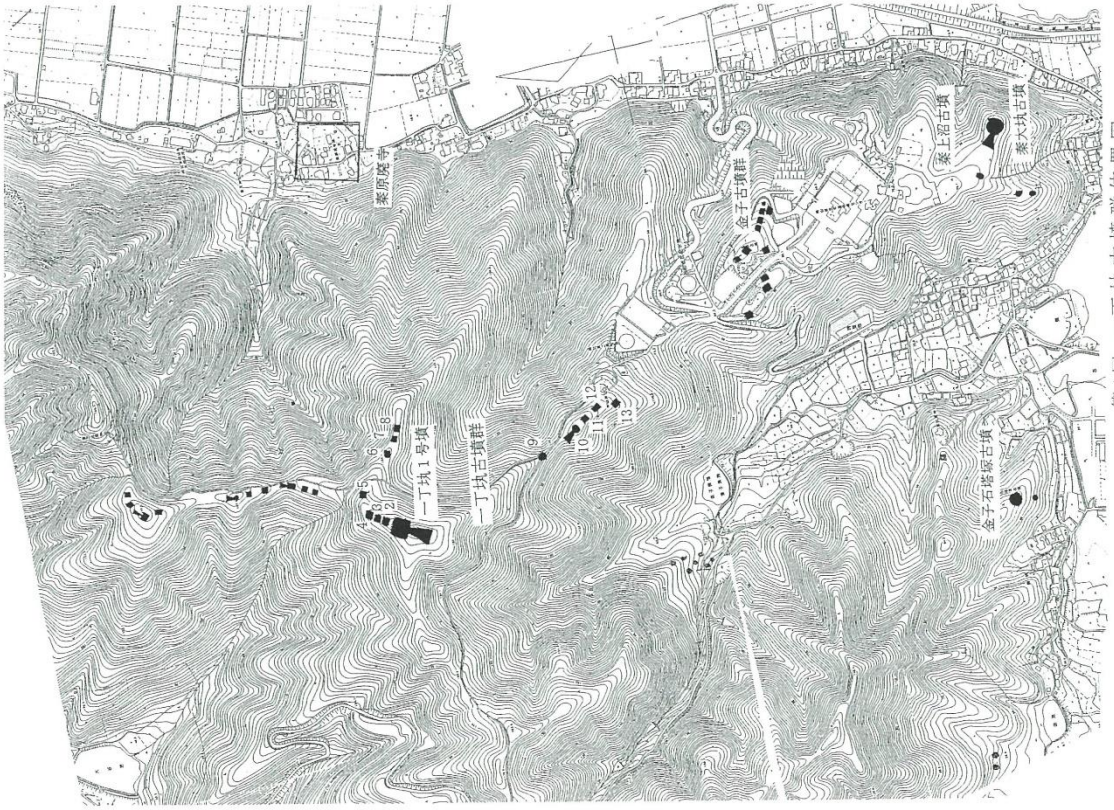
一丁坦古墳群確認調査試掘溝予定位置図（S＝1/400）

第2図　確認調査予定協議図

※縮図は元図が（S＝1/400）で，ページに合わせて，（S＝1/1000）に縮めている。

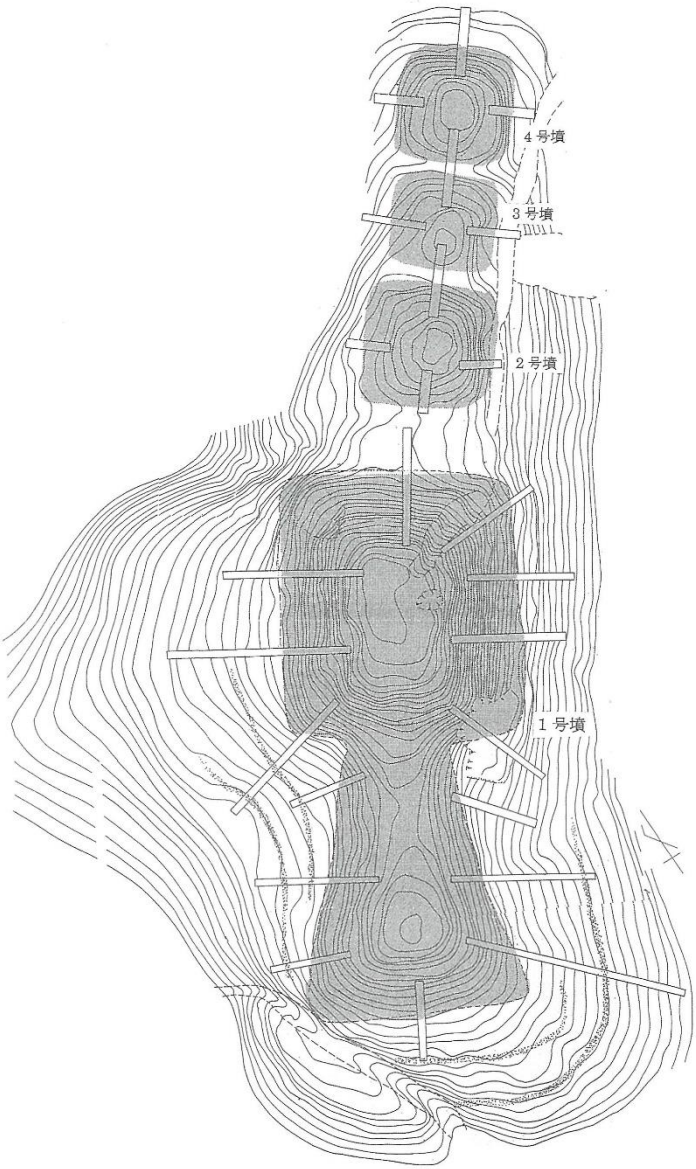


第2図　一丁坦古墳群平面図（S=1/600）※縮尺は配布時のもの



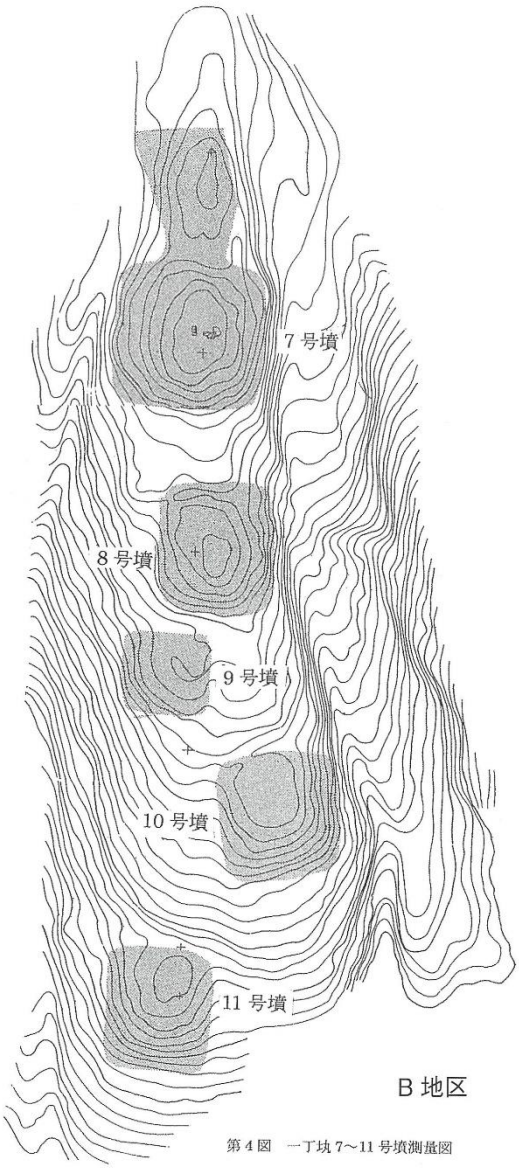
第1図　一丁坦古墳群位置図

第3図　平成23年10月8日　現地説明会資料（※位置図は現地説明会配布資料の原図を一部修正）



第3図一丁坑1～4号墳トレンチ配置図

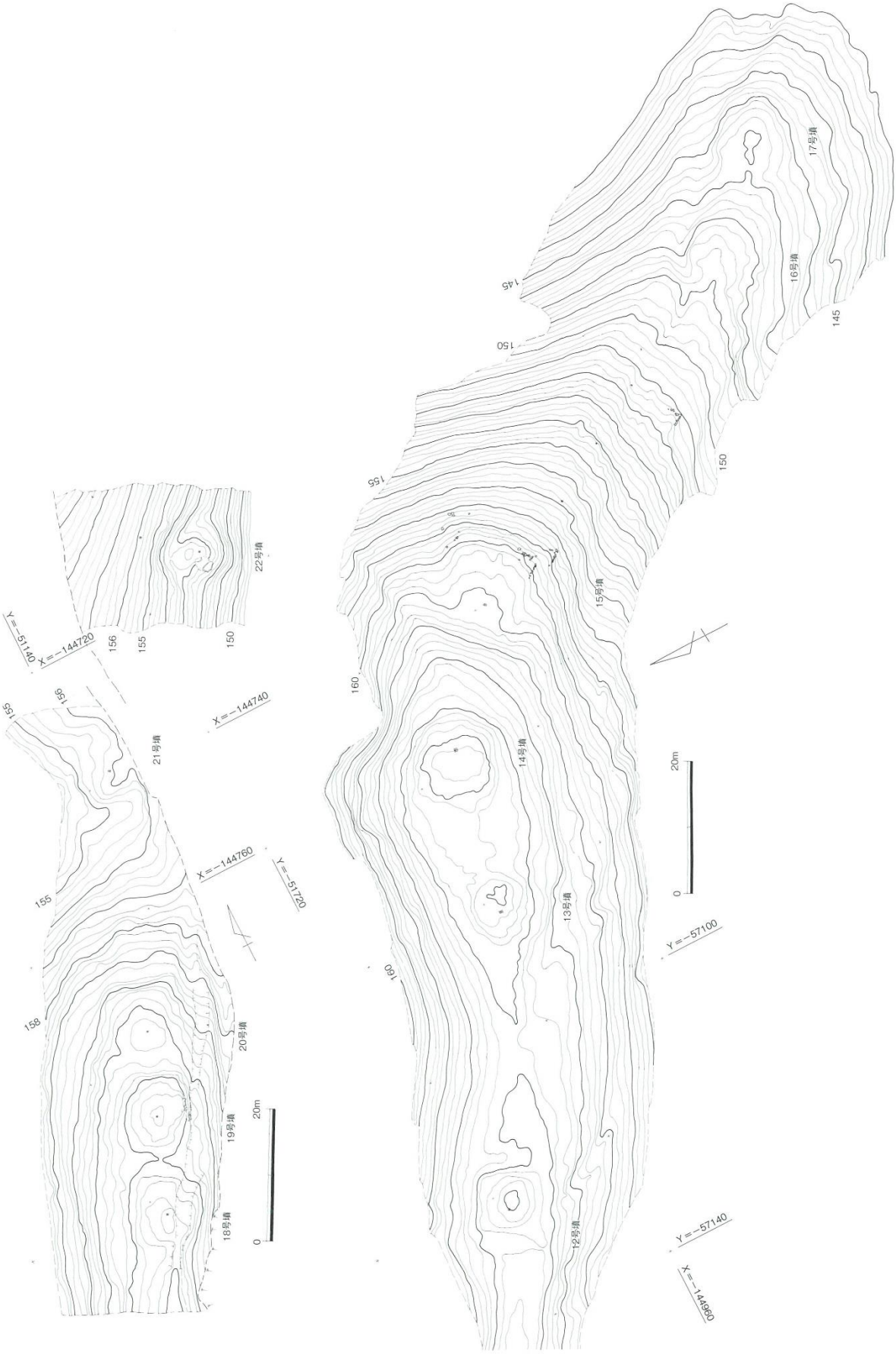
A地区



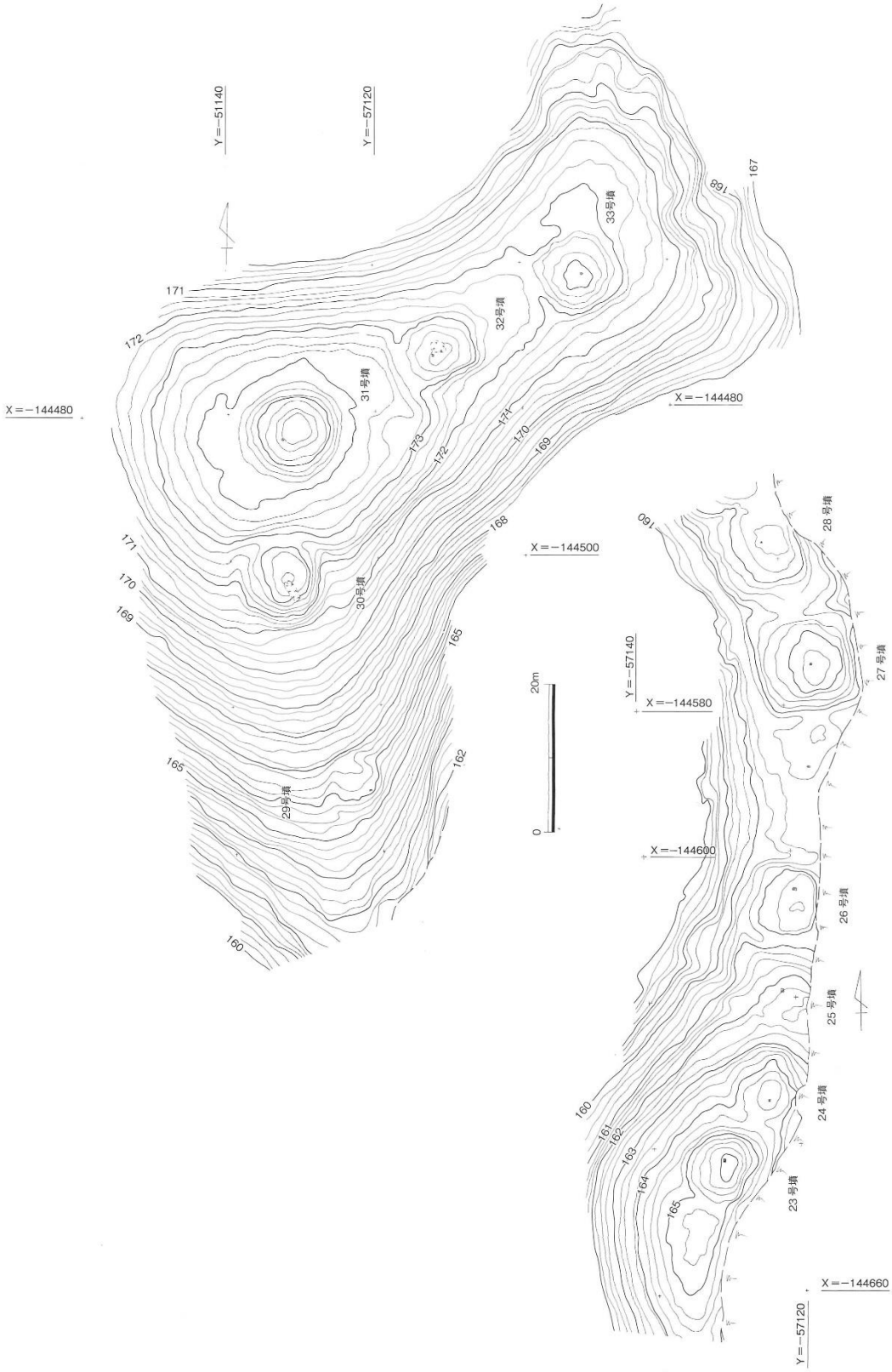
B地区

第4図　一丁坑7～11号墳測量図

第4図　平成24年4月19日　県報告測量図



第５図　Ｃ地区　平成 24 年度測量図　（Ｓ＝1/800）



第６図　Ｄ地区　平成 25 年度測量図　（Ｓ＝ 1/800）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

岡山県南部に位置する総社市では，市域中央を南北に一級河川の高梁川が流れ，周囲から槇谷川・新本川などの小河川が流れ込む。そのため南部には沖積平野が広がっているが，市内の沖積化は高梁川をはさんで若干の相違がみられる。左岸側では高梁川の氾濫原として大量の土砂が運ばれ，それらの隙間を旧河道がいくつも流れる状況がみられる。一方右岸側では山から発生した土砂による堆積が発達している。総社市北部は丘陵地帯で標高 400m 級の山が連なる吉備高原の南端となる。

一丁坦古墳群は高梁川右岸にあたる総社市秦の，正木山から南に派生する急峻な丘陵尾根上，標高 120 ～ 189 mの範囲に築かれた古墳群である。丘陵の頂上近くは山砂利層で，大小の礫が露出してみられるが礫単独の層はみあたらない。この山砂利層の北が細粒花崗岩，南が粗粒花崗岩，西が流紋岩類となっている。古墳群がある山塊は，北端は花崗岩の露頭で摂理がよく発達し，柱状を呈している。この花崗岩を御神体として式内社である石畳神社が建立されており，西方に流れていた高梁川がここで大きく湾曲し南へ流れを変える。このため山塊の東側には堆積層が形成され耕作地が広がっており，かつては農業用の大きなため池があった。

第２節　歴史的環境

新本川流域では，昭和 50 ～ 60 年代以降，ほ場整備事業や相次いだ住宅団地，工業団地の造成によって，集落や古墳群，製鉄遺跡の調査がなされた。これにより新本川流域の歴史資料が増加した[1]。

弥生時代には，前期･中期の上原遺跡が，後期には新本坊ヶ内遺跡などまとまった集落が営まれた。丘陵上には新本立坂や伊与部山などの弥生墳丘墓を築造するようになり，墳丘墓では埴輪の起源となる特殊器台・特殊壺を使用した葬送儀礼が行われた。

古墳時代に入ると，一丁坦古墳群のほか，前期の前方後円墳である秦大坦古墳を含む金子古墳群，金子石塔塚古墳を含む奥場古墳群などが築かれる。秦上沼古墳では，古い記録によると『吉備郡史』[2]に昭和４年４月八幡神社境外地，三角縁四神四獣鏡（天王日月銘）が小鏡と共に出土したことが記されている。

また，西の山田地域では，砂子山古墳群で全長 40 mを超す前方後円墳が同一丘陵上に２基築造される。さらに周辺に前方後円墳が数基確認されるなど，他地域とは異なった様相がみられる。新本・山田地域では集落も調査され，鍛冶に係る遺物などが多く出土している。製鉄や鍛冶に係る集落の存在は，古墳群が集中する要因のひとつとも考えられている。

７世紀になっても引き続き古墳が築造され，岡山県内唯一の横口式石棺を有する長砂２号墳もこの流域に所在する。また，県内最古の寺院跡である秦（原）廃寺が建てられる。

平安時代には岩清水八幡宮の荘園として田上庄（新本），白河院の皇室領として橋本庄（秦），少し時代が下るが東福寺領として上原庄（上原）がみられる。　（谷山・村田　晋）

註

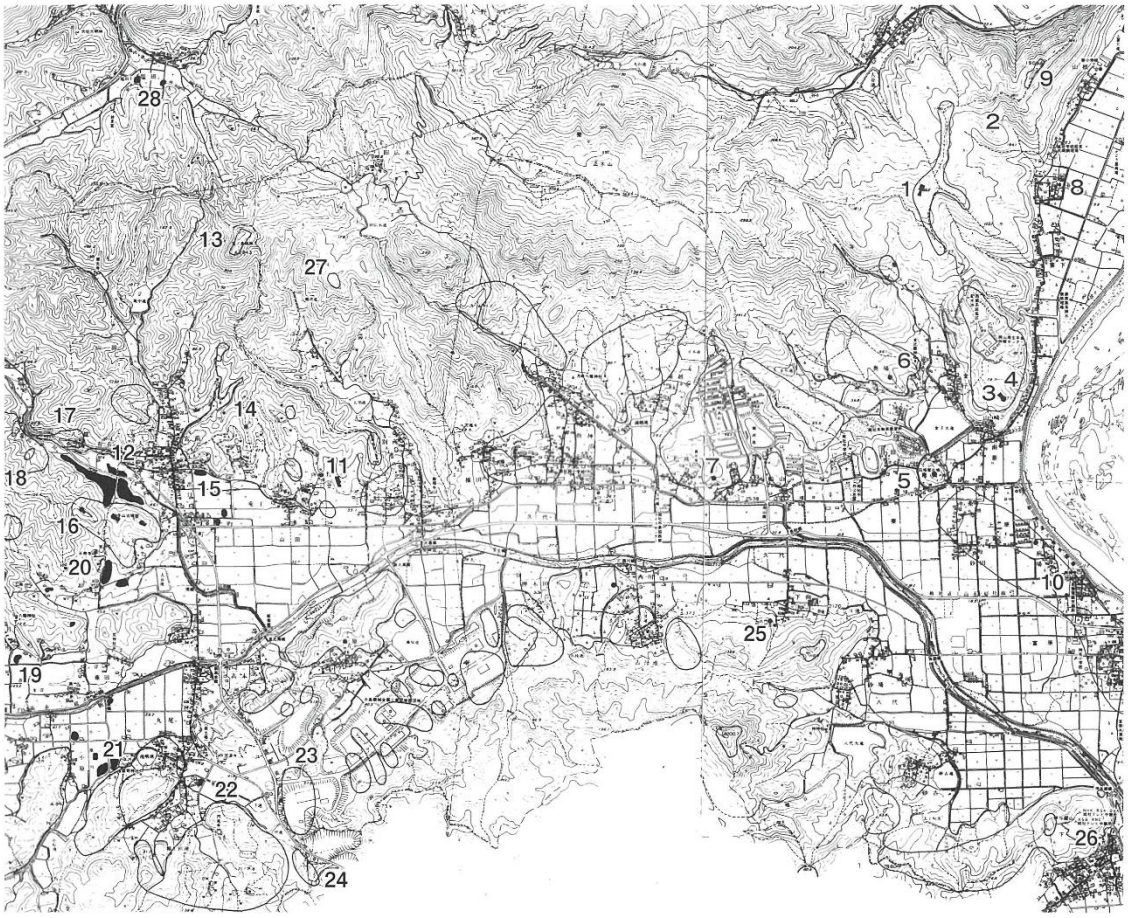
（1）以下の文献を参照のこと。

1）『総社市史』考古資料編　総社市　1987年

2）『総社市埋蔵文化財調査年報』３～６・９～11・13・14・19　総社市教育委員会

3）『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』９　総社市教育委員会　1991年

（2）『吉備郡史』上巻　岡山県吉備郡教育会　1937年



1	一丁坑古墳群	8	秦(原)廃寺	15	宮ノ前遺跡	22	長瀞遺跡
2	茶臼嶽古墳	9	荒平山城跡	16	砂子山古墳群	23	西団地内遺跡群
3	金子10号墳(秦大坑)	10	上原遺跡	17	八紘古墳群	24	立坂弥生墳丘墓
4	秦上沼古墳	11	狩谷遺跡・古墳群	18	二反峠古墳	25	久代大塚古墳
5	秦茶臼山古墳	12	砂子遺跡	19	坊ヶ内遺跡	26	伊与部山弥生墳丘墓
6	奥場２号墳(石塔塚)	13	鬼ノ身城跡	20	高砂遺跡	27	高丸古城跡
7	長砂2号墳(長砂石棺)	14	法正寺１号墳	21	一倉遺跡	28	塩田遺跡

第７図　周辺主要遺跡分布図　（S＝1/40,000）

第３章　確認調査の概要

今回の確認調査は，市指定史跡である１号墳から４号墳の規模と墳形の確認のためのものであった。しかし，保安林事業地内に他の古墳の存在も想定されたことから，古墳の可能性があった６号墳周辺の確認調査もあわせて実施した。また実際に調査のために設置したトレンチ 34 本で内１本は調査時に対象から除外された。

トレンチの番号は通常設定順であり調査の進め方にも係ることから，調査時の番号を維持するため調査対象から除外したトレンチも配置図に反映させた。トレンチ規模は一覧表にまとめた。

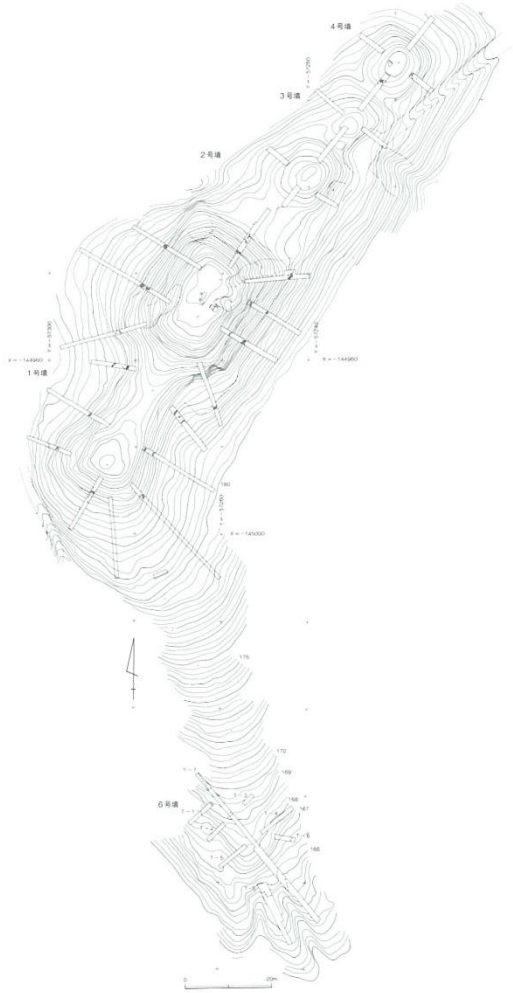


表４　トレンチ規模一覧

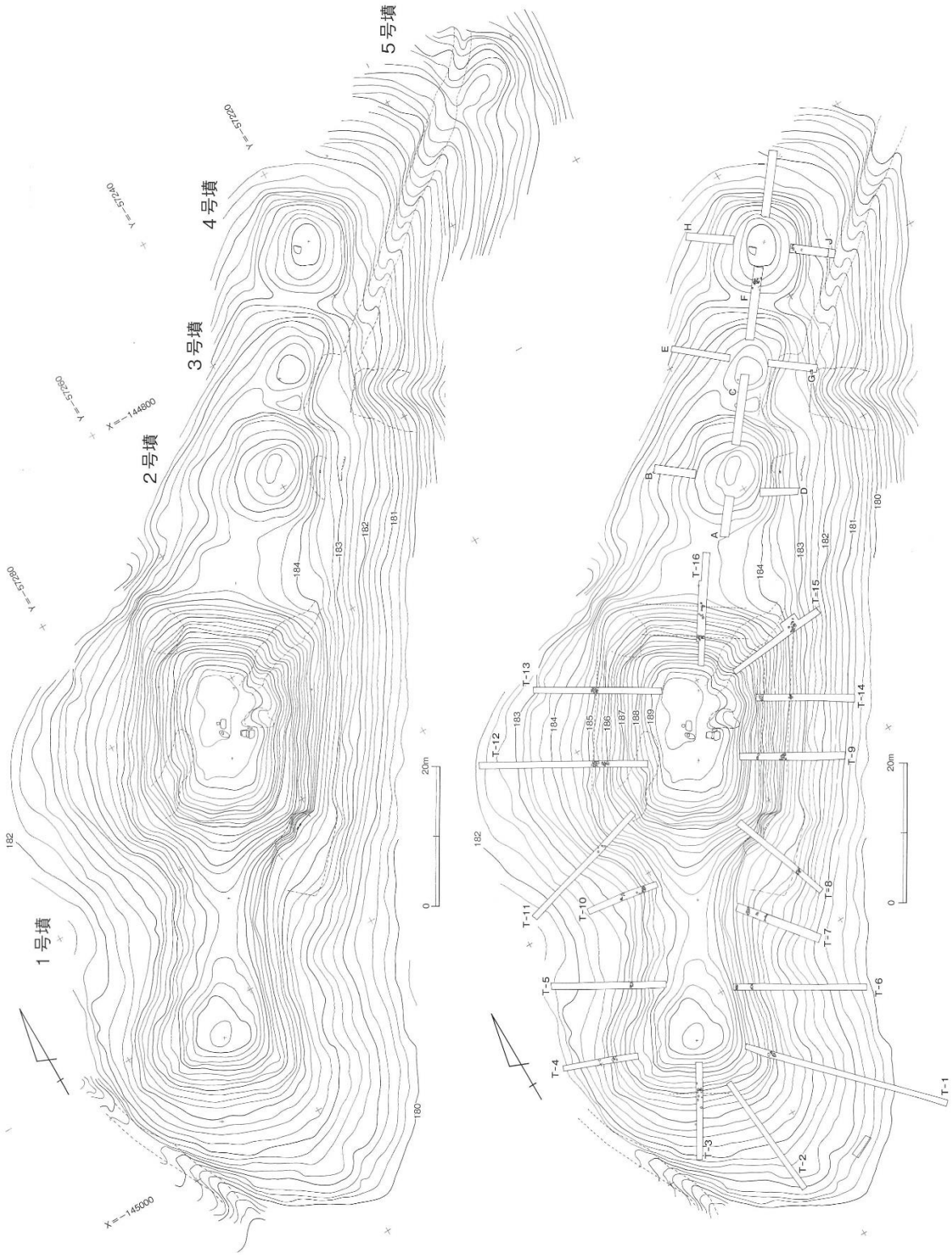
	番号	規模		番号	規模
１号墳	Ｔ－１	29.7 m	２号墳	A	6 m
	Ｔ－２	－		B	5.9 m
	Ｔ－３	13.9 m		C	10 m
	Ｔ－４	11.0 m		D	5.6 m
	Ｔ－５	17.5 m	３号墳	E	8.4 m
	Ｔ－６	19.4 m		G	7.4 m
	Ｔ－７	12.6 m	４号墳	H	6.5 m
	Ｔ－８	16.0 m		I	9.6 m
	Ｔ－９	15.1 m		J	6.1 m
	Ｔ－10	10.6 m		F	10.5 m
	Ｔ－11	20.7 m		小計	76 m
	Ｔ－12	24.5 m	６号墳	①	7.1 m
	Ｔ－13	18.1 m		②	5.3 m
	Ｔ－14	14.0 m		③	2.9 m
	Ｔ－15	15.0 m		④	9.3 m
	Ｔ－16	16.2 m		⑤	8.0 m
	小計	254.3 m		⑥	5 m
				⑦	44.4 m
				⑧	15.5 m
	総計	427.8 m		小計	97.5 m

第８図　確認調査実施全体図（Ｓ＝1/1,600）

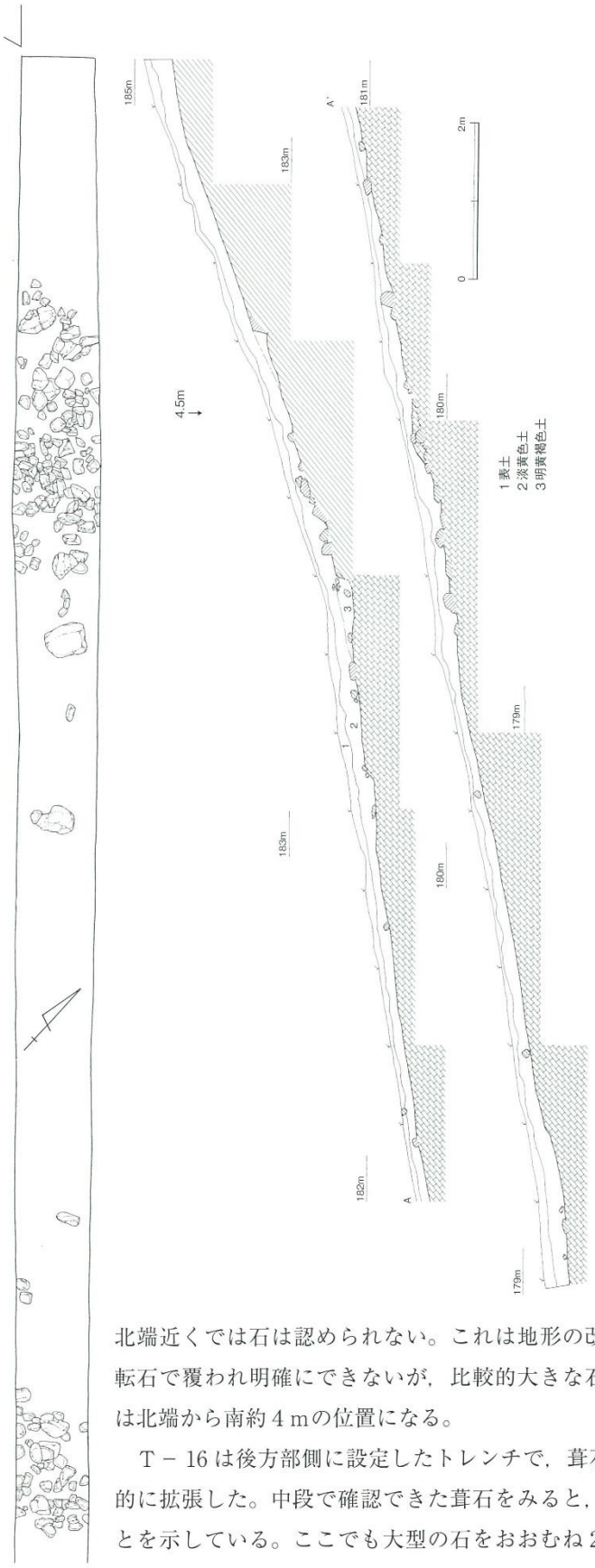
第１節　１号墳（第９図）

１．墳　丘

１号墳の墳形確認のために設定したトレンチは 16 本で，うちＴ－２は保安林内作業許可の関係で調査から除かれたため，図化されたのは 15 本分である。規模は一覧表に示したので，各トレンチの



第９図　墳丘測量図，トレンチ配置図（S＝1/800）



第10図　T－1　平・断面図（S＝1/80）

調査状況のみを記述する。説明の都合上，前方部側を南とし後方部を北とする。また，墳端を検討するうえで東西斜面ごとの順で説明するので必ずしもトレンチ番号順とはなっていない。

T－1（第10図）

このトレンチでは墳丘端近くで石がまとまって出土したが，元の位置と考えられる石は少ないと思える。しかし，傾斜変換部分に集中することから，墳端をこのまとまった石の中で考える必要がある。これより南東は地山が比較的浅く，古墳に伴う遺構は認められない。墳端から約7m離れた位置で石が比較的集中する場所があるが，これも地山の石と理解したい。

このトレンチでは墳端を決めるのは極めて困難であるが，山側端から約4.5mの位置と推定したい。

T－2

設定したが調査対象から除外。

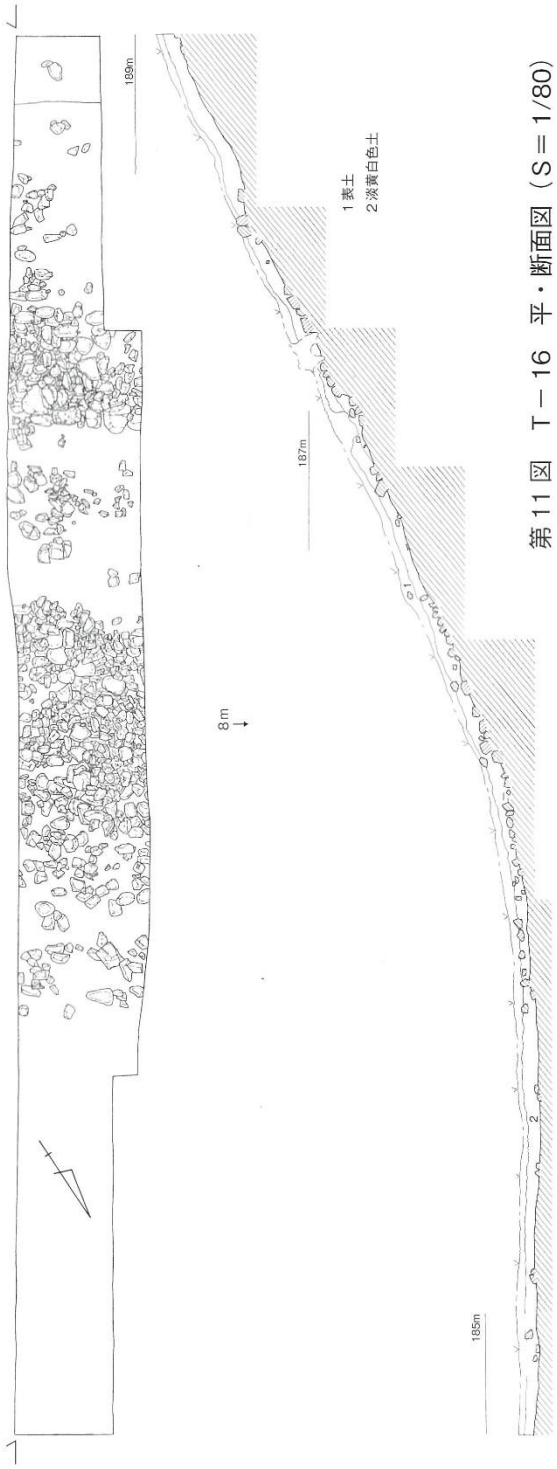
T－3・T－16（第11・12図）

この2本のトレンチは，古墳の主軸に設定したトレンチである。ここではまとめて記述したい。

T－3はもともと北と南に分割していたものを繋げて1本とした。中央から北部分では葺石が転落して集中的に出土しているが，北端近くでは石は認められない。これは地形の改変を受けた影響と考えられる。墳端は転石で覆われ明確にできないが，比較的大きな石が集中する部分で考えたい。具体的には北端から南約4mの位置になる。

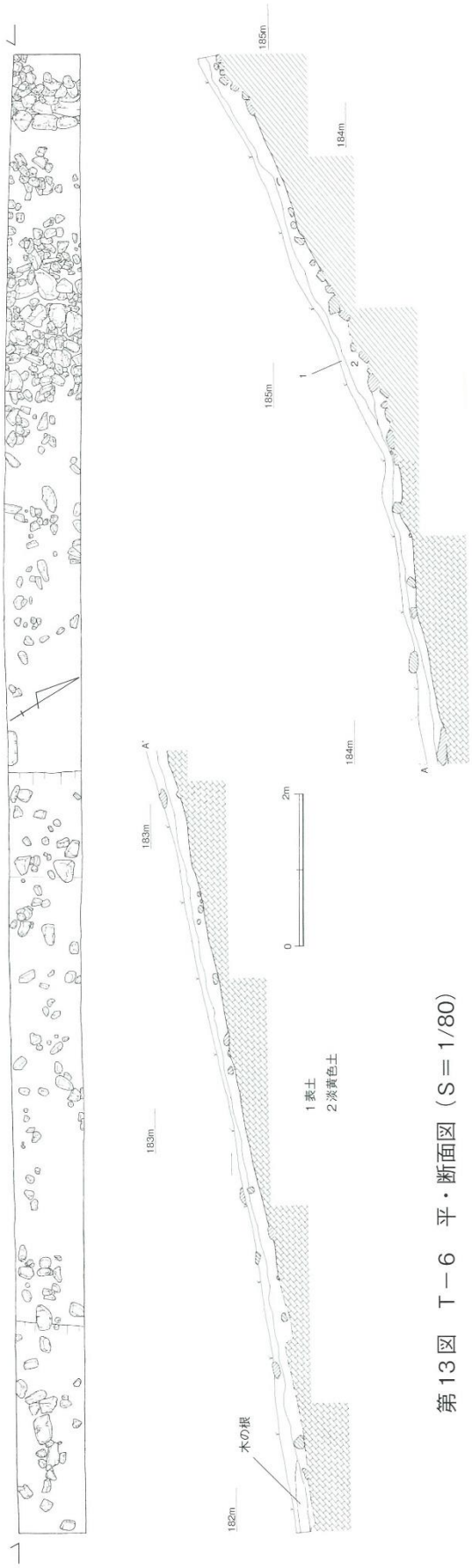
T－16は後方部側に設定したトレンチで，葺石と考えられる石が出土した範囲を部分的に拡張した。中段で確認できた葺石をみると，直線的で後方部の北面が2段であることを示している。ここでも大型の石をおおむね2段重ね，その上に拳大の石を積み上げ

ている。しかし，崩れたためか，元々がそうであったのか葺石は一定幅でしか残存していない。墳端は転石で覆われているが，傾斜が大きく変わる，トレンチ山側端から約８ｍの位置としておきたい。



第11図　Ｔ－16　平・断面図（Ｓ＝1/80）

第12図　Ｔ－３　平・断面図（Ｓ＝1/80）



第13図　T－6　平・断面図（S＝1/80）

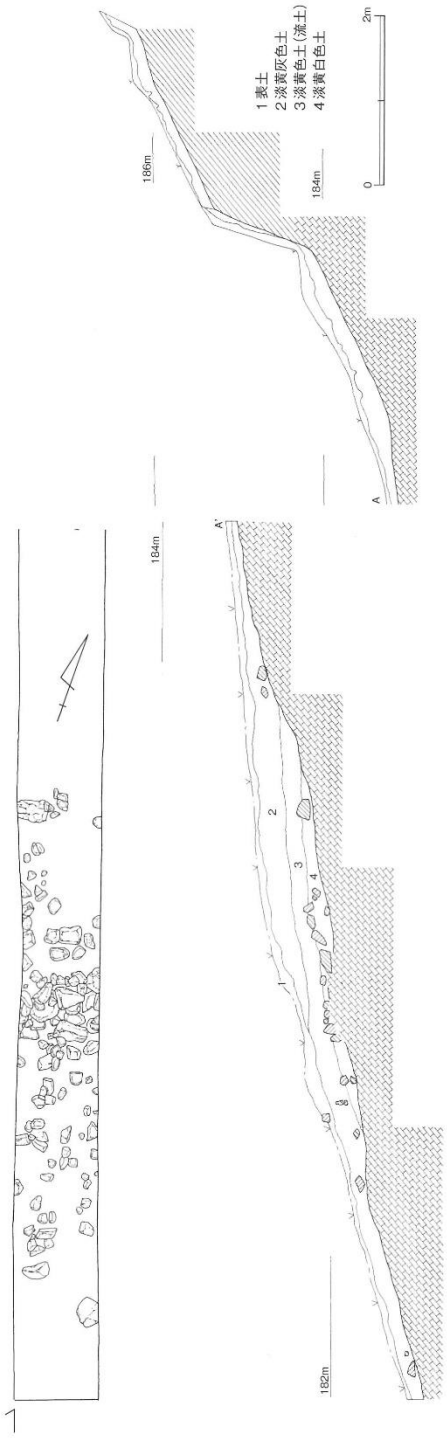
第14図　T－7　平・断面図（S＝1/80）

T－6（第13図）

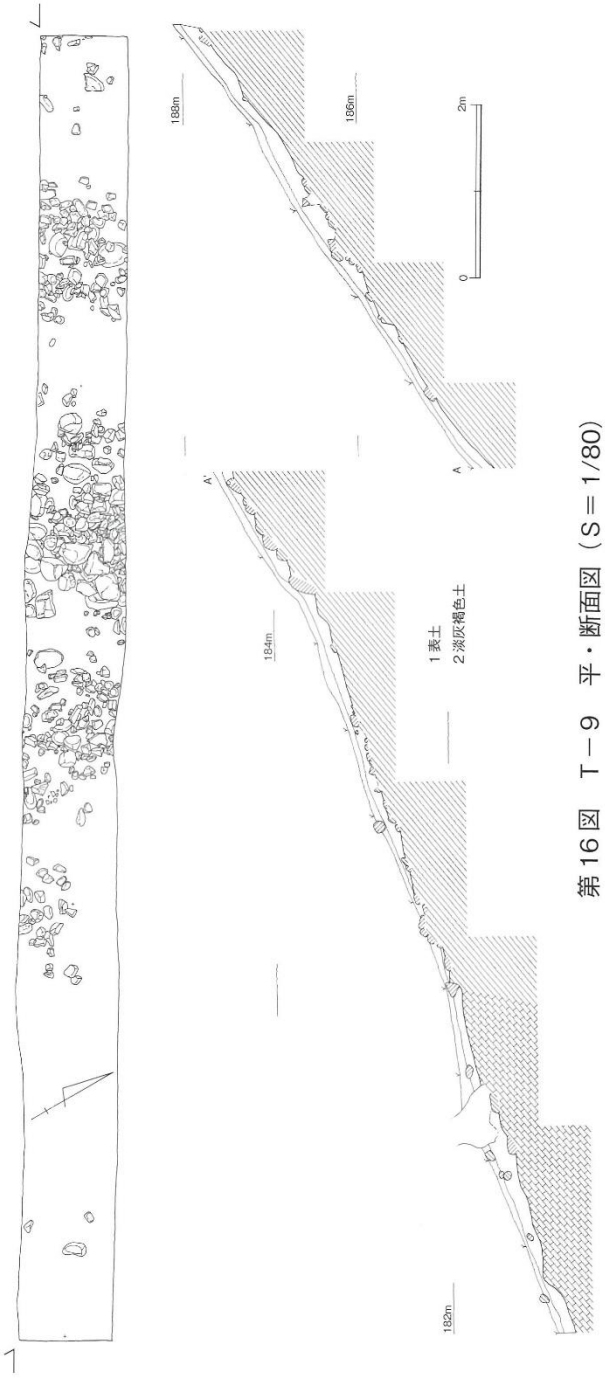
このトレンチはT－1の北，前方部東斜面に設定したトレンチである。トレンチ西端で前方部中段と考えられる葺石が良好に残存している。墳端部分には大型の石が多く見られるが，どの石が基底部をなすのか判然としない。

T－7（第14図）

T－7はT－6の北に設定したトレンチで，トレンチ西端で良好な状態の葺石が検出できた。この葺石はT－6との位置関係から墳端部分になる可能性がある。しかし墳端から東側に多くの石が認められ，この部分に墳端が見つかる可能性も残される。



第15図　T－8　平・断面図（S＝1/80）



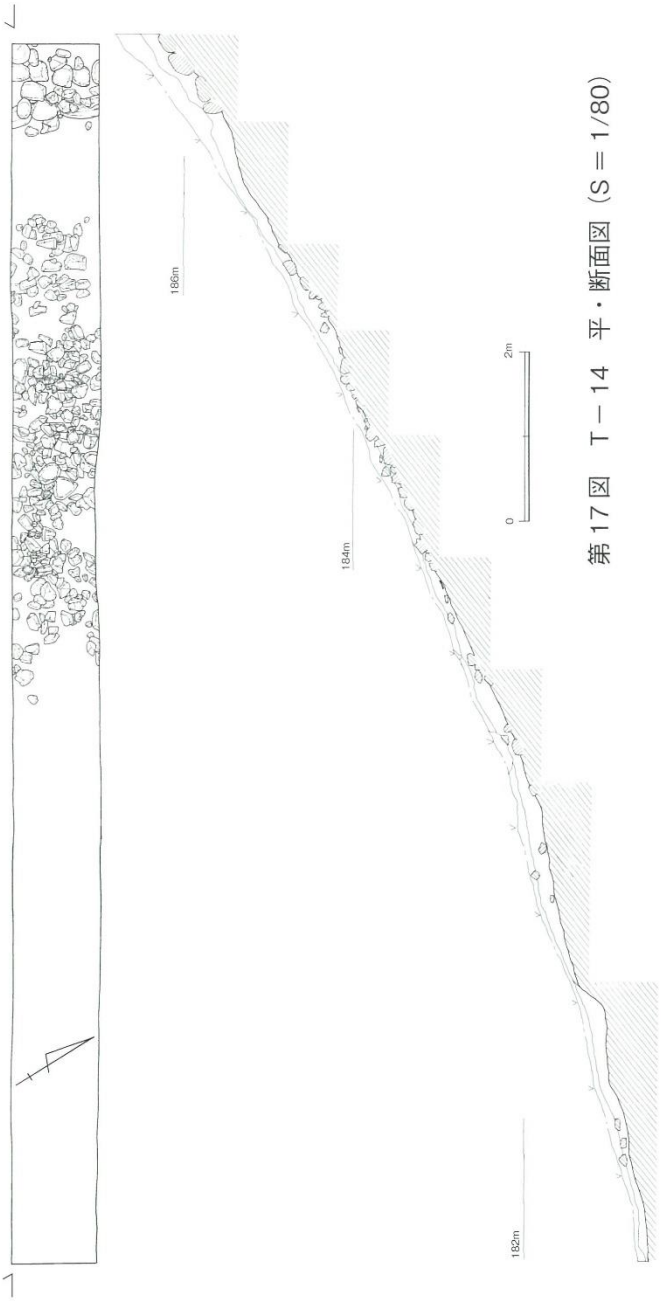
第16図　T－9　平・断面図（S＝1/80）

T－8（第15図）

このトレンチはT－7の北，後方部とのくびれ部付近に設定したトレンチである。北西部分は石仏安置のため山側が大きく削られ，南東部へ平坦部分を設けた石囲いが部分的に見られる。改変が著しく墳端・くびれ部の状態を伺うことはできない。

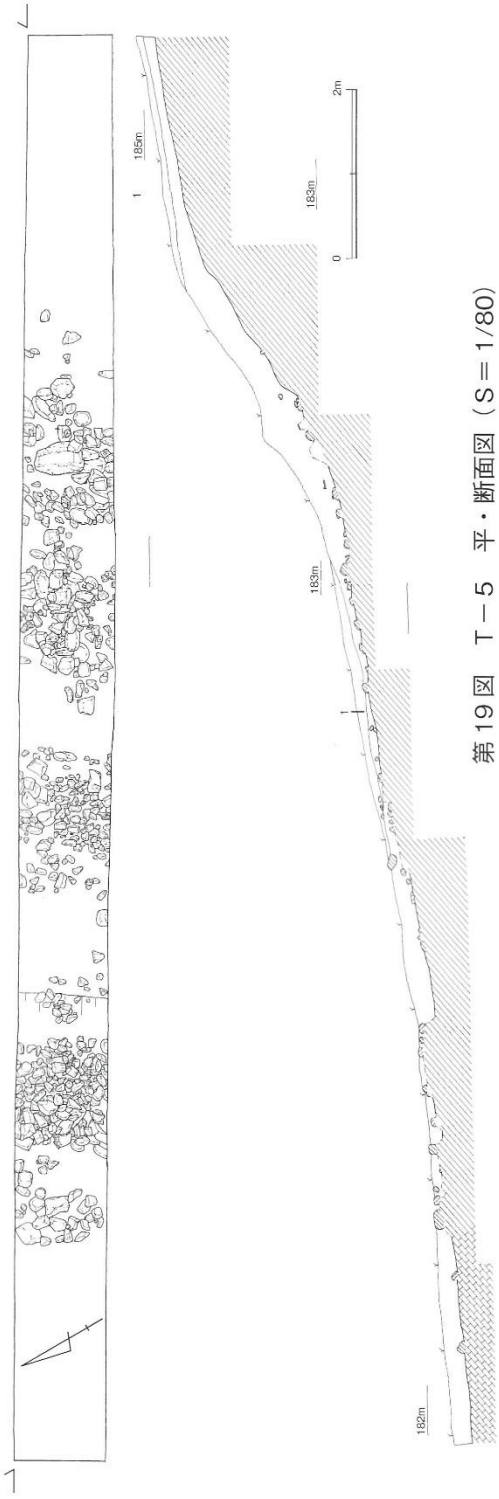
Ｔ－９（第16図）

トレンチの西側，斜面上段付近で集石した部分があり，北のＴ－14の状況からここを中段葺き石と考えたい。トレンチ中央寄りで墳端と考えられる大型の石が認められる。

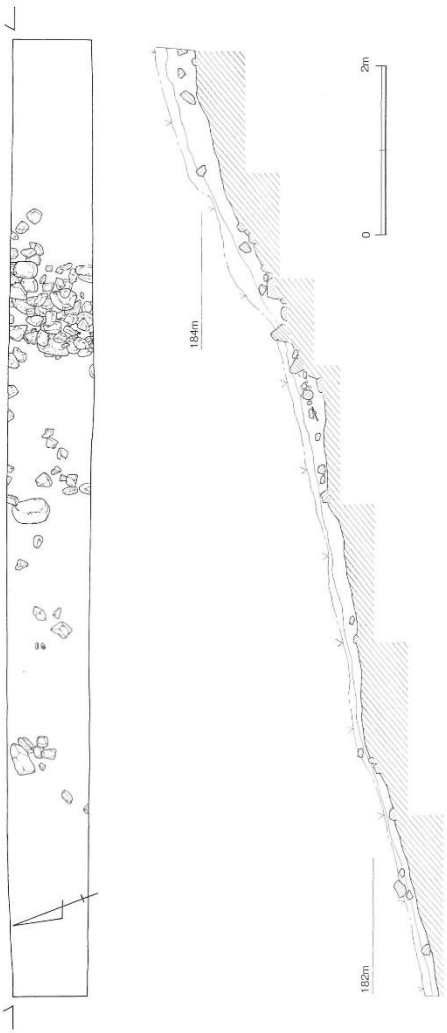


第17図　Ｔ－14　平・断面図（Ｓ＝1/80）

第18図　Ｔ－15　平・断面図（Ｓ＝1/80）



第19図　T－5　平・断面図（S＝1/80）



第20図　T－4　平・断面図（S＝1/80）

T－14（第17図）

T－9の北側で，主軸に直交するトレンチである。西端部分で葺石が比較的良好な形で認められる。中段を構成する葺石部分と考えられる。墳端部分には石が多く認められるが，明確な位置は押さえられていない。

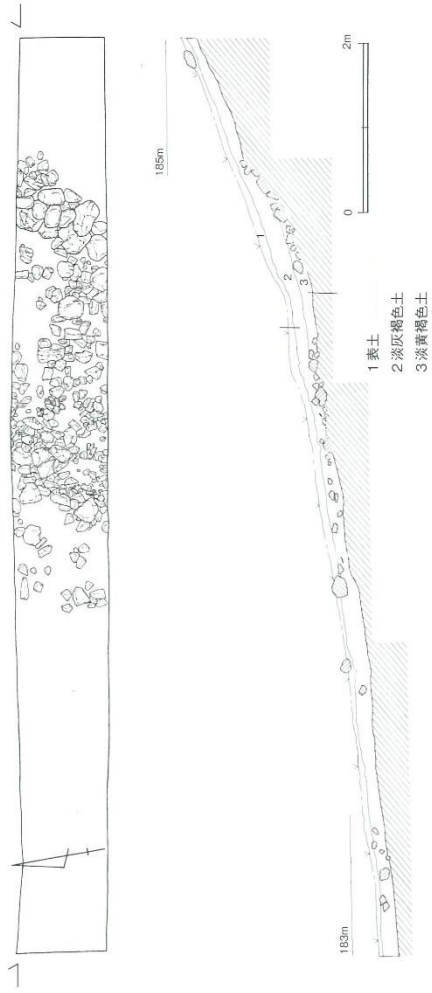
T－15（第18図）

後方部東隅に設定したトレンチである。推定される墳端部分で石がまとまって出土したため部分的に拡張したが，明確な墳端は確認できなかった。この場所は石塔や石仏を巡る山道がすぐ近くにあり，部分的な改変が想定され，中段部分の葺石も認められない。

T－4（第20図）

T－1に対応する前方部西斜面に設置したトレンチである。トレンチ東端から約3.5 mの付近でまとまった石が検出されている。墳丘斜面の傾斜が変化するこの位置が墳端と考えられる。

第21図　T－11　平・断面図（S＝1/80）



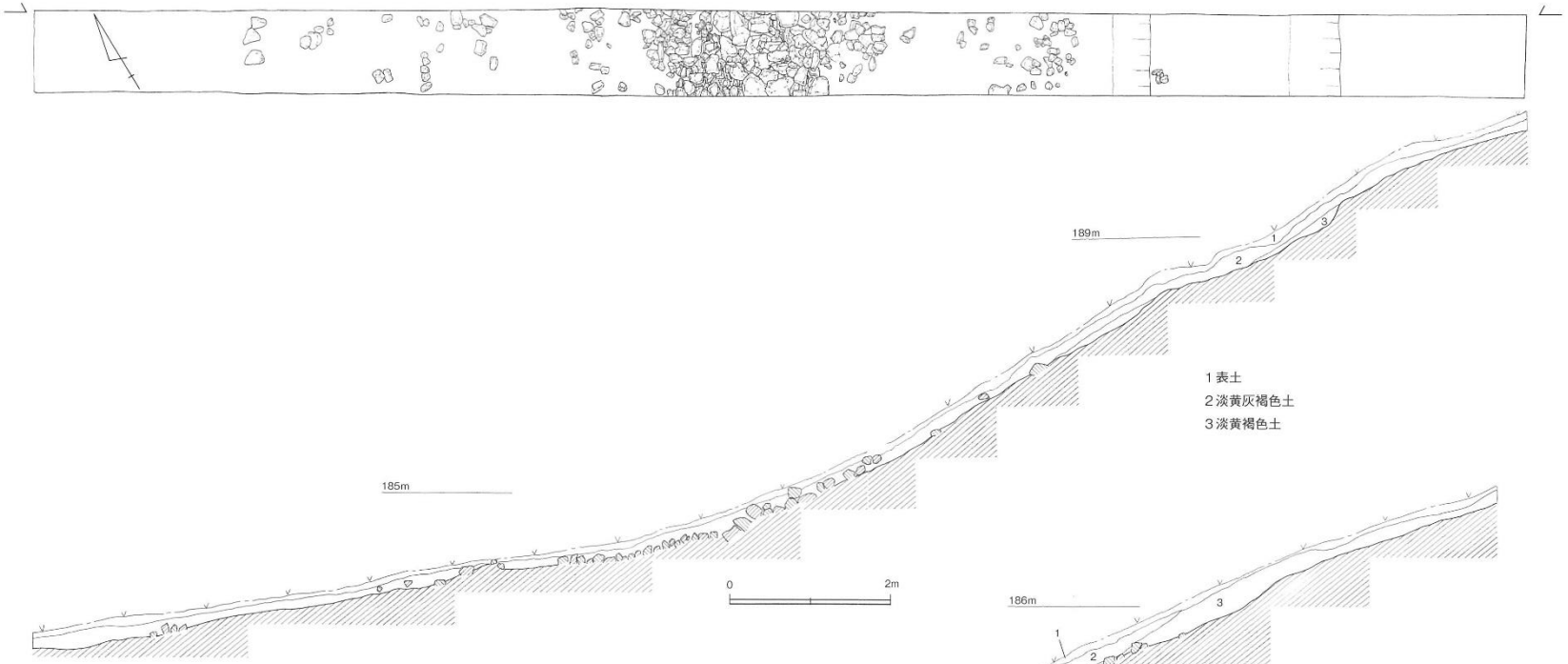
第22図　T－10　平・断面図（S＝1/80）

T－5（第19図）

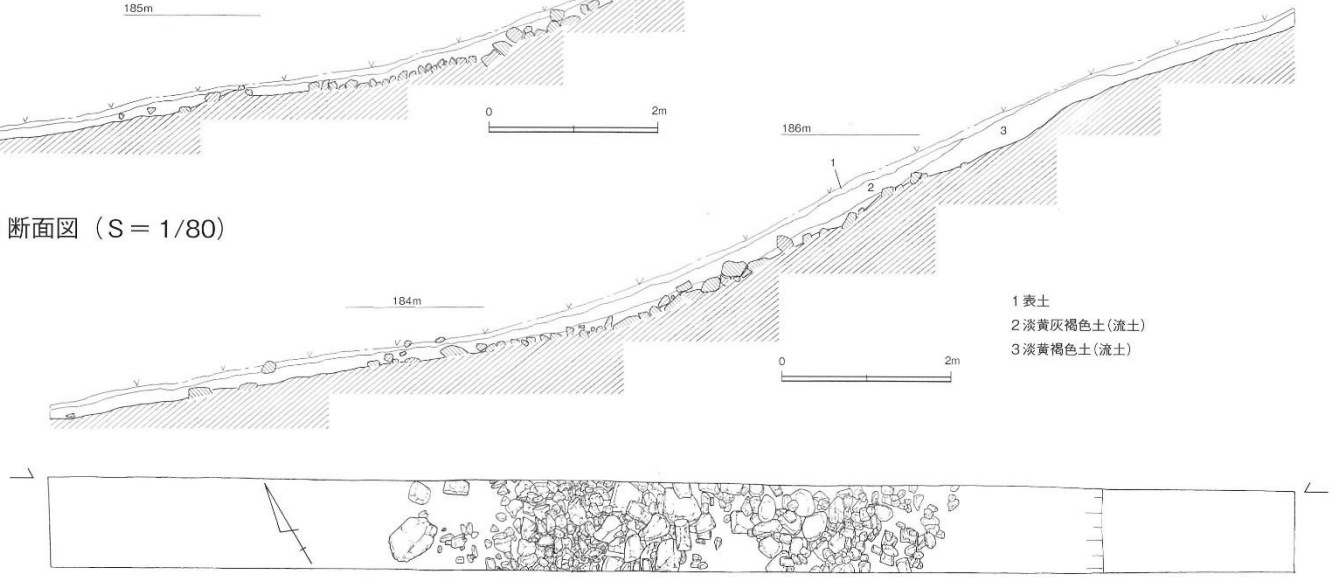
T－4の北側で東面のT－6に対応するトレンチである。ここでもT－4同様にトレンチ東端から約2.5 m付近で石が集中し，墳端を示す大型の石が認められる。このトレンチではさらに西側に3箇所の集石が検出された。このうち西側2箇所は人為的に集積されたものと考えられるが，部分的であり同様の集積が他のトレンチには見られないことなどから，1号墳との関係は不明である。

T－10（第22図）

西斜面でくびれ部近くに設定したトレンチである。ここでは墳端と考えられる葺石が比較的良好に残存している。ここでの前方部幅は約16 mを測る。



第23図　T－13　平・断面図（S＝1/80）



第24図　T－12　平・断面図（S＝1/80）

Ｔ－11（第21図）

後方部西南角に設定したトレンチである。葺石と考えられる石が極めて少なく，墳端（南西角）の位置と形状は明確ではない。

Ｔ－12（第24図）

後方部西斜面で東斜面Ｔ－９に対応するトレンチである。ここでも墳端と考えられる場所で大型の石が集中して出土している。墳端は明確ではないがＴ－12・９間では後方部幅約28ｍを測る。

Ｔ－13（第23図）

Ｔ－12の北で東斜面Ｔ－14に対応するトレンチである。ここでも墳端付近で大型の石が集中する。墳頂近くまでトレンチを延ばしているが中段の葺石は検出していない。

以上の状況から１号墳は墳端を明確にしていないが，全長約70ｍ，前方部幅約16～23ｍ，後方部幅約28ｍの前方後方墳と考えられる。この数値は現在調査で判明しているもので，将来変更があるものと思われる。

（高橋進一・谷山）

2．出土遺物

埴　輪

1号墳出土の埴輪は破片総量でコンテナ約6箱分あり，特殊器台形埴輪，普通円筒埴輪，朝顔形円筒埴輪，壺形埴輪，器台形埴輪のほか，図化していないが不明形象埴輪がある（第25～28図，巻頭図版2，図版12・13）。

1～7・34は特殊器台形埴輪に類するもの，および古式の円筒埴輪である。1は突帯の下位に巴形透孔を開けているが，文様をもたず，口縁部は二重口縁状にならない古式の円筒埴輪である。2・4・6・7の透孔も巴形（円形）と考えられ，小片であるが，4・6・7は透孔の周囲に蕨手文様と思われる線刻が観察できる。34は突帯上位に三角形と巴形（円形）の透孔が隣り合って開けられており，それぞれほとんど同じ高さに配置されている。文様がないために透孔の間隔が狭いと思われ，1と同様に古式の円筒埴輪とみなせるものである。2・3は外面に赤色顔料がみとめられる。なお，右上がりもしくは右下がりの斜線文が施されたものはなく，省略されている可能性がある。

8～33・35～38は円筒埴輪の胴部である。突帯の形状は，9～20のように箱形に近いもの，11・21～29のように大きく突き出すもの，30・33・35～37のように比較的扁平なものなど一様でない。10・12・14・21・38には方形（三角形）の透孔が穿たれている。外面は基本的にナデで仕上げられており，9・12などのごく一部にハケ目が観察できるが明瞭でなく，入念に撫で消されていると考えられる。内面も同様の状況であるが，9・10・13・19・33・38はヘラケズリが施されており，古手の様相といえる。8・10・11・16・33などは赤色顔料が塗布されている。

39～50は朝顔形，壺形，器台形の口縁部から頸部にかけての部分である。39～44・46・48・49は朝顔形である。二重口縁の基部付近が，39・46のように撫でつけや凹線によって強調されるもの，40～43のように稜をもつもの，44のように下方へ突き出すものがある。内外とも基本的にヨコナデによって調整されており，42・44・46などは外面に赤色顔料がみとめられる。

45・47は壺形である。45は二重口縁の基部付近が突き出す形状である。風化が著しいが，内外ともヨコナデにより調整されている。

50は器台形である。口縁部は基部付近では貼り合わせによって厚みをもち，一見すると壺形のようにも思えるが，端部が垂直に近い角度で立ち上がる。口縁部付近はヨコナデによって整えられるが，胴部内面には粘土の継ぎ目と指頭圧痕が残る。また，外面には赤色顔料が塗布されている。

51～57は基部である。51～56は円筒と考えられる。51～53・55・56などは端部付近をヨコナデで仕上げているが，51のみヘラケズリとハケを先に施している。57は壺形と考えられるが，角度が比較的急であり，円筒になる可能性もある。内面をヨコナデ，外面をタテナデによって整えている。

ほかに，図化していないが不明形象埴輪が出土している（図版13－58）。金雲母や大粒の角閃石を多量に含むなど他の埴輪と比べて胎土の特徴が明らかに異なり，調整も内面ハケ目を主体とするなど，異質なものである。かなり厚手であることや破片量などから大型品になることが想定されるが，接合せず，全形や部位などが判断できない。器壁が急角度で折れ曲がりそうな箇所があり，土器棺と考えることも難しいことから，ここでは不明形象埴輪として報告しておく。

小　結

特殊器台形埴輪は岡山県内においては，岡山市の都月坂1号墳[1]，七つ坑1号墳[2]，中山茶臼山古

墳[3]，浦間茶臼山古墳[4]，網浜茶臼山古墳[5]，操山109号墳[6]や，倉敷市の矢部大坑古墳[7]，矢部堀越遺跡[8]，矢部B 42号墳[9]などで出土が知られているが，総社市域における出土は初例となる。

一丁坑1号墳では，蕨手文の残る個体がある一方で，巴形と三角形の透孔のみを特徴として残す古式の円筒埴輪も含まれており，3～7も特殊器台形埴輪としては最終時期に下るものと考えられる。

普通円筒埴輪に関していえば，方形・三角形透孔のあるものが含まれており，突帯の形状や器壁の厚みは一様でなく，不統一的といえる。さらに，外面ヨコハケがなく一時調整のハケを入念に撫で消している，内面調整としてヘラケズリを施すものが少数あるなど，古手の特徴を示している。特殊器台形埴輪と普通円筒埴輪の間で調整等の特徴に極端な差もみられず，比較的短い期間でまとまって製作されたと考えることができる。時期は4世紀前半頃を想定できる。（村田）

註

(1) 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号　考古学研究会　1967年

(2) 近藤義郎編『七つ坑古墳群』七つ坑古墳群発掘調査団　1987年

(3) 近藤義郎「中山茶臼山古墳」『岡山県史』第18巻　山陽新聞社　1986年

(4) 1）宇垣匡雅「吉備の前期古墳　－Ⅰ浦間茶臼山古墳の測量調査－」『古代吉備』第9集　古代吉備研究会　1987年

2）近藤義郎・新納　泉編1991『浦間茶臼山古墳』真陽社　1991年

(5) 宇垣匡雅「特殊器台形埴輪に関する若干の考察」『考古学研究』第31巻第3号　考古学研究会　1984年

(6) 上掲註4文献

(7) 1）白石太一郎ほか「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集　国立歴史民俗博物館　1984年

2）陵墓調査室「大吉備津彦命墓採集の遺物について」『書陵部紀要』第62号陵墓編　宮内庁書陵部　2011年

(8) 浅倉秀昭「矢部堀越遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』6　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1993年

(9) 井上　弘「矢部古墳群B」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』6　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1993年

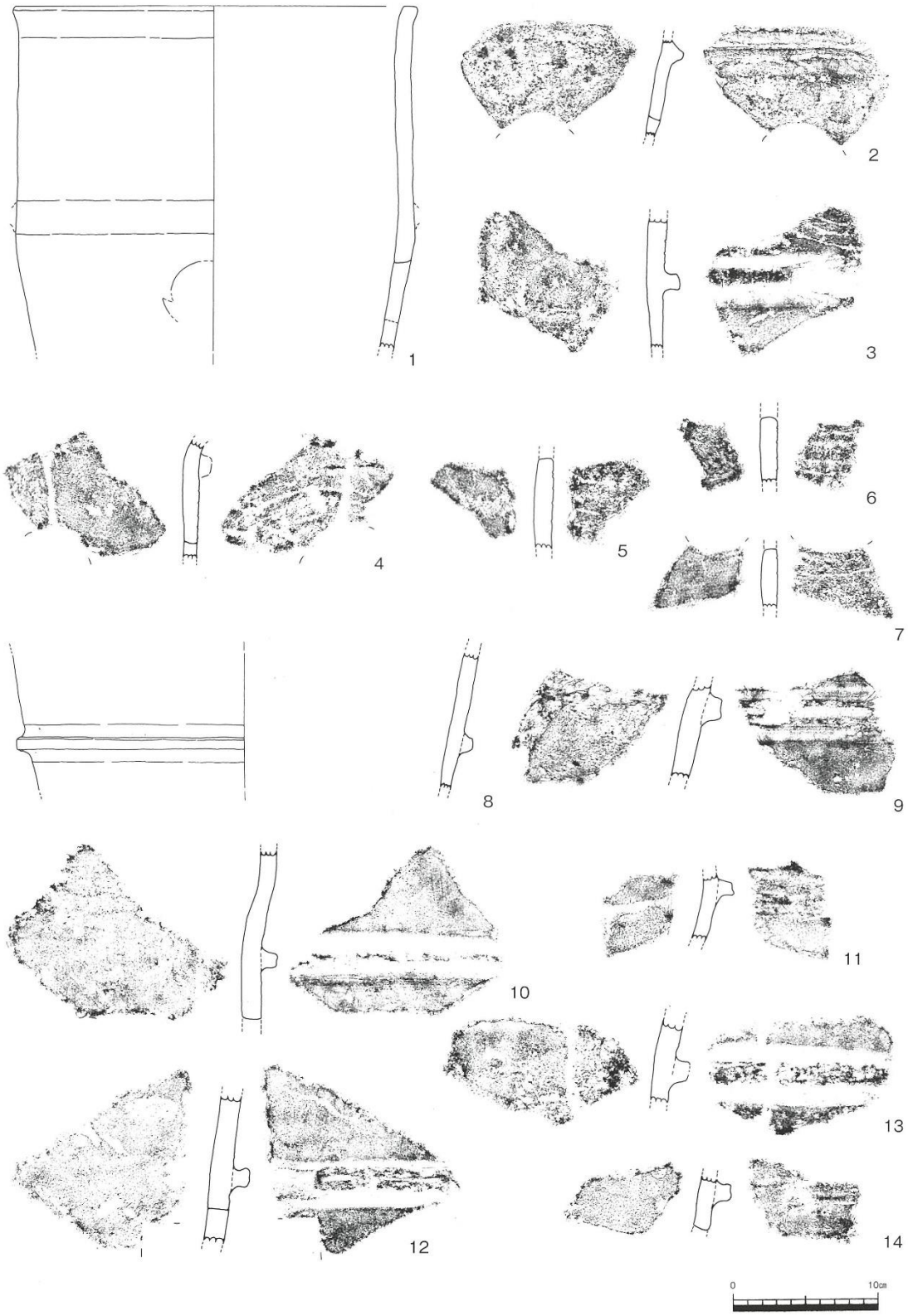
参考文献

1）宇垣匡雅「特殊器台形埴輪に関する若干の考察」『考古学研究』第31巻第3号，考古学研究会　1984年

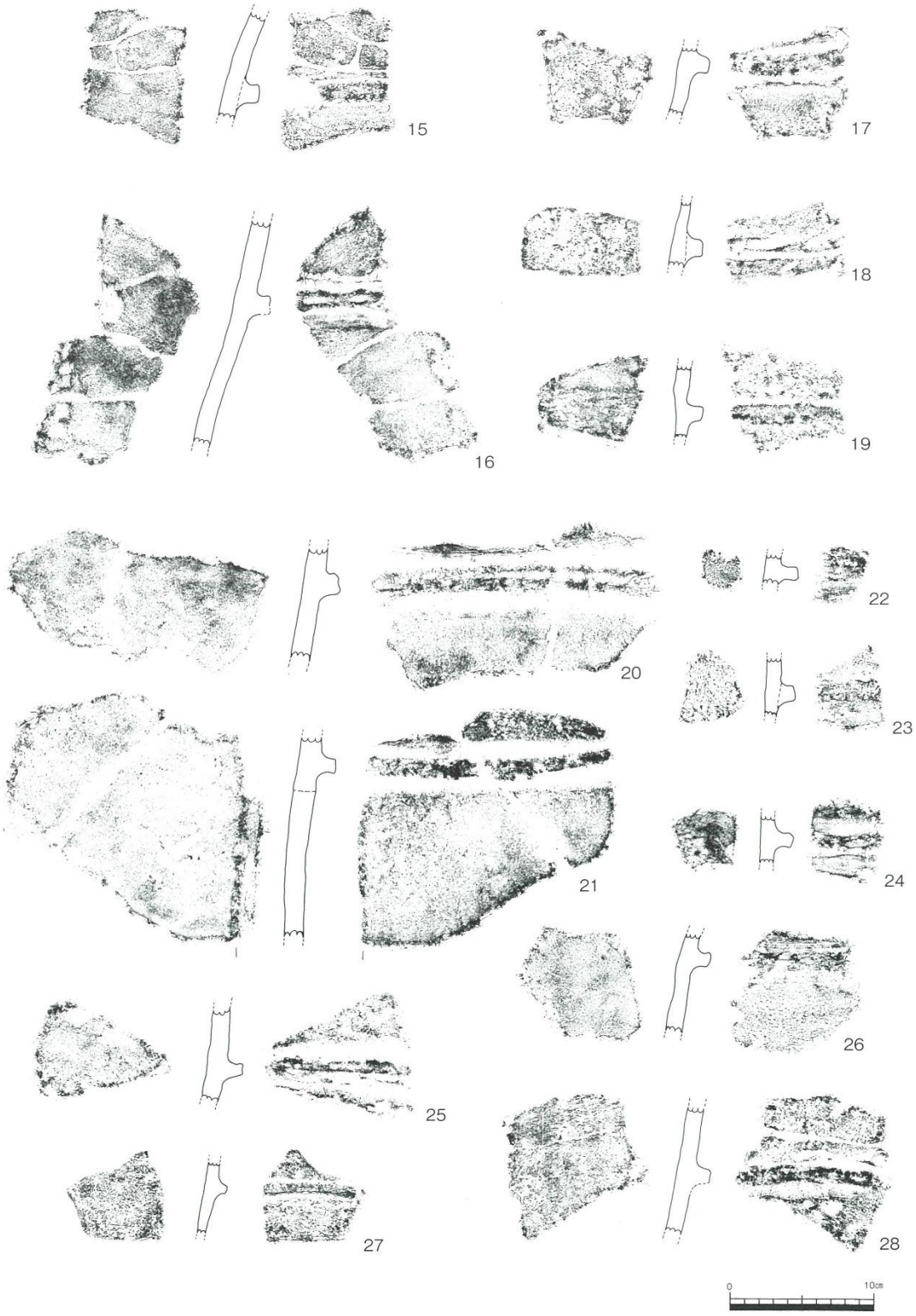
2）宇垣匡雅「吉備の前期古墳　－Ⅱ宍甘山王山古墳の測量調査－」『古代吉備』第10集　古代吉備研究会　1988年

3）川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号　日本考古学会　1978年

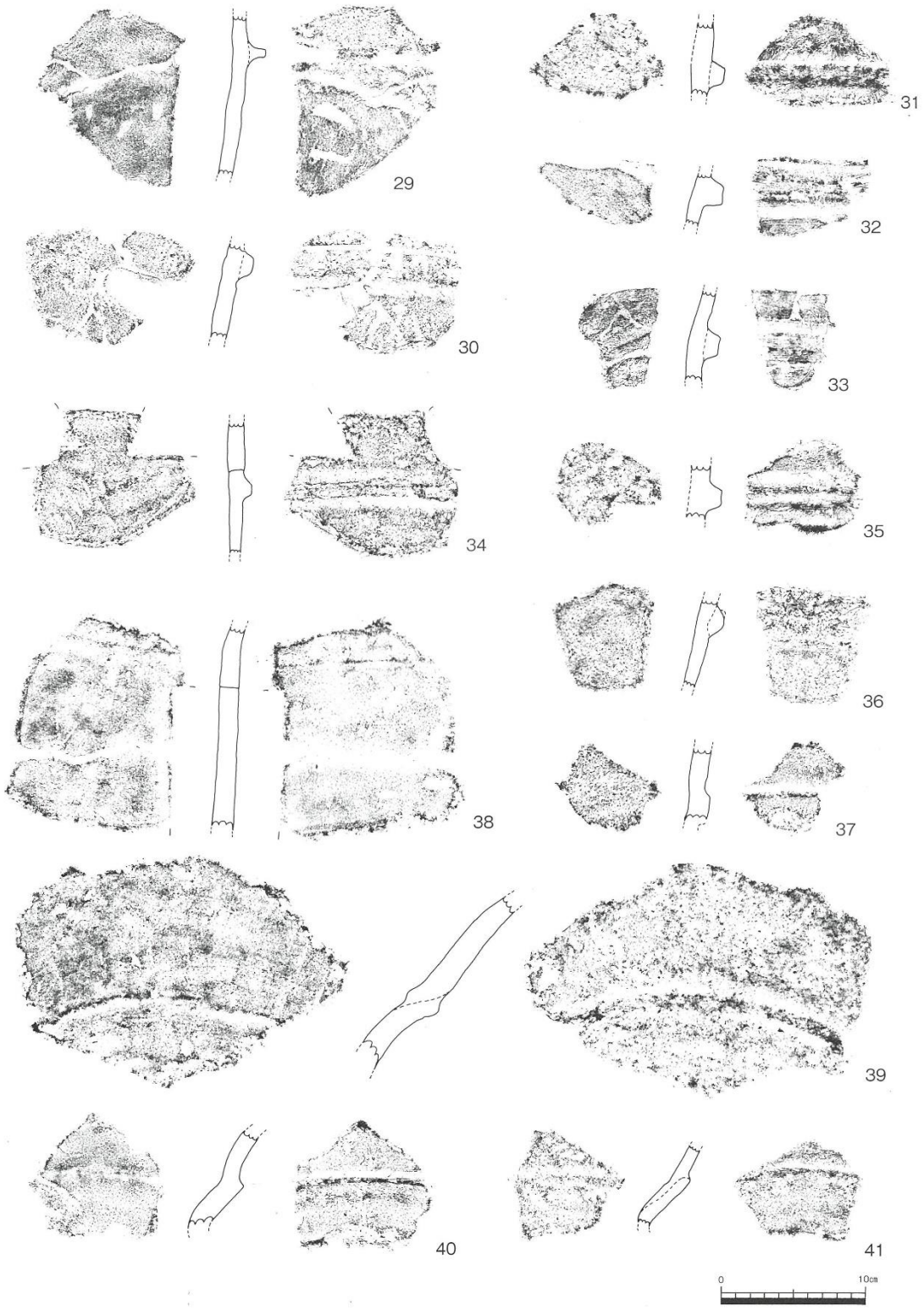
4）安川　満「特殊器台形埴輪にみる畿内と吉備」『古代文化』第59巻第4号　古代学協会　2008年



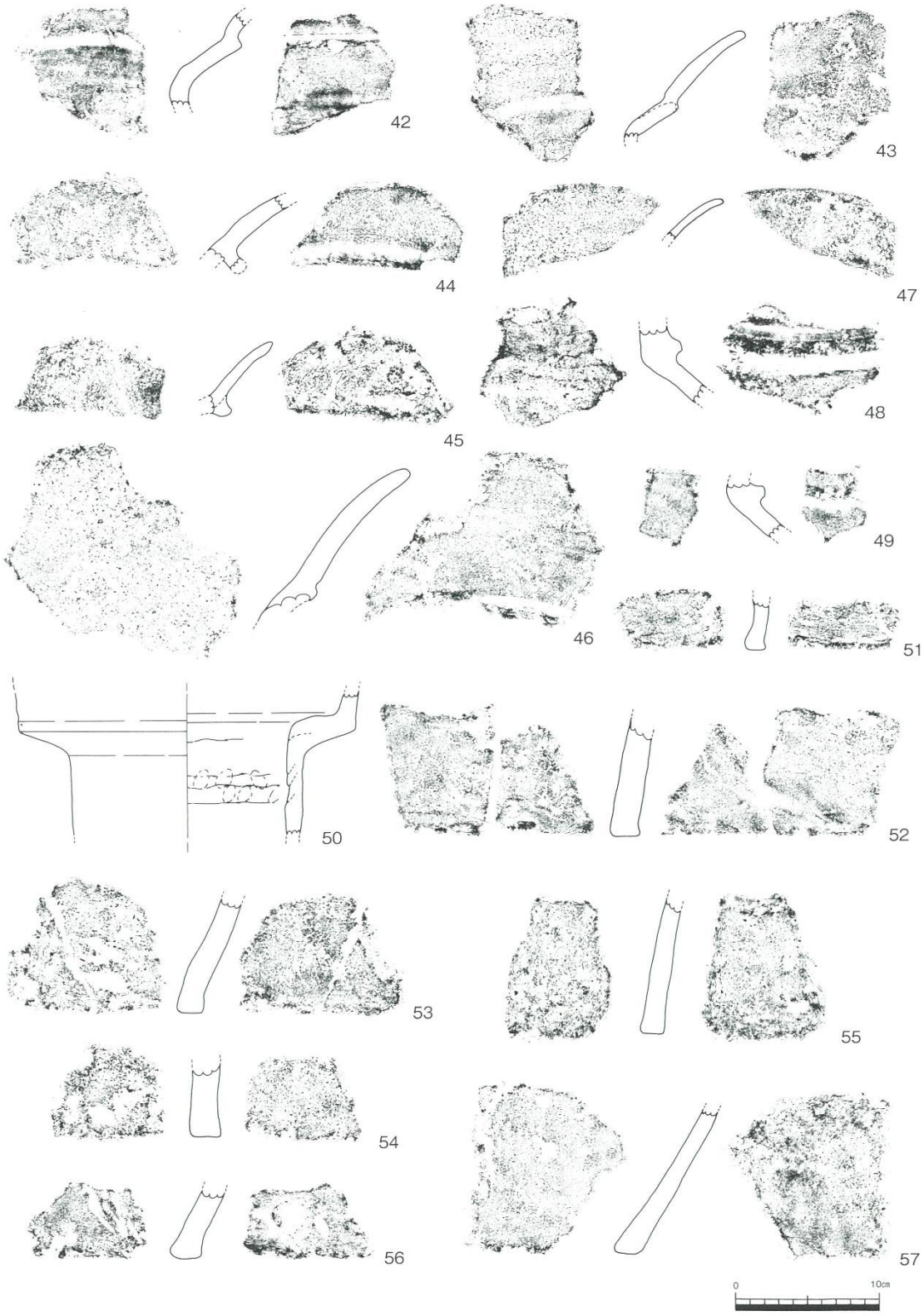
第25図　一丁坑1号墳出土埴輪①（S＝1/4）



第26図　一丁坑1号墳出土埴輪②（S＝1/4）



第27図　一丁坑1号墳出土埴輪③（S＝1/4）



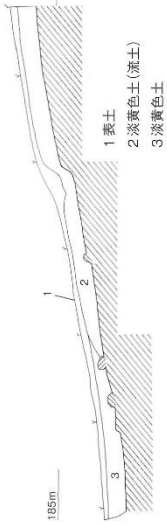
第28図　一丁坑1号墳出土埴輪④（S＝1/4）

第２節　２号墳（第９図）

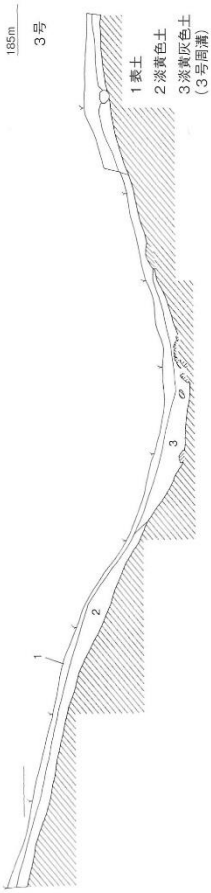
２号墳は１号墳の北東約 10 ｍの位置にある円墳である。墳丘の東側は石仏を設置する際に若干削っていている。また，墳頂部に盗掘抗と思われる窪みが認めれる。葺石・埴輪共に認められないが，周溝の位置から南北約 16 ｍ，東西約 14 ｍを測る。形状は楕円形を呈する。

第３節　3号墳（第９図）

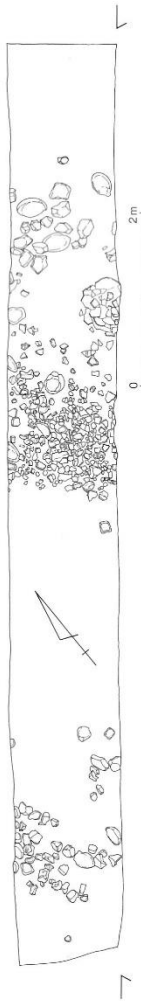
３号墳は２・４号墳の中間に位置する。小さい谷が東から入り込むため，墳丘東側を削り谷頭を埋め道としている。墳丘西側は自然の傾斜のみで明確な周溝の段がないことなどから古墳である確証はない。自然丘陵の残丘である可能性もある。出土遺物はない。

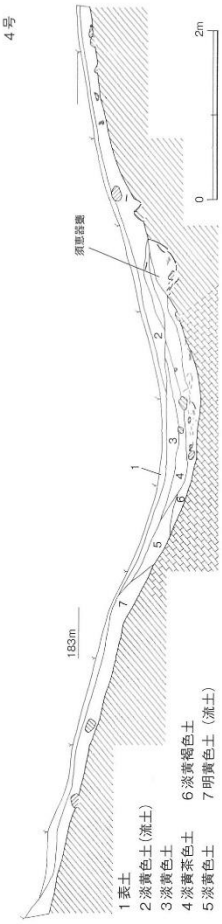


第29図　トレンチＡ断面図（Ｓ＝1/80）

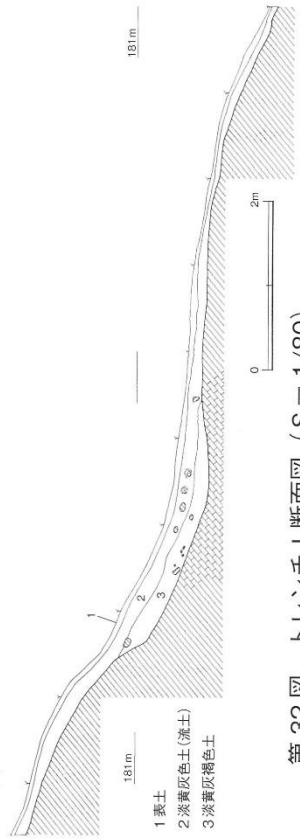


第30図　トレンチＣ断面図（Ｓ＝1/80）





第31図　トレンチＦ平・断面図（Ｓ＝1/80）



第32図　トレンチＩ断面図（Ｓ＝1/80）

第33図　2号墳　トレンチB・D断面図（S＝1/80）

第34図　3号墳トレンチE・G断面図（S＝1/80）

トレンチJ平面図

第35図　4号墳トレンチH・J断面図（S＝1/80）

第4節　4号墳（第9図）

1．墳　丘

4号墳は1号墳が所在する丘陵頂部の北先端に位置する。地山を掘り込む明確な周溝を持ち，埴輪・須恵器が出土している。埴輪には人物・馬などの形象埴輪もある。墳丘中心部分に石室があり，天井石が露出している。周溝内から出土した須恵器片の大半は墳丘南に置かれた大甕のものであった。周溝の位置から南北約15 m，東西約14 mを測る方墳である。出土した遺物から5世紀後半の時期と考えられる。

（高橋・谷山）

2．出土遺物

埴　輪

４号墳出土の埴輪は破片総量でコンテナ約10箱分あり，普通円筒埴輪，朝顔形円筒埴輪，馬形埴輪，人物形埴輪などの器種がある。

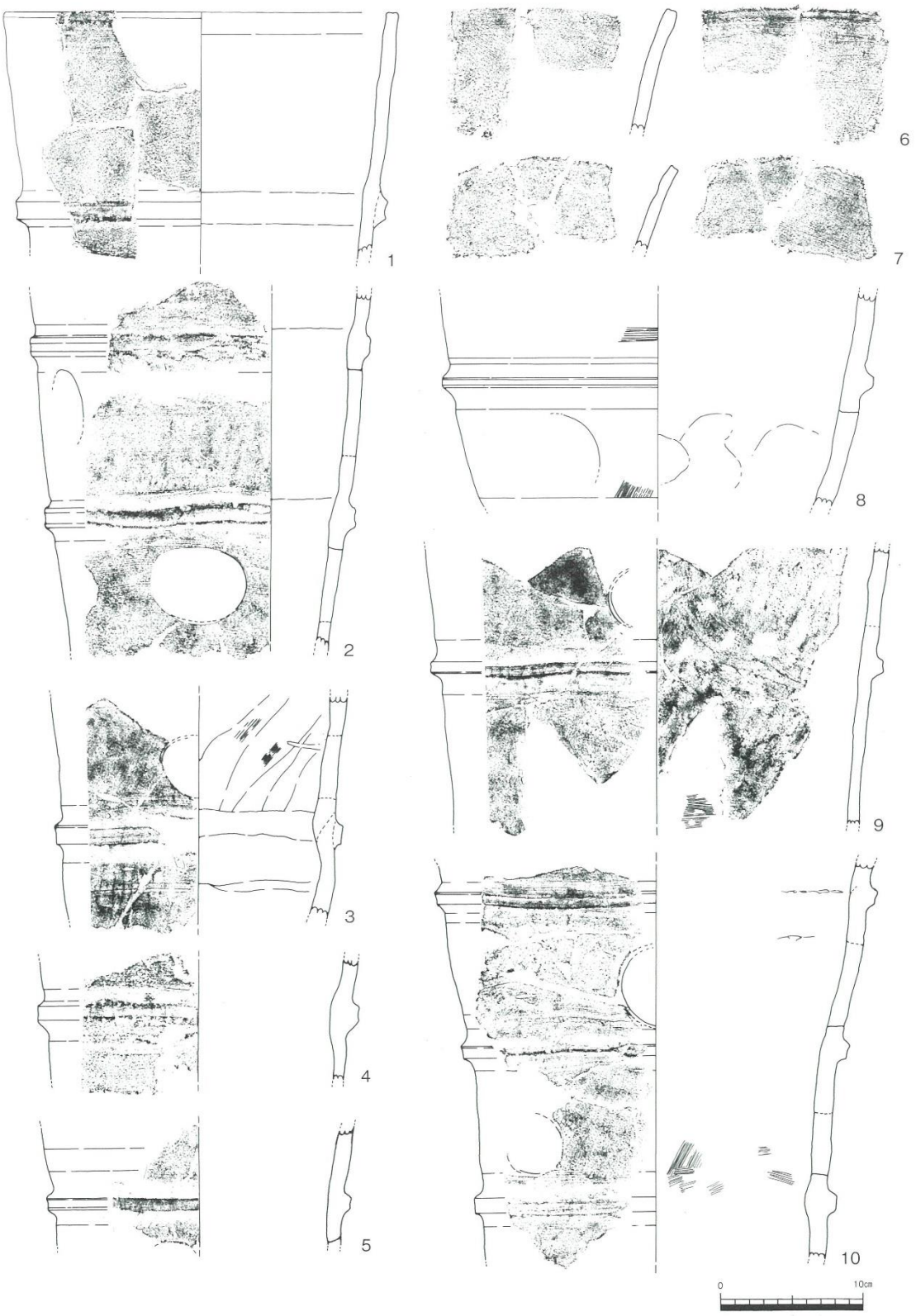
円筒埴輪には，普通円筒，朝顔形円筒の２種がある（第36～41図，図版14・15）。埴質のものを中心とするが，須恵質のものが若干混じる。外面調整としてＣ種ヨコハケを施すものが少量あり，ほかは一次調整としてタテハケあるいはナナメハケを施し，二次調整を欠いている。内面に刷毛目を観察できるものは少なく，強弱のナデで整えるものが大半である。粘土紐の継ぎ目が明瞭に残るものもあり，仕上げは粗い。突帯の形状は定形的であり，一様に突出度合いは低い。透孔はすべて円形である。「×」字状，三角形，重弧状などのヘラ記号を施すものが含まれるが，少量であり，調整その他の特徴との相関性は見出しづらい。基底部に注目すると，自重で歪んだかのような個体も散見される一方で，基底部調整を施す明瞭な例はない。以上の特徴から，４号墳出土の埴輪群は，川西編年Ⅳ群からⅤ群[1]へ移り変わる時期のものと評価できよう。

１～15は外面二次調整としてＣ種ほかのヨコハケを施す埴輪である。１・２は「×」字状のヘラ記号を施しており，２・10を見る限り，円形の透孔は各段で位置を違えて穿たれるようである。13～15は朝顔形の口縁基部であり，15のみ内面にヘラケズリが観察される。

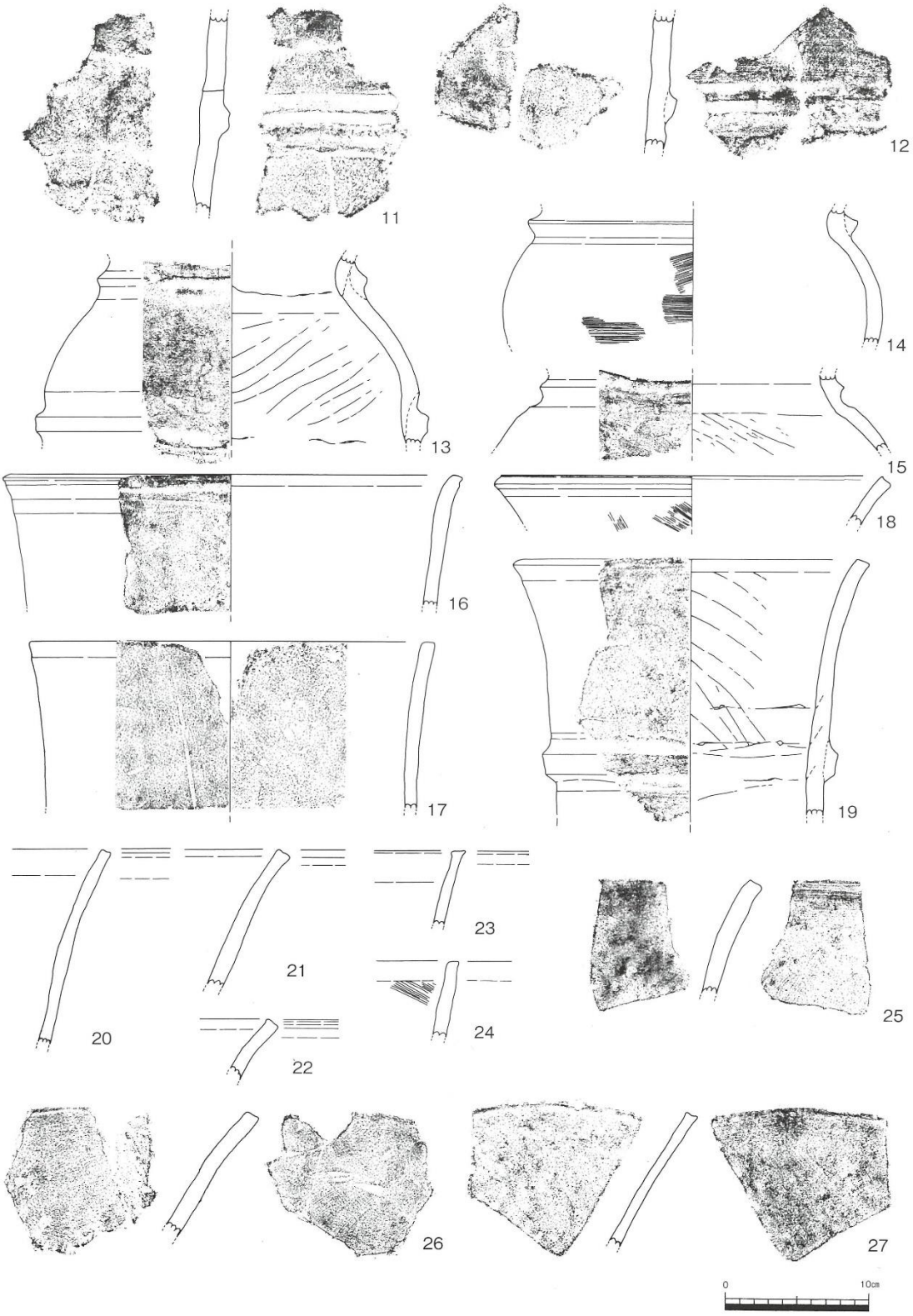
16～83は外面二次調整を行わない埴輪である。16～28は口縁部である。16・17・24などやや直立気味になるものもあるが，すべて外反し，端部は肥厚せず箱形に収まっている。29～61は胴部である。外面はタテハケあるいはヨコハケにより整えられ，内面は基本的にナデで仕上げられており，ハケは部分的に施される程度である。56･58～61はヘラ記号が施されている。56はおそらく三角形，58は円弧状，59・60は直線状，61は重弧状であり，ヘラ記号も数種類が存在したようである。62～75は基底部にかけての部分である。つくりの粗雑なものが多いためか端部の断面形態は一定せず，64・72のように自重のためか歪んでいるものが含まれる一方，明瞭な基底部調整を施すものはみられない。76～83は朝顔形埴輪の口縁にかかる部分である。76は二重口縁の立ち上がり部であるが，接合を高めるため刻み目を施す工夫がみられる。同部分の形状にも，77～80のように箱形の突帯状に張り出すもの，81のように張り出さないものなどの種類がみられる。

形象埴輪としては，馬形，人物形が出土している[2]。84は馬形埴輪である（第42図，巻頭図版２）。埴質で焼きが悪く，接合もできないが，特徴的な部位について図化することができた。上顎には面繋が表され，断面Ｔ字状の鬣の先端は錐揉み状にねじって表現される。鉸具のような部位も出土している。脚の基部や尻部には透孔が開けられている。尻尾には突帯がらせん状に取り付けられている。外面の頭部から頸部にかけては強いナデ，胴部の大半は長いストロークのハケによって整え，下腹部から脚の基部にかけては硬質の原体を用いたミガキのような調整で仕上げている。内面の頭部から頸部にかけてはナデと指頭圧，胴部にはヘラケズリが施される。ほかに，扁平な板状の部位が出土しているが，全体を観察する限りは，本個体は鞍や障泥その他の馬具を備えていない裸馬であると考えられるため，どの部位にあたるか不明である。腹部下面の可能性もあるが，判然としない。

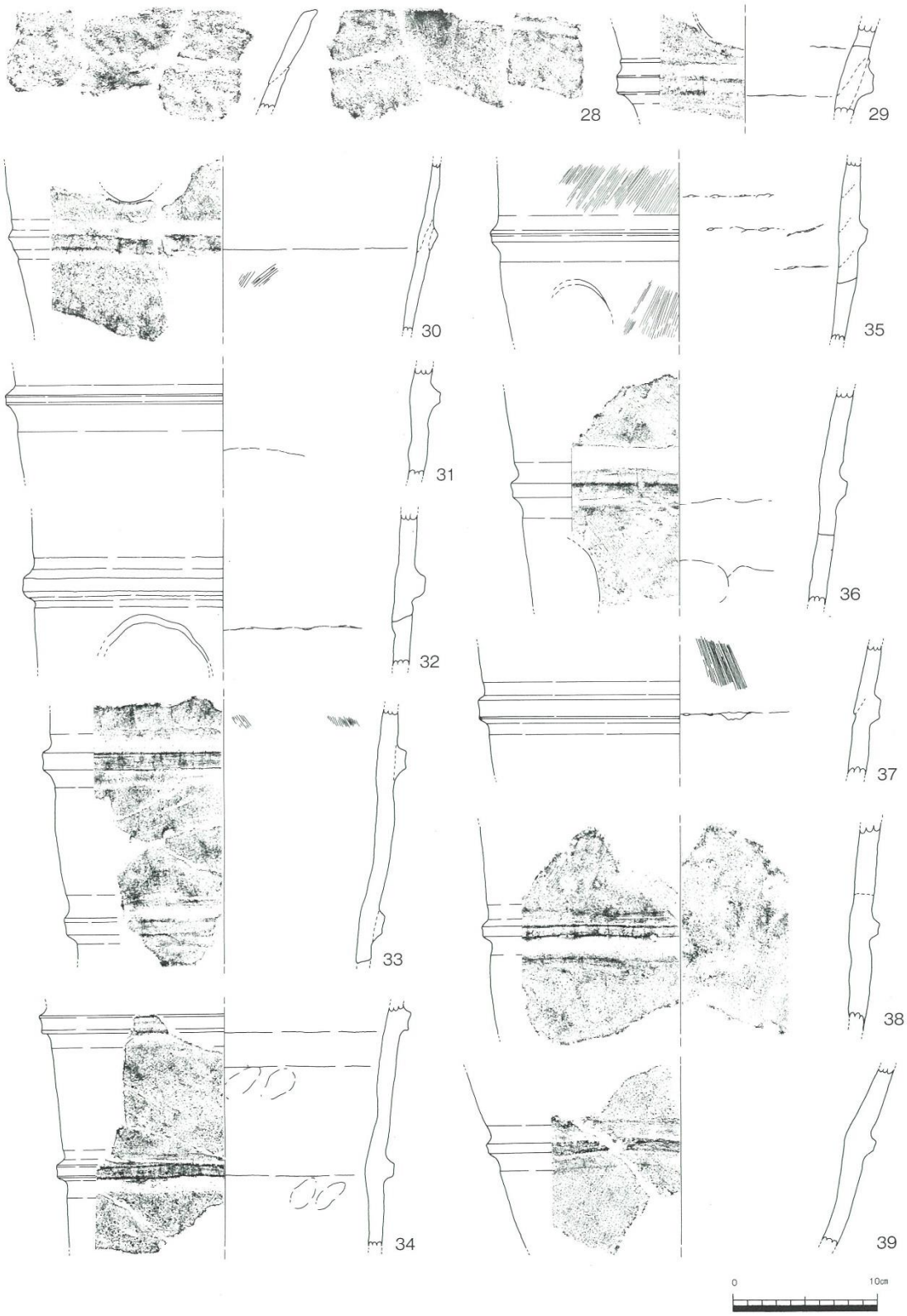
85は人物形埴輪である（第43図，巻頭図版２）。頭部には四方向に鋲や革綴のような列点表現がみられ，正面に眉間と思われる造形が観察できる。肩部と背面には「たすき」，胸部には袈裟のよう



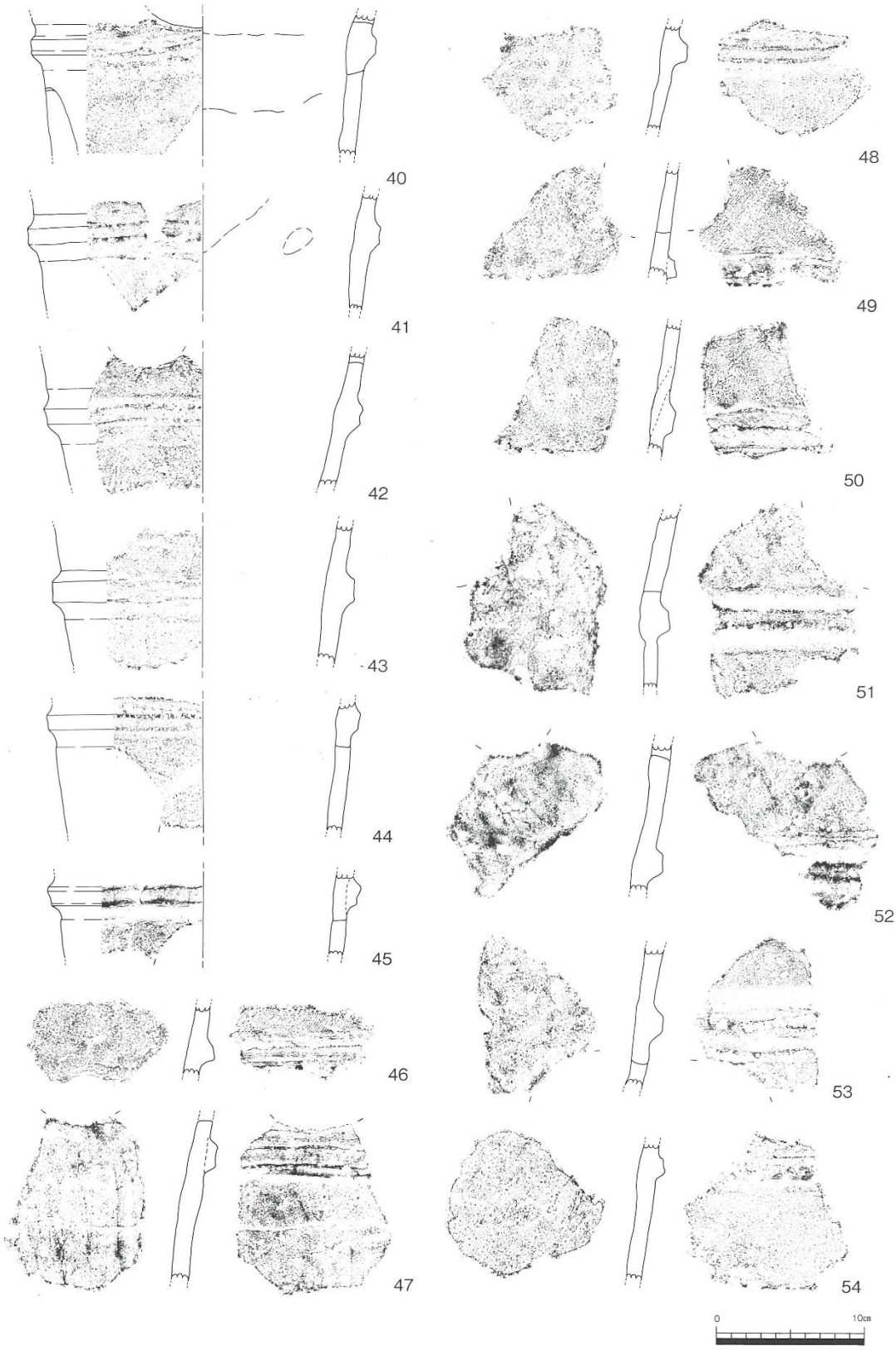
第36図　一丁坑4号墳出土埴輪①（S＝1/4）



第 37 図　一丁坑４号墳出土埴輪②（S＝1/4）

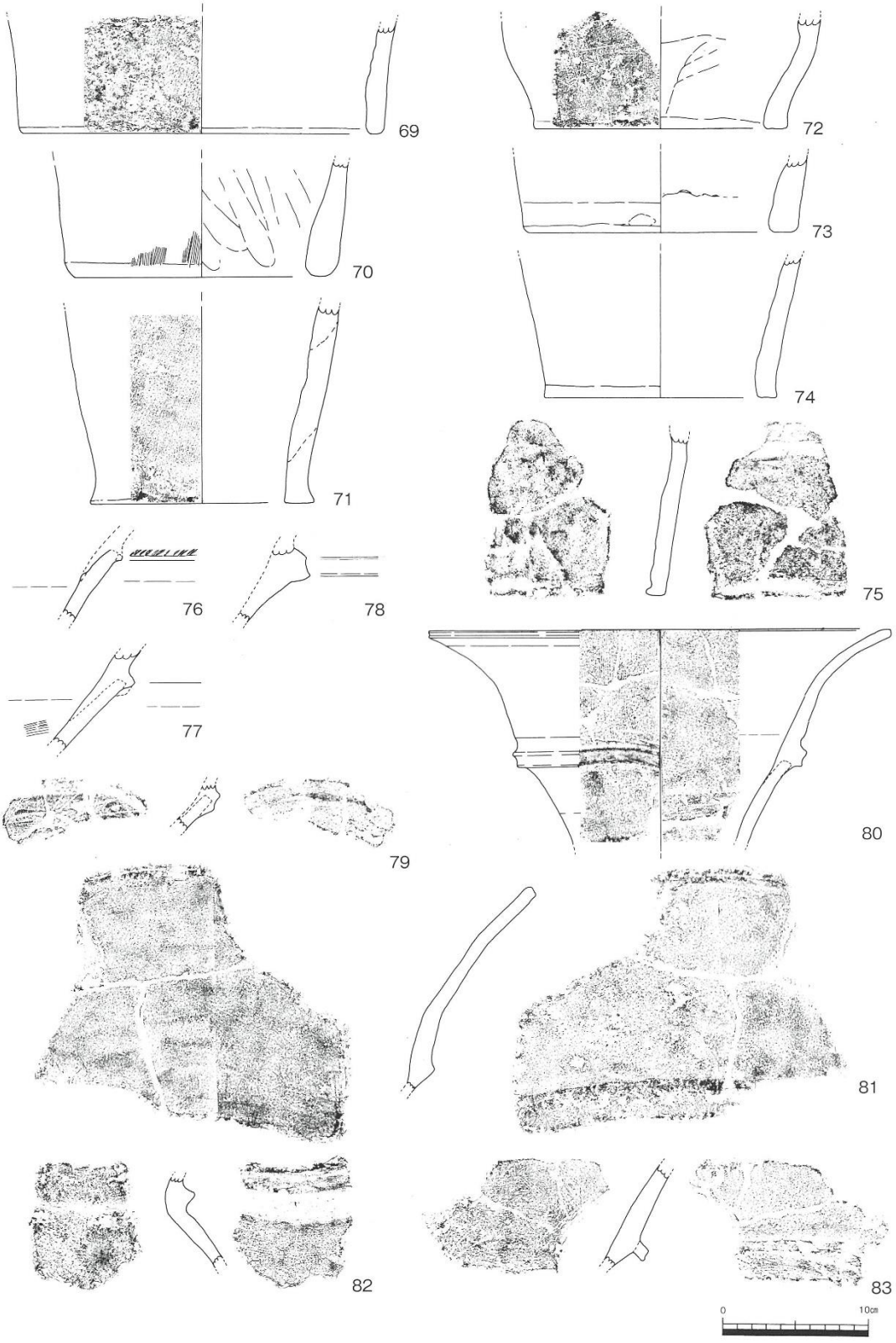


第38図　一丁坑４号墳出土埴輪③（S＝1/4）

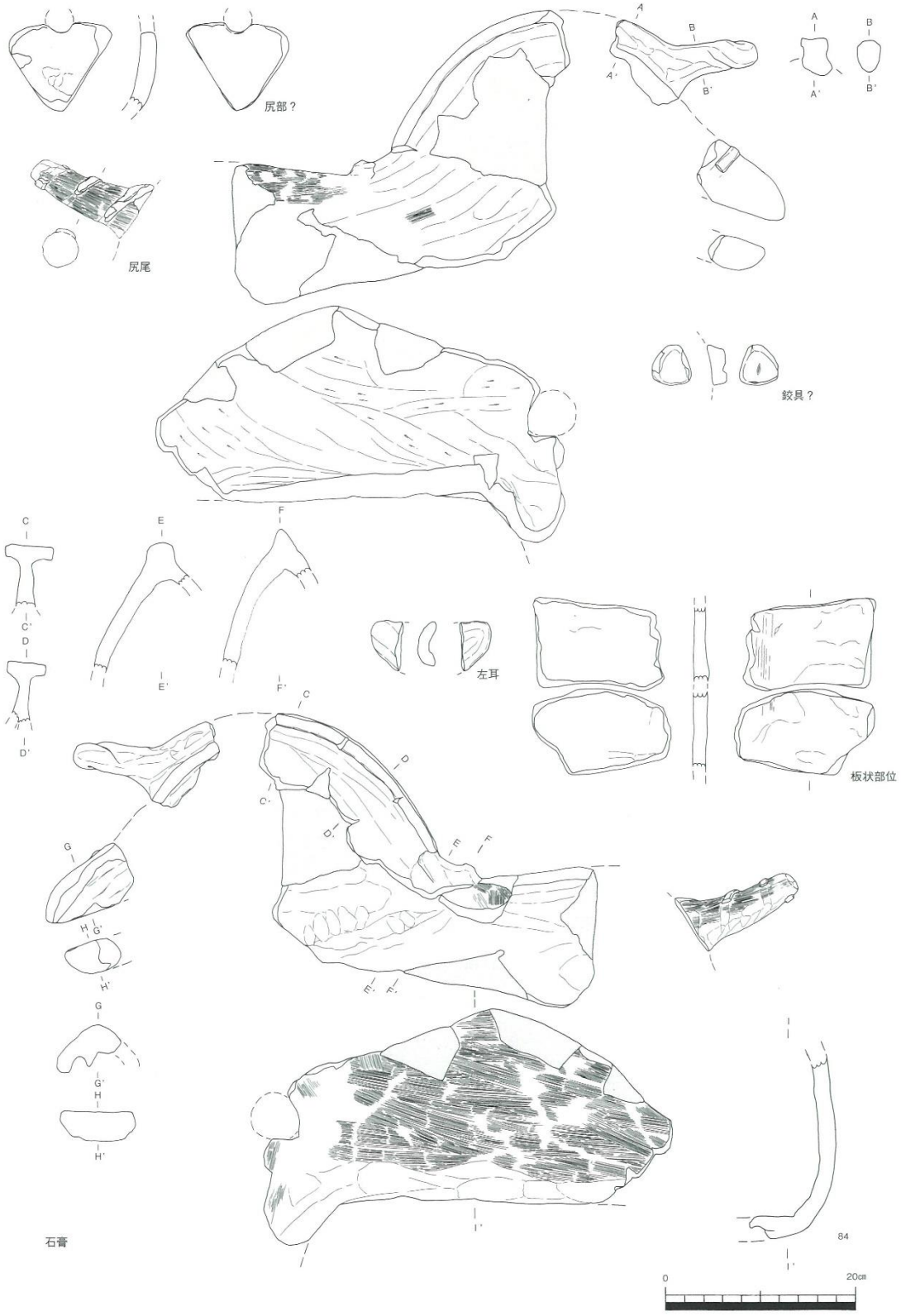


第39図　一丁坑4号墳出土埴輪④（S＝1/4）

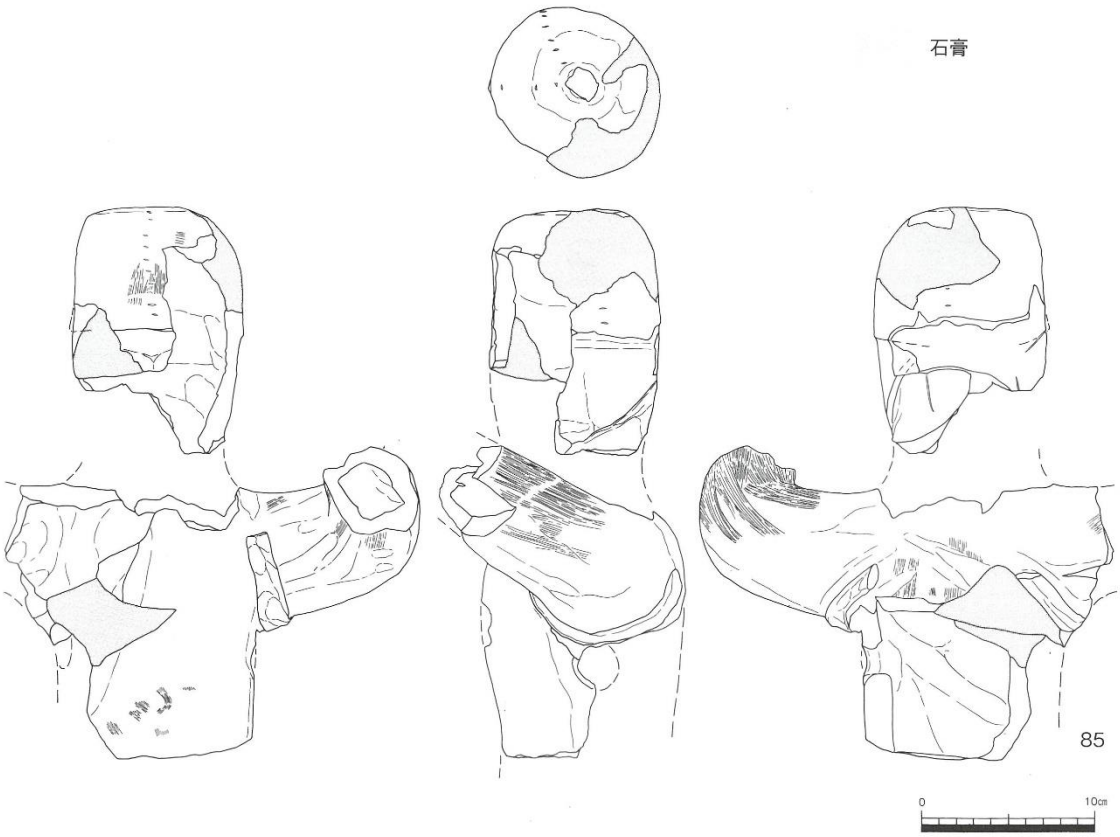
第 40 図　一丁坑４号墳出土埴輪⑤（S＝1/4）



第41図　一丁坑４号墳出土埴輪⑥（S＝1/4）



第 42 図　一丁坑 4 号墳出土馬形埴輪（S＝1/6）



第43図　一丁坑4号墳出土人物形埴輪（S＝1/4）

な表現がみられ，左腕を上方に掲げる格好である。須恵質で焼きは良く，胴部両側面に透孔が穿たれる。外面はハケとナデ，内面はナデによって整えられる。頭部の意匠から男性の可能性が高く，馬形埴輪が伴っていることを考えると馬子の可能性もあるが，馬形と人物形では焼きが明らかに違うため，少なくとも別個に焼成されたようである。

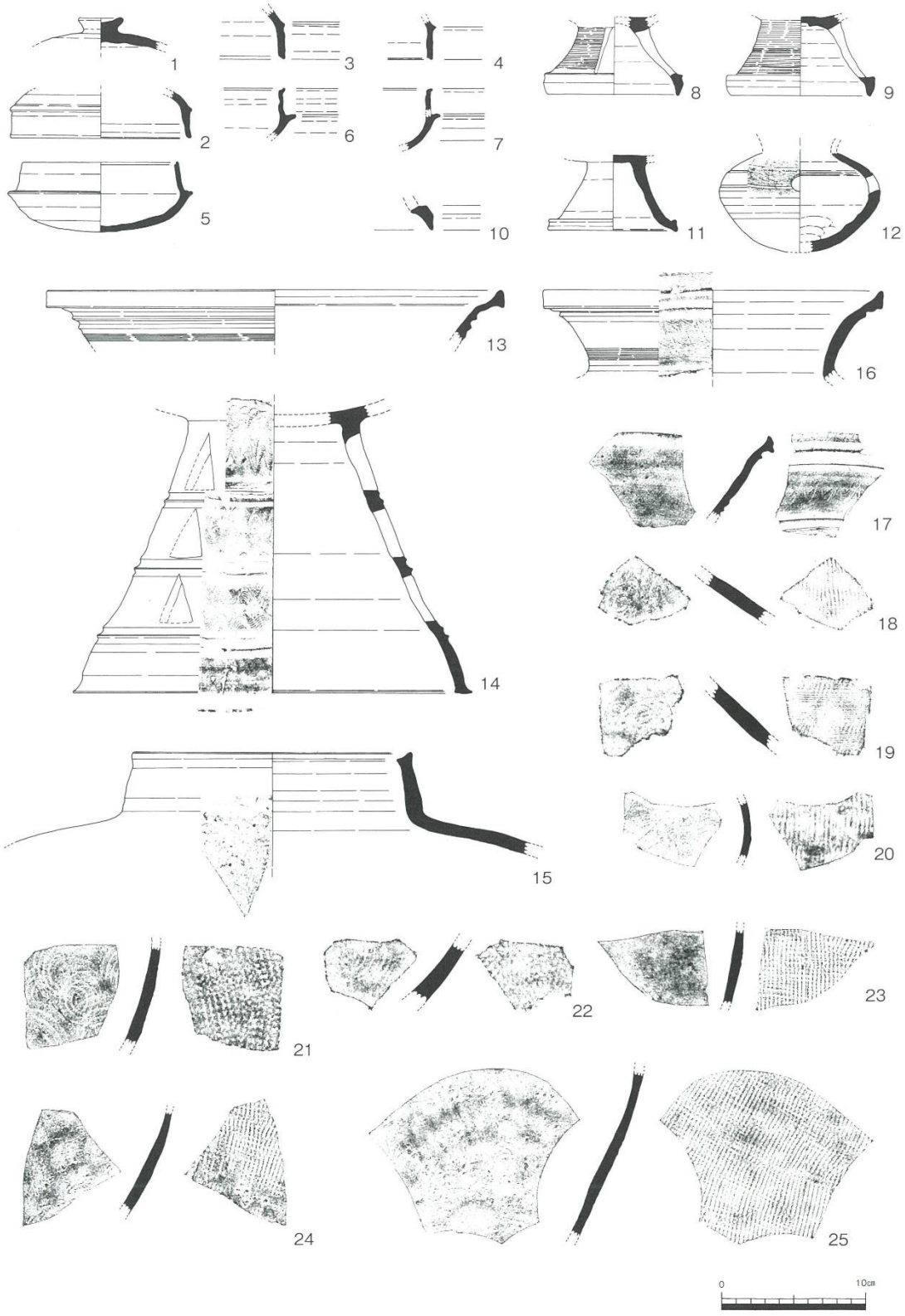
時期については，形象埴輪単体ではわからないが，人物形埴輪については3・9・10・25・58といった胎土・色調の酷似する須恵質の円筒埴輪が出土していることから，製作も円筒埴輪と同時期，同地域と考えてよさそうである。

須恵器

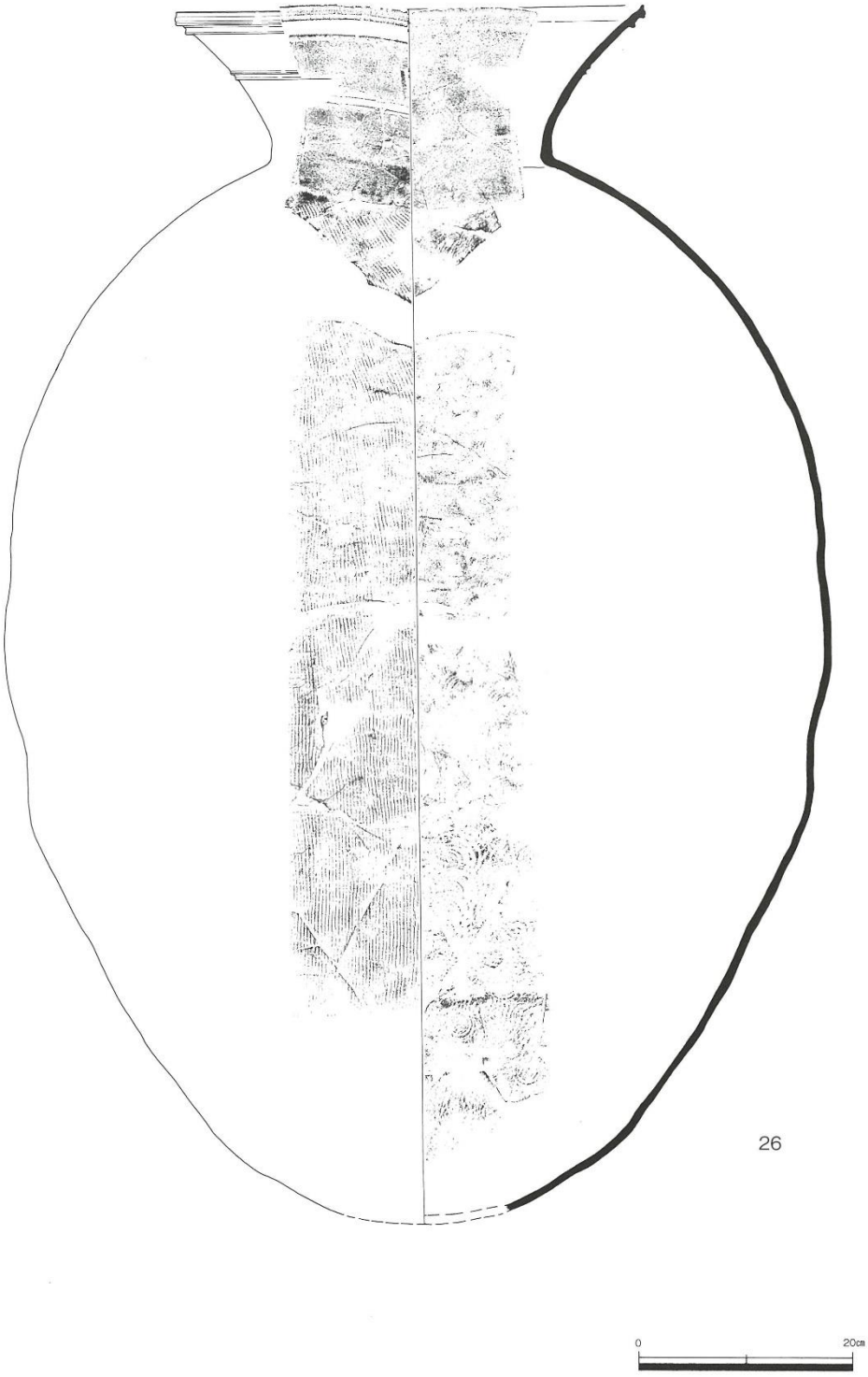
須恵器は破片総量でコンテナ約2箱分出土しており，杯蓋，杯身，高杯，瑞，器台，短頸壺，甕がある（第44・45図，図版16）。1～4は杯蓋である。いずれかの杯身，あるいは高杯と組み合わさると考えられ，1のようにつまみが付いたものを含む。5～7は杯身である。5や6のように口縁端部に段をもつもの，7のように段がないものの2種がある。

8～11は短脚高杯の脚部である。8～10は端部が下方に張り出す形態のもので，側面にはカキ目が施された後，台形の透孔が穿たれる。9の内面中央には回転軸痕のような円形の凹みがある。11は端部の拡張が小さく，透孔もなく簡素なものである。

12は瑞である。口縁部を欠くが，やや肩の張ったプロポーションである。胴部最大径付近には円孔が開けられ，凹線2条に挟まれた間帯には波状文が施される。外面には回転ナデ，内面にはカキ目



第44図　一丁坑4号墳出土須恵器①（S＝1/4）



第45図　一丁坑4号墳出土須恵器②（S＝1/6）

とヘラによる掻き取り痕が観察できる。

13・14は器台である。13は口縁部で，端部は回転ナデにより拡張され，外面に凹線文とカキ目が施される。14は脚部である。２条ずつ入った凹線によって区切られた３段の間帯には，２単位ずつ波状文が施された後，三角形の透孔が穿たれる。透孔は縦一直線に配置され，横の間隔からみて周囲５箇所に施されるようである。

15は短頸壺である。口縁部は回転ナデによって整えられ，胴部外面には平行タタキ目が，内面は円弧状当て具痕を撫で消している。外面は全体に自然釉が染み出している。

16～26は甕である。16・17は口縁部である。形態や調整など全体的なつくりはほぼ同じだが，波状文を入れる際の土器の回転方向だけが異なっている。18～25は胴部であり，18と19，21と22，23と25は同一個体の可能性が高い。18・19は外面に平行タタキのちカキ目を施している。20は外面に平行タタキが観察される。他の破片に比べ，薄手なつくりである。21・22は外面の格子目タタキを撫で消している。23～25は外面に格子目タタキが観察される。甕の内面は一様に円弧状の当て具痕を撫で消している。26は大型品の甕である。残存している部分の都合上，反転復元して作図したが，実際はもう少し胴の張るプロポーションである。底部も残存する。口縁部は外面中程に凹線文がめぐり，区切られた上下の間帯に波状文が施される。外面全体に平行タタキ目，内面全体に円弧状当て具痕が明瞭に残る。大きさのためか胴部には歪みが生じており，器壁の凹凸からみて粘土帯積み上げによって作られたと考えられる。

これらの須恵器は，形態や調整等の諸特徴からみて，おおむね中村編年で陶邑Ⅰ型式３～４段階[3]，田辺編年でTK23～TK47期[4]に相当する時期のものと考えられ，５世紀後半頃の年代観が与えられる。

小　結

一丁坦４号墳では，埴輪と須恵器をあわせてコンテナ約12箱分もの遺物が出土しており，馬形や人物形などの形象埴輪を伴うなど，かなり手厚い墳墓祭祀が行われたようである。墳丘規模も約14ｍ×15ｍと決して大きくはないが，特異な遺物相といえる。

また，総社市域内においては，人物形埴輪は立坂北１号墳[5]，すりばち池２号墳[6]，福井大塚１号墳[7]，中山６号墳[8]，小造山西１・３号墳[9]で，馬形埴輪はすりばち池２号墳[10]，中山６号墳[11]（四足動物として報告），小造山西１号墳[12]で出土しているが，そのほとんどが小片である。その意味では，一丁坦４号墳で出土した人物形埴輪は頭部や胴体の意匠がわかる良好な資料であり，馬形埴輪は胴部以上の出土例は市内で初ということになる。遺物の時期は５世紀後半頃に位置づけられ，埴輪と須恵器の年代に開きもないと考えられる[13]。

続いて，総社市福井の中山６号墳を対象に簡単な比較を行いたい。中山６号墳は，高梁川以東にあり地域は異なるが，周溝をもつ一辺約13ｍの方墳であり，人物形，馬形，家形などの形象埴輪を伴うなど一丁坦４号墳と共通点が多い。中山６号墳で検出された埴輪列は，一丁坦４号墳では今のところ確認されていないが，出土量から墳丘外周に円筒埴輪が並んでいたと推察され，埋葬施設についても，石室が露出していること以外はわからないが，同じように鉄器や玉類が副葬された可能性は低くないと言えそうである。

遺物の時期も，中山６号墳では，埴輪がタタキや押圧による底部調整をもつことからⅤ群の時期，須恵器はTK23～47型式頃と，一丁坦４号墳とほぼ同時期として報告されている。ただし，埴輪に

C種ヨコハケをもつものがあり，基底部調整をもつ明確な個体が含まれていないことや，須恵器の細部形態等をみると，一丁坑４号墳の方が若干古手の特徴を示していると言える。

以上を踏まえ，中山６号墳が５世紀末以降の築造時期を想定されていることも考えると，一丁坑４号墳の遺物は５世紀後半でも比較的古く，第３四半期に近い時期のものと想定できる。　（村田）

註

⑴　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64号第２号　日本考古学会　1978年

⑵　文章作成において以下の文献を参考にした。

１）亀井正道「人物・動物はにわ」『日本の美術』第346号　至文堂　1995年

２）千賀　久『古墳時代の馬との出会い』橿原考古学研究所附属博物館　2003年

⑶　１）中村　浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1981年

２）中村　浩『和泉陶邑窯　出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版　2001年

⑷　田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ　1966年

⑸　「立坂北古墳群」『水島機械金属工業団地協同組合　西団地内遺跡群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告９　総社市教育委員会　1991年

⑹　「２号墳」『すりばち池古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告13　総社市教育委員会　1993年

⑺　「福井地内の山土採取事業および分譲宅地造成事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』４　総社市教育委員会　1994年

⑻　「中山古墳群の概要」『中国横断自動車道建設に伴う発掘調査』４　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121　日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1997年

⑼　「小造山西古墳群の調査」『小山ケ谷古墳　小造山西古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告17　総社市教育委員会　2004年

⑽　上掲註６文献

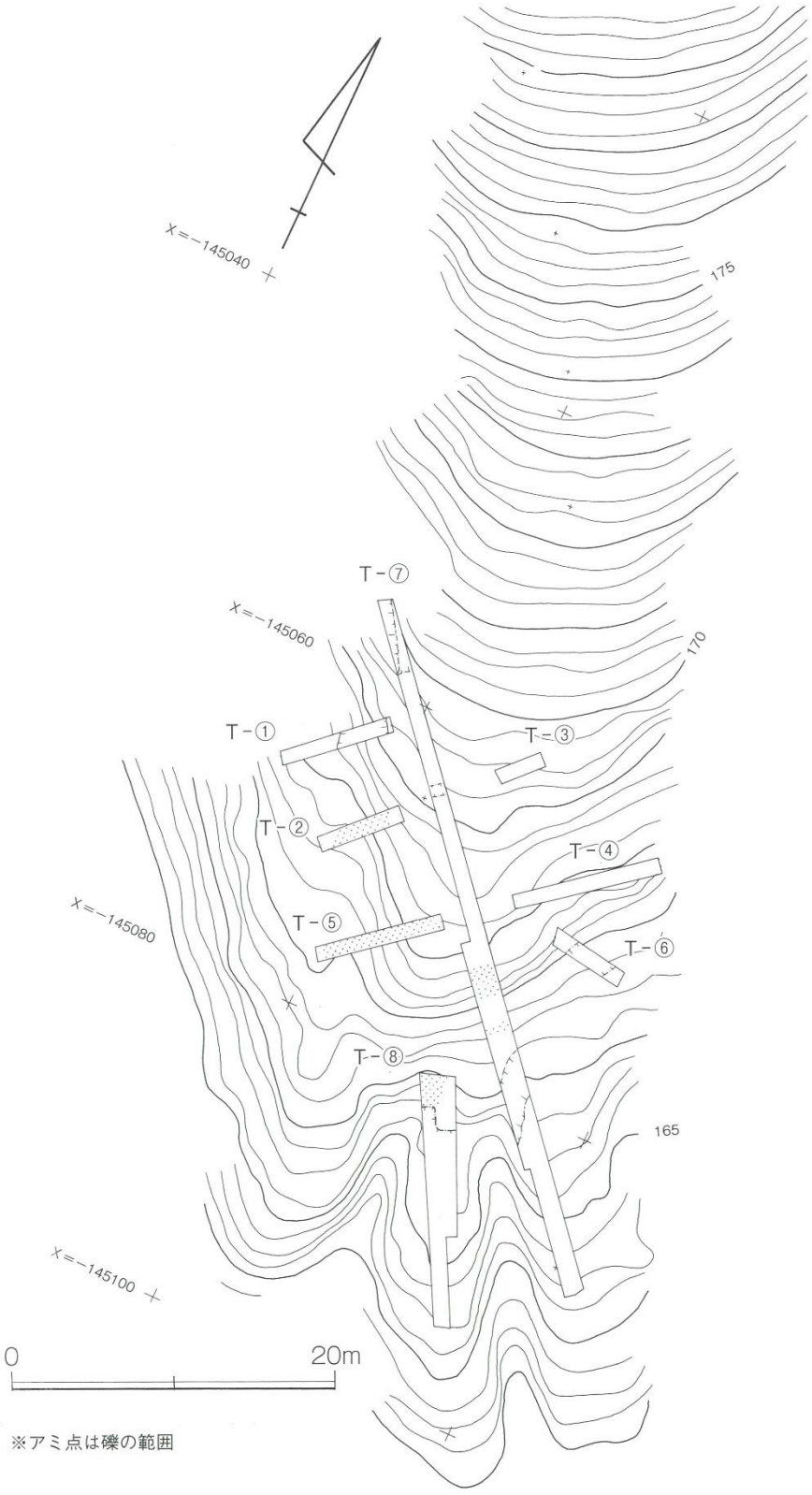
⑾　上掲註８文献

⑿　上掲註９文献

⒀　以下の文献を参考にした。

１）廣瀬　覚「埴輪の編年　①西日本の円筒埴輪」『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学１　同成社　2011年

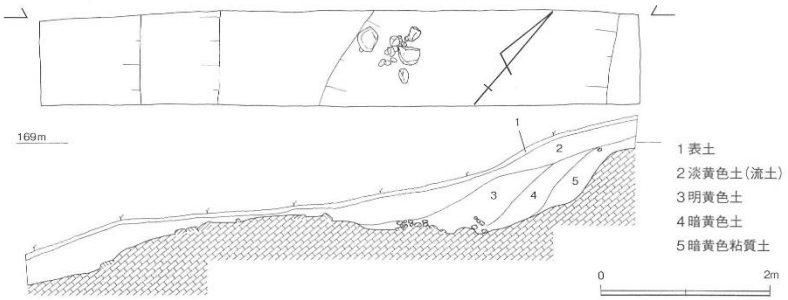
２）山田邦和「須恵器の編年　①西日本」『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学１　同成社　2011年



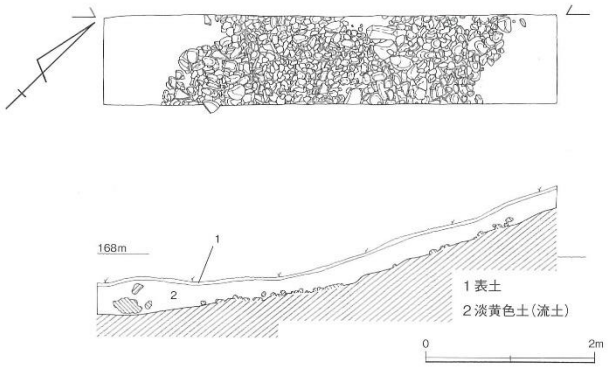
第46図　6号墳測量図（S＝1/400）

第5節　6号墳

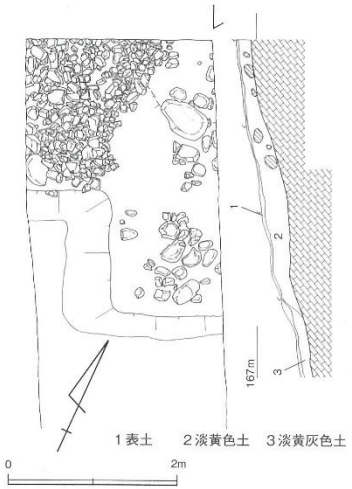
一丁坑古墳群の所在する丘陵では，丘陵頂部の古墳群の存在は知られていたが，その周辺については古墳の存在は確認されていなかった。このため保安林事業地内で古墳の所在が推定された1号墳から南に延びる尾根部分の確認調査を実施した。尾根頂部から約100 m下った場所で小礫がまとまった状態で，地形の改変が認められた。ここではトレンチを8箇所設定し調査した。トレンチ⑦の北端からトレンチ①では地山を大きく削った段を検出したが，遺物は出土していない。トレンチ②・⑤では斜面全体に小礫が隙間無く盛られている。この小礫はトレンチ⑦・⑧でも部分的に認められた。今回の調査では小礫範囲は古墳の形態をとらないため，古墳と断定することはできなかった。（谷山）



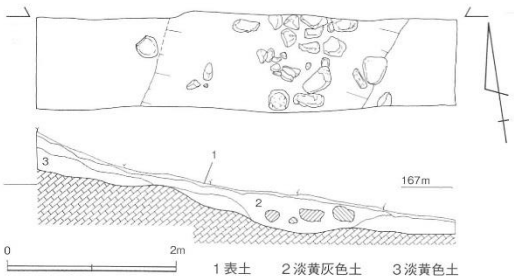
第47図　トレンチ①　平・断面図（S＝1/80）



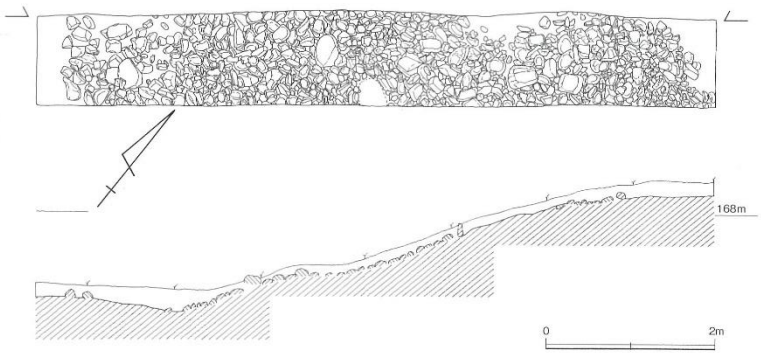
第48図　トレンチ②　平・断面図（S＝1/80）



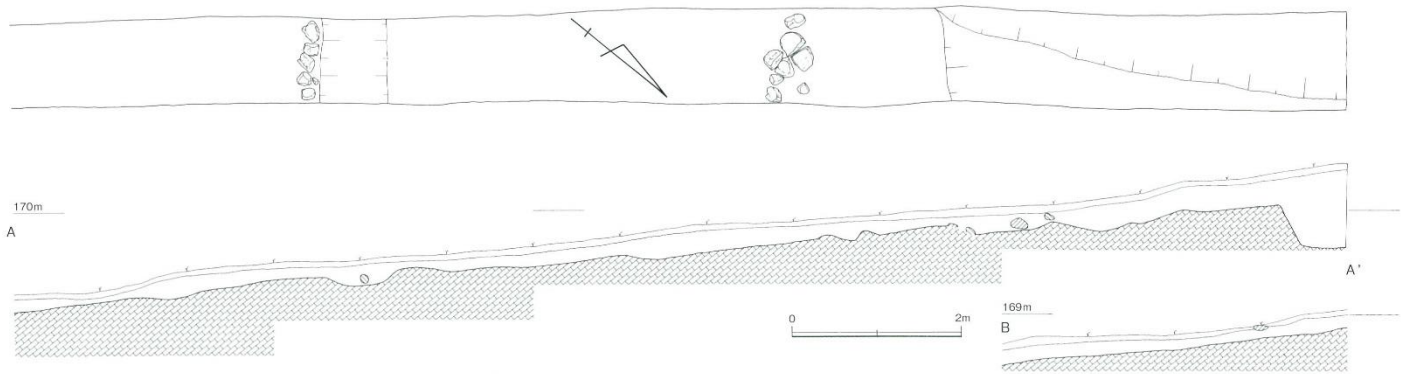
第50図　トレンチ⑧　平・断面図（S＝1/80）



第51図　トレンチ⑥　平・断面図（S＝1/80）



第49図　トレンチ⑤　平・断面図（S＝1/80）



第 52 図　トレンチ⑦　北部分平・断面図（S＝1/80）

第 53 図　トレンチ⑦　中央部分平・断面図（S＝1/80）

第4章　まとめ

一丁坦古墳群は全体で30基を超える古墳群であることが確認されている。このうち最高地点にある1号墳と近接してある4号墳までを市指定の史跡としている。

確認調査の結果，1号墳は全長約70ｍの前方後方墳であり，2号墳が円墳，4号墳が南北約14.8ｍ，東西約14.4ｍの方墳であることが判明した。

3号墳は山側に明確な周溝がないなど，古墳である具体的な証拠はなく，2号墳と4号墳築造時に残った丘陵の一部である可能性もある。しかし，この調査では結論がでないため3号墳としておく。

今回の調査は幅1ｍのトレンチ調査であったが，1・4号墳からは多くの埴輪片が出土した。この時期の埴輪についてまとまって出土した例は少なく貴重な資料となるため，1・4号墳の墳丘特徴と出土遺物について十分でないが以下の内容についてまとめてみたい。なお2・3号墳からは遺物が出土していないため，古墳の可能性がある以上のことはよくわからない。

1　規模・構造について

まず，今回の最大の調査目的である1号墳の規模・構造についてであるが，トレンチ内では葺石が転落した状態で墳端を覆っていたため，正確な墳端は押さえられていない。しかし，後方部墳丘中段や前方部の状態から葺石の構造を推定した。

中段で確認された石組み基礎に人頭大の石を1～2段積み，その上に拳大の石を積み上げている。他地域の前期古墳でも同様の積み方が多く見られることから，下段も同様の構造と推定される。このことから，T－3，T－16において墳丘傾斜が大きく変化し，転落した葺石が認められる場所を墳端とした。この結果，測量図から推定していた全長約74ｍから縮小し全長約70ｍの2段築成の前方後方墳と推定される。

4号墳は山側に明確な周溝をもち，墳丘の高さも2ｍを測る。周溝の形態から方墳と考えられる。中央には石室が認められるが，構造は不明である。出土した須恵器の甕は墳丘に据えられたもので，埴輪とともに墳丘上祭祀に用いられたものである。

2　埴輪について

1号墳から出土した埴輪には，蕨手文のみが観察される特殊器台形の最終段階と思われるもの，巴形と三角形の透孔が並んで開けられるが文様を欠き，円筒埴輪の最古段階と思われるものの両方が含まれている。厚みや突帯の形状なども一様でなく，透孔も巴形・三角形・方形があり，外面のハケ目撫で消し，内面のヘラケズリなど古手の特徴を備えている。円筒埴輪が量産化する以前のものであり，埴輪の変遷を考えるうえでも貴重な資料といえる。4世紀代には入ると考えられるが，前半に収まる時期のものと考えたい。埴輪全体でいえば文様を施さないものが主体をなし，線刻を施すものは少量である。調査そのものが古墳の規模等を確認する目的であったため，墳丘全体に対して調査面積が広いとはいえず，埴輪の分析も，今回の出土量で結論づけるのは正確でない。

4号墳出土の埴輪は，普通円筒・朝顔形円筒のほか，馬形・人物形の形象埴輪を含んでおり，焼け方も埴質のもの，須恵質のものがある。円筒埴輪は外面二次調整にC種ヨコハケを施すもの少量を含

むが，大半は二次調整を欠いている。突帯の形状は一様に扁平で統一性がある。川西編年Ⅳ群からⅤ群にかかる時期のものである。馬形埴輪は接合こそしないが，胴部分の特徴がわかる資料であり，人物形埴輪は頭部の形状から男性と考えられるものである。

須恵器には杯蓋，杯身，高杯，瓶，器台，短頸壺，甕があり，量は少ないが一式が揃っている。形態や調整等をみるに中村編年で陶邑Ⅰ型式３～４段階，田辺編年でTK23～47型式に相当する特徴をもったものである。埴輪と須恵器ともに５世紀後半頃の年代観であるが，５世紀末までは下らないと考えられる。

３　位置づけ

一丁坦古墳群の所在する山塊周辺をふくめ，新本川流域では１号墳に確実に先行する古墳は確認されていない。しかし，今回測量調査を実施した秦大坦古墳についても，墳形や表採した埴輪の特徴から，１号墳に極めて近い時期に築造された可能性が出てきた。また，墳形等の実態をうかがい知ることはできないが，三角縁神獣鏡を出土した秦上沼古墳も前期に遡るであろう。

これら秦地域の古墳群に相前後して，山田地域でも前方後円墳数基を含む砂子山古墳群が形成されている。山田の古墳からは，時期を考えることができる埴輪などの遺物は出土していない。しかし，主体部が割り石を積んだ竪穴式石室であることが確認されており，古墳時代前期に形成されたと推定される。

今後さらに検討を加える必要があるが，新本・山田地域には，古墳時代前期に前方後方墳，前方後円墳の両方を築造する勢力が存在したようである。そうした中で，一丁坦１号墳は備中西部，新本川流域のなかでは墳丘規模が最大であることからこの流域全体を代表する盟主墳の一つと考えられ，かつ，県南では最大規模の前方後方墳である。近接した集落の調査例がないため，地域全体の総体的把握までは難しいが，周辺との係りを十分検討していく必要がある重要な古墳といえよう。（谷山・村田）

表５　特殊器台形埴輪出土古墳

	古墳名称（所在地）	全　長	墳　形
1	一丁坦１号墳（総社市秦）	70 m	前方後方墳
2	浦間茶臼山古墳（岡山市浦間）	138 m	前方後円墳
3	中山茶臼山古墳（岡山市吉備津）	110 m	前方後円墳
4	網浜茶臼山古墳（岡山市赤阪）	92 m	前方後円墳
5	操山109号墳（岡山市平井）	76 m	前方後円墳
6	七つ坦古墳（岡山市津島）	45 m	前方後方墳
7	都月坂１号墳（岡山市津高）	33 m	前方後方墳
8	矢部大坦古墳　（倉敷市矢部）	47 m	前方後円墳
9	矢部Ｂ42号墳（倉敷市矢部）	6.5 m	不明（円墳あるいは方墳）

付載　秦大坑古墳測量調査について

秦大坑古墳（金子10号墳）は，総社市秦山崎に所在する正木山を主峰とする山塊の，高梁川を望む南東端の標高70 m付近に位置している。古墳は，1987年度刊行の『総社市史　考古資料編』編纂にあたって航空測量が実施されており，全長56.2 mとされていた。今回，岡山大学の新納　泉教授より三次元計測の提案をいただいたため，並行して平板による再測量を行うこととなった。

現在，墳丘周辺は，北側部分以外は畑作や砂防のために多少の改変を受けているが，今回の再測量によって全長約63 m，後円部径約35 m，前方部長約28 m，前方部幅約20 mの規模であること，後円部の北東部にやや盛り上がった平坦面が存在することが判明した。また，20～50㎝大の円礫を主体とする葺石がみとめられた。

埴輪は円筒と壺形の破片を採集している（第56図）。円筒は外面にタテハケ，内面にナデ調整が施され，角閃石・金雲母を含む緻密な胎土で，にぶい黄褐色を呈している。壺形は二重口縁の立ち上がり部分で，石英・長石を含んだやや粗い胎土である。なお，どちらも赤色顔料の付着がみとめられる。

墳形，埴輪の特徴から考えて，4世紀代の古墳であると考えられる。　（高橋・村田）

第54図　調査位置図（S＝1/5,000）

第 55 図　秦大坑古墳測量図（S＝1/500）

第 56 図　秦大坑古墳採集埴輪（S＝1/4）

表6　遺物一覧

一丁坑1号墳

掲載番号	種別	器種	口径(cm)	最大幅(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	特徴	色調	胎土
1	埴輪	特殊器台形?	28.2				外 横ナデ	巴形透孔	10YR7/4（にぶい黄橙）	径1～2mmの石英・長石
2	埴輪	特殊器台形?					外 ナデ	巴形透孔，赤色顔料	10YR6/4（にぶい黄橙）	径1～3mmの長石
3	埴輪	特殊器台形					内外横ナデ	蕨手文，赤色顔料	外 5YR7/8（橙） 内 10YR7/6（橙）	径1～3mmの石英・長石・赤色土粒
4	埴輪	特殊器台形					内 ナデ	巴形透孔，蕨手文	7.5YR7/6（橙）	径2～3mmの石英・長石
5	埴輪	特殊器台形					内 ナデ	方形透孔，蕨手文	7.5YR7/6（橙）	径1～3mmの石英・長石
6	埴輪	特殊器台形					内 ナデ	巴形透孔，蕨手文	7.5YR7/6（橙）	径1～3mmの石英・長石
7	埴輪	特殊器台形					内 横ハケ→ナデ	巴形透孔，蕨手文	7.5YR7/6（橙）	径1～2mmの石英・長石・赤色土粒
8	埴輪	円筒		32.4			外 横ナデ	赤色顔料	外 10YR7/6（明黄褐） 内 2.5YR6/8（橙）	径1～2mmの石英・長石
9	埴輪	円筒					外 縦ハケ→ナデ，内 ヘラケズリ		7.5YR6/6（橙）	径1～4mmの石英・長石・赤色土粒（多）
10	埴輪	円筒					外 横ナデ，内 ヘラケズリ	方形（逆三角形）透孔，赤色顔料	5YR7/6（橙）	径1mmの石英・長石・赤色土粒
11	埴輪	円筒					内外横ナデ	赤色顔料	外 10YR7/6（明黄褐） 内 5YR7/6（橙）	径1～2mmの石英・長石（少）
12	埴輪	円筒					外 横ハケ?→ナデ，内 ナデ	方形透孔	5YR7/8（橙）	径2～3mmの石英・長石
13	埴輪	円筒					外 横ナデ，内 ヘラケズリ		5YR7/8（橙）	径1～3mmの石英・長石
14	埴輪	円筒					内外ナデ	方形（逆三角形）透孔	7.5YR6/6（橙）	径1～4mmの石英・長石
15	埴輪	円筒					内外ナデ		7.5YR7/6（橙）	径2～5mmの石英・長石
16	埴輪	円筒					内外ナデ	赤色顔料	7.5YR7/6（橙）	径1～2mmの石英・長石
17	埴輪	円筒					外 ナデ		5YR7/6（橙）	径1～2mmの石英・長石・赤色土粒
18	埴輪	円筒					外 ナデ		7.5YR7/6（橙）	径1～3mmの石英・長石（多）
19	埴輪	円筒					外 ナデ，内 ヘラケズリ		外 7.5YR7/6（橙） 内 5YR7/8（橙）	径1～2mmの石英・長石（多）
20	埴輪	円筒					内外ナデ		外 7.5YR6/6（橙） 内 5YR6/6（橙）	径1～3mmの石英・長石
21	埴輪	円筒					内外ナデ	方形透孔	外 7.5YR6/6（橙） 内 5YR6/6（橙）	径3mm以下の石英・長石・角閃石・赤色土粒
22	埴輪	円筒					内外ナデ		7.5YR7/6（橙）	径1～2mmの石英・長石・赤色土粒（多）
23	埴輪	円筒					外 ナデ		外 10YR7/6（明黄褐） 内 7.5YR7/6（橙）	径1～3mmの石英・長石（多）
24	埴輪	円筒					内外ナデ		7.5YR6/6（橙）	径1～3mmの石英・長石・赤色土粒
25	埴輪	円筒					外 横ナデ，内 横ハケ?→ナデ		5YR7/8（橙）	径1～2mmの石英・長石
26	埴輪	円筒					外 ナデ，内 指頭圧		5YR7/6（橙）	径1～3mmの石英・長石
27	埴輪	円筒					外 ナデ		10YR7/4（にぶい黄橙）	径1～2㎜の石英・長石・赤色土粒（少）
28	埴輪	円筒					内外ナデ		外 7.5YR7/6（橙） 内 5YR7/8（橙）	径2～3mmの石英・長石
29	埴輪	円筒					外 ナデ，内 ナデ・指頭圧		7.5YR7/6（橙）	径1～3mmの石英・長石
30	埴輪	円筒					内外ナデ		5YR6/6（橙）	径2㎜の石英・長石・赤色土粒（多）
31	埴輪	円筒					外 横ナデ		10YR7/6（明黄褐）	径1～3㎜の石英・長石・赤色土粒（多）
32	埴輪	円筒					内外ナデ		5YR7/6（橙）	径2～3㎜の石英・長石
33	埴輪	円筒					外 横ナデ，内 ヘラケズリ	赤色顔料	5YR6/6（橙）	径1～2㎜の石英・長石
34	埴輪	特殊器台形?					外 ナデ，内 ハケ?→ナデ	巴形透孔，三角形透孔	10YR7/4（にぶい黄橙）	径1～2㎜の石英・長石

掲載番号	種別	器種	口径(cm)	最大幅(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	特徴	色調	胎土
35	埴輪	円筒					外 横ナデ		5YR7/6（橙）	径1～3㎜の石英・長石・赤色土粒（多）
36	埴輪	円筒					内外ナデ		外 7.5YR7/6（橙） 内 7.5YR6/6（橙）	径1～4㎜の石英・長石
37	埴輪	円筒					内外ナデ		5YR7/6（橙）	径1～4㎜の石英・長石・赤色土粒（多）
38	埴輪	円筒					内 ヘラケズリ・ナデ・指頭圧	方形透孔	7.5YR7/8（黄橙）	径2～4㎜の石英・長石（少）
39	埴輪	朝顔形円筒					外 ナデ，内 ヘラケズリ→横ナデ		外 7.5YR7/8（黄橙） 内 5YR6/6（橙）	径1～4㎜の石英・長石・角閃石・赤色土粒（多）
40	埴輪	朝顔形円筒					内外横ナデ		5YR6/6（橙）	径1～3㎜の石英・長石・赤色土粒
41	埴輪	朝顔形円筒					内外横ナデ		外 7.5YR7/6（橙） 内 10YR7/6（明黄褐）	径1～2㎜の石英・長石（多）
42	埴輪	朝顔形円筒					内外横ナデ	赤色顔料	7.5YR7/6（橙）	径1mm以下の石英・長石・角閃石
43	埴輪	朝顔形円筒					内外横ナデ		10YR7/6（明黄褐）	径1～2㎜の石英・長石（多）
44	埴輪	朝顔形円筒					外 横ナデ	赤色顔料	外 10YR7/4（にぶい黄橙） 内 10YR7/6（明黄褐）	径1～2㎜の石英・長石・角閃石
45	埴輪	壺形					内外横ナデ		外 10YR6/4（にぶい黄橙） 内 10YR7/6（明黄褐）	径1～2㎜の石英・長石
46	埴輪	朝顔形円筒					内外横ナデ	赤色顔料	7.5YR6/6（橙）	径1～3mmの石英・長石・赤色土粒（多）
47	埴輪	壺形					内外横ナデ		10YR7/4（にぶい黄橙）	径1mmの長石
48	埴輪	朝顔形円筒					外 横ナデ，内 横ハケ・ヘラケズリ	赤色顔料	7.5YR7/4（にぶい橙）	径1～3mmの石英・長石（多）
49	埴輪	朝顔形円筒					内外ナデ	突帯押さえつけ	外 7.5YR6/4（にぶい橙） 内 10YR6/3（にぶい黄橙）	径1～2mmの石英・長石
50	埴輪	器台形		24.0			外 横ナデ，内 横ナデ・指頭圧	粘土の継ぎ目，赤色顔料	外 10YR8/4（浅黄橙） 内 10YR7/4（にぶい黄橙）	径2mm以下の石英・長石・角閃石・赤色土粒
51	埴輪	円筒（基部）					外 横ナデ，内 ヘラケズリ→ハケ		7.5YR6/4（にぶい橙）	径1～2mmの石英・長石
52	埴輪	円筒（基部）					外 横ナデ，内 ヘラケズリ→ナデ		7.5YR7/6（橙）	径1～4mmの石英・長石
53	埴輪	円筒（基部）					外 ナデ		5YR6/6（橙）	径2～3mmの石英・長石・赤色土粒（多）
54	埴輪	円筒（基部）					外 ナデ？		外 10YR7/4（にぶい黄橙） 内 5YR7/6（橙）	径2～3mmの石英・長石（多）
55	埴輪	円筒（基部）					外 横ナデ		5YR7/6（橙）	径1～6mmの石英・長石・赤色土粒
56	埴輪	円筒（基部）					外 ナデ		7.5YR7/6（橙）	径1～3mmの石英・長石・赤色土粒（多）
57	埴輪	壺形（基部）					内外ナデ		外 7.5YR7/8（黄橙） 内 7.5YR7/6（橙）	径3mm以下の石英・長石・角閃石
58	埴輪	不明形象					外 ナデ，内 ハケ	粘土の継ぎ目，厚手	7.5YR5/4（にぶい褐）	径1～3mmの石英・長石・角閃石・金雲母（多）

一丁坦４号墳　埴輪

掲載番号	種別	器種	口径(cm)	最大幅(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	特徴	色調	胎土
1	埴輪	円筒	27.4				外 縦ハケ→C種横ハケ，内 ナデ・指頭圧	×字状ヘラ記号	10YR7/4（にぶい黄橙）	径1mm以下の石英・長石・角閃石・赤色土粒
2	埴輪	円筒		34.0			外 縦ハケ→C種横ハケ，内 ナデ・掌底圧	円形透孔，×字状ヘラ記号	10YR7/6（明黄褐）	径1mm以下の石英・長石・角閃石
3	埴輪	円筒		20.6			外 縦ハケ→横ハケ，内 ナデ	須恵質，円形透孔	外 2.5Y8/4（淡黄） 内 10YR8/6（黄橙）	径1mmの石英・長石
4	埴輪	円筒		22.4			外 C種横ハケ，内 ナデ？		10YR7/4（にぶい黄橙）	径2mm以下の石英・長石・角閃石・赤色土粒
5	埴輪	円筒		21.8			外 C種横ハケ？，内 ナデ・斜ハケ	円形透孔	外 10YR8/6（黄橙） 内 2.5Y8/4（淡黄）	径2mm以下の石英・長石・角閃石・赤色土粒
6	埴輪	円筒（口縁部）					外 斜ハケ→C種横ハケ，内 斜ハケ		外 7.5YR7/6（橙） 内 10YR7/4（にぶい黄橙）	径1mmの石英・長石
7	埴輪	円筒（口縁部）					外 C種？横ハケ，内 斜ハケ・指頭圧		2.5Y7/4（浅黄）	径1mmの石英・長石・赤色土粒
8	埴輪	円筒		30.4			外 斜ハケ・横ハケ，内 ナデ・掌底圧	円形透孔	7.5YR7/6（橙）	径1mmの石英・長石（多）
9	埴輪	円筒		32.4			外 斜ハケ→横ハケ，内 斜ハケ→ナデ・横ハケ	須恵質，円形透孔	外 2.5Y7/2（灰黄） 内 10YR8/6（黄橙）	
10	埴輪	円筒		30.6			外 斜ハケ・C種横ハケ，内 ナデ・ハケ	須恵質，円形透孔，粘土の継ぎ目	外 10YR8/4（浅黄橙） 内 10YR8/6（黄橙）	径1mm以下の石英・長石・角閃石

掲載番号	種別	器種	口径(cm)	最大幅(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	特徴	色調	胎土
11	埴輪	円筒					外 C種横ハケ, 内 ナデ	円形透孔	5YR7/6 (橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石 (多)
12	埴輪	円筒					外 C種横ハケ, 内 ナデ		外 7.5YR7/6 (橙) 内 5YR7/6 (橙)	径3mm以下の石英・長石・角閃石・赤色土粒
13	埴輪	朝顔形円筒		27.4			外 斜ハケ→C種横ハケ, 内 ナデ	粘土の継ぎ目	外 2.5Y8/4 (淡黄) 内 10YR7/4 (にぶい黄橙)	径1mm以下の石英・長石・角閃石・赤色土粒
14	埴輪	朝顔形円筒		26.4			外 斜ハケ・C種横ハケ, 内 ナデ?		10YR8/4 (浅黄橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石
15	埴輪	朝顔形円筒		27.4			外 横ハケ・斜ハケ・凹線, 内 ヘラケズリ		10YR8/6 (黄橙)	径1mm以下の長石・角閃石
16	埴輪	円筒 (口縁部)	32.0				外 斜ハケ, 内 ナデ		7.5YR7/6 (橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石 (多)
17	埴輪	円筒 (口縁部)	28.4				外 縦ハケ・斜ハケ, 内 斜ハケ		10YR8/4 (浅黄橙)	径1mmの石英・長石
18	埴輪	円筒 (口縁部)	27.6				外 斜ハケ, 内 ナデ		2.5Y7/4 (浅黄)	径1mmの石英・長石
19	埴輪	円筒	24.8				外 縦ハケ・斜ハケ, 内 ナデ	三角形?ヘラ記号,粘土の継ぎ目	外 10YR8/4 (浅黄橙) 内 2.5Y8/4 (淡黄)	径1mm以下の石英・長石・角閃石
20	埴輪	円筒 (口縁部)					内 ナデ・指頭圧		10YR7/6 (明黄褐)	径3mm以下の石英・長石・角閃石
21	埴輪	円筒 (口縁部)					内外ナデ		5YR7/6 (橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石・赤色土粒 (多)
22	埴輪	円筒 (口縁部)					内外回転ナデ		10YR8/4 (浅黄橙)	径1mmの石英 (少)
23	埴輪	円筒 (口縁部)					内外回転ナデ		2.5Y7/4 (浅黄)	径1mmの石英・長石 (少)
24	埴輪	円筒 (口縁部)					内 斜ハケ→回転ナデ		10YR7/4 (にぶい黄橙)	径1～2mmの長石
25	埴輪	円筒 (口縁部)					内外斜ハケ→回転ナデ	須恵質	10YR8/4 (浅黄橙)	径1mm以下の石英・角閃石 (少)
26	埴輪	円筒 (口縁部)					外 斜ハケ, 内 横ハケ		7.5YR8/6 (浅黄橙)	径1mmの石英・長石
27	埴輪	円筒 (口縁部)					外 斜ハケ, 内 ナデ・ハケ		10YR8/4 (浅黄橙)	径1mm以下の石英・長石・角閃石
28	埴輪	円筒 (口縁部)					外 斜ハケ, 内 ナデ・指頭圧	直線状ヘラ記号	7.5YR7/6 (橙)	径1mm以下の石英・長石・角閃石 (多)
29	埴輪	円筒		18.4			外 斜ハケ, 内 ナデ	円形透孔,粘土の継ぎ目	7.5YR7/6 (橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石
30	埴輪	円筒		30.4			外 斜ハケ, 内 斜ハケ→ナデ	円形透孔	7.5YR7/6 (橙)	径1mm以下の石英・長石・角閃石
31	埴輪	円筒		30.4			内外ナデ		5YR7/6 (橙)	径1～2mmの石英・長石・赤色土粒 (多)
32	埴輪	円筒		28.2			外 縦ハケ?	円形透孔,粘土の継ぎ目	7.5YR8/6 (浅黄橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石・赤色土粒 (多)
33	埴輪	円筒		25.4			外 縦ハケ, 内 ナデ・縦ハケ		10YR8/6 (黄橙)	径2mm以下の石英・長石
34	埴輪	円筒		26.0			外 斜ハケ, 内 ナデ・指頭圧		外 10YR8/4 (浅黄橙) 内 2.5Y8/4 (淡黄)	径1mm以下の石英・長石・角閃石
35	埴輪	円筒		26.2			外 斜ハケ, 内 ナデ	円形透孔,粘土の継ぎ目	外 10YR8/6 (黄橙) 内 10YR7/4 (にぶい黄橙)	径1mm以下の石英・長石・角閃石
36	埴輪	円筒		24.4			外 斜ハケ, 内 ナデ・指頭圧	円形透孔	7.5YR7/6 (橙)	径1～3mmの石英・長石 (多)
37	埴輪	円筒		28.0			内 縦ハケ・指頭圧	粘土の継ぎ目	10YR7/4 (にぶい黄橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石
38	埴輪	円筒		28.0			外 斜ハケ, 内 ナデ・縦ハケ	円形透孔,粘土の継ぎ目	外 7.5YR8/6 (浅黄橙) 内 10YR8/4 (浅黄橙)	径1mm以下の石英・長石・角閃石
39	埴輪	円筒		29.6			外 斜ハケ→ナデ, 内 ナデ		10YR8/6 (黄橙)	径2mmの長石
40	埴輪	円筒		23.4			外 斜ハケ, 内 ナデ	円形透孔	7.5YR7/6 (橙)	径1mm以下の石英・長石・角閃石
41	埴輪	円筒		24.0			外 縦ハケ, 内 ナデ・指頭圧		5YR7/6 (橙)	径2mm以下の石英・長石・赤色土粒
42	埴輪	円筒		22.0			外 斜ハケ, 内 ナデ	円形透孔	10YR8/6 (黄橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石・赤色土粒
43	埴輪	円筒		20.6			外 縦ハケ, 内 横ナデ		10YR8/4 (浅黄橙)	径1mmの石英・長石
44	埴輪	円筒		21.4			外 縦ハケ, 内 ナデ・指頭圧	円形透孔	10YR8/4 (浅黄橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石・赤色土粒
45	埴輪	円筒		21.4			外 縦ハケ, 内 ナデ	円形透孔	7.5YR7/6 (橙)	径1mm以下の石英・長石・角閃石 (多)
46	埴輪	円筒					外 斜ハケ, 内 ナデ		10YR8/4 (浅黄橙)	径1mm以下の長石・角閃石

掲載番号	種別	器種	口径(cm)	最大幅(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	特徴	色調	胎土
47	埴輪	円筒					外 縦ハケ, 内 ナデ	円形透孔	10YR8/4 (浅黄橙)	径1mm以下の石英・長石・角閃石
48	埴輪	円筒					外 縦ハケ, 内 ナデ・指頭圧		10YR8/6 (黄橙)	径1mm以下の石英・長石・角閃石・赤色土粒
49	埴輪	円筒					外 斜ハケ, 内 ナデ	円形透孔	10YR8/6 (黄橙)	径1mm以下の長石・角閃石 (多)
50	埴輪	円筒					外 縦ハケ, 内 ナデ		外 10YR8/4 (浅黄橙) 内 10YR8/6 (黄橙)	径1mm以下の石英・長石・角閃石
51	埴輪	円筒					外 斜ハケ, 内 ナデ	円形透孔	7.5YR7/6 (橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石 (多)
52	埴輪	円筒					外 斜ハケ, 内 ナデ	円形透孔	5YR7/6 (橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石
53	埴輪	円筒					外 縦ハケ, 内 ナデ	円形透孔	7.5YR7/6 (橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石
54	埴輪	円筒					外 縦ハケ→ナデ, 内 横ハケ		2.5Y8/4 (淡黄)	径2mm以下の石英・長石
55	埴輪	円筒					外 縦ハケ, 内 斜ハケ→ナデ		7.5YR7/6 (橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石
56	埴輪	円筒					外 斜ハケ, 内 ナデ	三角形?ヘラ記号	5YR7/6 (橙)	径1mmの石英・長石
57	埴輪	円筒					外 縦ハケ, 内 ナデ	円形透孔	10YR8/6 (黄橙)	径1mmの石英・長石
58	埴輪	円筒					内外縦ハケ?	須恵質, 弧状ヘラ記号	外 2.5Y7/3 (浅黄) 内 10YR8/4 (浅黄橙)	径1mmの石英・長石
59	埴輪	円筒					外 縦ハケ→斜ハケ→横ハケ, 内 横ハケ	直線状ヘラ記号	10YR8/4 (浅黄橙)	径1mmの石英・長石
60	埴輪	円筒					外 斜ハケ, 内 ナデ	直線状ヘラ記号	10YR8/4 (浅黄橙)	径1mm以下の長石・角閃石
61	埴輪	円筒					外 縦ハケ, 内 斜ハケ	重弧状ヘラ記号	10YR8/6 (黄橙)	径1mmの長石
62	埴輪	円筒		23.8	17.0		外 縦ハケ, 内 ハケ	円形透孔, 基部調整, 粘土の継ぎ目	10YR7/6 (明黄褐)	径2mm以下の石英・長石・角閃石
63	埴輪	円筒			20.4		外 縦ハケ, 内 ナデ	円形透孔,粘土の継ぎ目	5YR7/6 (橙)	径1mm以下の石英・長石・角閃石
64	埴輪	円筒 (基部)			17.8		内外ナデ		7.5YR7/6 (橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石・赤色土粒
65	埴輪	円筒 (基部)			16.4		外 縦ハケ, 内 ナデ		10YR7/6 (明黄褐)	径2mm以下の石英・長石・角閃石・赤色土粒 (多)
66	埴輪	円筒 (基部)			19.4		外 縦ハケ		外 10YR8/4 (浅黄橙) 内 10YR8/6 (黄橙)	径1mmの長石・赤色土粒
67	埴輪	円筒 (基部)			14.0		外 縦ハケ, 内 無調整	粘土の継ぎ目	5YR7/6 (橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石 (多)
68	埴輪	円筒 (基部)			11.8		外 斜ハケ, 内 ナデ		2.5Y8/4 (淡黄)	径1mm以下の石英・長石・角閃石
69	埴輪	円筒 (基部)			24.6		外 縦ハケ		10YR8/6 (黄橙)	径1mm以下の長石・角閃石
70	埴輪	円筒 (基部)			17.4		外 縦ハケ, 内 ナデ		10YR7/4 (にぶい黄橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石・赤色土粒 (多)
71	埴輪	円筒 (基部)			15.4		外 縦ハケ, 内 ナデ		外 10YR8/4 (浅黄橙) 内 10YR8/6 (黄橙)	径1mmの石英・長石
72	埴輪	円筒 (基部)			17.4		外 縦ハケ, 内 ナデ	赤色顔料?	2.5Y8/4 (淡黄)	径1mm以下の石英・長石・角閃石
73	埴輪	円筒 (基部)			18.4		外 ナデ・指頭圧, 内 ナデ	粘土の継ぎ目	5YR7/6 (橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石
74	埴輪	円筒 (基部)			16.0		外 斜ハケ?, 内 ナデ		5YR7/6 (橙)	径2mm以下の石英・長石・赤色土粒 (多)
75	埴輪	円筒 (基部)					外 縦ハケ, 内 ナデ		外 2.5Y8/4 (淡黄) 内 10YR8/4 (浅黄橙)	径1mm以下の石英・長石
76	埴輪	円筒 (口縁部)					内外横ナデ	折断部に刻み目	10YR8/6 (黄橙)	径1mmの石英・長石・角閃石
77	埴輪	円筒 (口縁部)					外 ナデ, 内 横ハケ→ナデ		10YR7/6 (明黄褐)	径1mm以下の石英・長石・角閃石
78	埴輪	朝顔形円筒					外 横ナデ		10YR8/6 (黄橙)	径1mmの石英・長石
79	埴輪	朝顔形円筒					外 縦ハケ・横ナデ, 内 横ハケ	折断部に刻線	2.5Y8/4 (淡黄)	径1mm以下の石英・長石
80	埴輪	朝顔形円筒	32.0				外 斜ハケ→縦ハケ, 内 横ハケ→斜ハケ		7.5YR8/6 (浅黄橙)	径2mm以下の石英・長石・角閃石
81	埴輪	朝顔形円筒					外 横ナデ, 内 横ハケ→ナデ		10YR8/6 (黄橙)	径1mmの石英・長石
82	埴輪	朝顔形円筒					外 斜ハケ→横ハケ, 内 ナデ		10YR8/6 (黄橙)	径1mmの石英・長石・角閃石・赤色土粒

掲載番号	種別	器種	口径(cm)	最大幅(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	特徴	色調	胎土
83	埴輪	朝顔形円筒					外 縦ハケ，内 斜ハケ・横ハケ		2.5Y8/4（淡黄）	径1mmの石英・角閃石
84	埴輪	馬形					外 ハケ・ナデ，内 ヘラケズリ・ナデ・指頭圧		外 7.5YR7/6（橙） 内 7.5YR7/8（黄橙）	径1mmの石英・長石
85	埴輪	人物形					外 ハケ・ナデ，内 ナデ・指頭圧	須恵質	外 5Y7/1（灰白） 内 5Y6/1（灰）	径1mmの石英・長石

一丁坑4号墳　須恵器

掲載番号	種別	器種	口径(cm)	最大幅(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	特徴	色調	胎土
1	須恵器	杯蓋					外 回転ヘラケズリ→つまみ貼付け	つまみ	外 5B5/1（青灰）内 5PB5/1（青灰）	径1㎜の長石
2	須恵器	杯蓋	12.6				外 回転ヘラケズリ？ 内 回転ナデ		7.5Y6/1（灰）	径1㎜の長石（少）
3	須恵器	杯蓋					内外回転ナデ		5PB5/1（青灰）	径1㎜の長石（少）
4	須恵器	杯蓋					内外回転ナデ		外 N5/（灰） 内 N4/（灰）	径1㎜以下の長石（少）
5	須恵器	杯身	10.8			4.9	外 回転ヘラケズリ（時計回り），内 回転ナデ		N5/（灰）	径1㎜の長石・赤色鉱物
6	須恵器	杯身					内外回転ナデ		外 5B4/1（暗青灰） 内 5B5/1（青灰）	径1㎜以下の長石
7	須恵器	杯身					外 回転ヘラケズリ，内 回転ナデ		5PB5/1（青灰）	径3㎜の長石（少）
8	須恵器	高杯（脚部）			9.2		外 カキ目，内 回転ヘラケズリ→回転ナデ	台形透孔	10BG6/1（青灰）	径1㎜の長石（少）
9	須恵器	高杯（脚部）			9.8		外 カキ目，内 回転ナデ	台形透孔，回転軸痕	N5/（灰）	径2㎜の長石（少）
10	須恵器	高杯（脚部）					内外回転ナデ	台形透孔	外 N5/（灰） 内 7.5Y6/1（灰）	径1㎜以下の石英（少）
11	須恵器	高杯（脚部）			9.0		内外回転ナデ	無文	7.5Y7/1（灰白）	径1㎜の長石
12	須恵器	甕		11.2			外 ヘラケズリ撫消し　内 ヘラケズリ・カキ目	凹線文，波状文	外 5Y6/1（灰） 内 5Y7/1（灰白）	径1㎜以下の長石（少）
13	須恵器	器台	32.0				外 カキ目，内 回転ナデ	凹線文	7.5Y4/1（灰）	径1㎜の石英・長石（少）
14	須恵器	器台			27.8		内外回転ナデ・ナデ	波状文，三角形透孔	外 N5/（灰） 内 7.5Y7/1（灰白）	径1～2㎜の石英・長石・赤色鉱物（少）
15	須恵器	短頸壺	19.4				外 平行タタキ，内 回転ナデ・円弧当具痕撫消し	自然釉	外 5P2/1（紫黒） 内 N4/（灰白）	径1～3㎜の長石
16	須恵器	甕（口縁部）	23.6				外 カキ目，内 回転ナデ	凹線文，波状文	5PB4/1（暗青灰）	径1～2㎜の石英・長石
17	須恵器	甕（口縁部）					内外回転ナデ	凹線文，波状文	N5/（灰）	径1㎜の長石（少）
18	須恵器	甕					外 平行タタキ→カキ目内円弧当具痕撫消し		外 7.5Y5/1（灰） 内 7.5Y6/1（灰）	径1㎜の石英・赤色鉱物（少）
19	須恵器	甕					外 平行タタキ→カキ目内 円弧当具痕撫消し		外 7.5Y5/1（灰） 内 7.5Y6/1（灰）	径1㎜の石英・長石
20	須恵器	甕					外 平行タタキ，内 円弧当具痕撫消し	薄手	外 7.5Y5/1（灰） 内 7.5Y7/1（灰白）	径1～2㎜の長石（少）
21	須恵器	甕					外 格子目タタキ撫消し 内 円弧当具痕		外 N7/（灰白） 内 N5/（灰）	径1㎜の長石
22	須恵器	甕					外 格子目タタキ撫消し 内 円弧当具痕撫消し		外 N7/（灰白） 内 N5/（灰）	径1㎜の石英（少）
23	須恵器	甕					外 格子目タタキ，内 円弧当具痕		外 N3/（暗灰） 内 5P5/1（紫灰）	径1～2㎜の長石
24	須恵器	甕					外 格子目タタキ，内 円弧当具痕撫消し	自然釉	外 N3/（暗灰） 内 5P5/1（紫灰）	径1㎜の長石（少）
25	須恵器	甕					外 格子目タタキ，内 円弧当具痕		外 7.5Y5/1（灰） 内 N5/（灰）	径2㎜の長石（少）
26	須恵器	甕		(76.8)		(112.8)	外 平行タタキ，内 円弧当具痕		外 N4/（灰） 内 5PB5/1（青灰）	径1㎜の長石（少）

図版１

１　一丁坦１号墳全景
（南東から）

２　当初列石とされた石列
（北西から）

３　Ｔ－１全体（南西から）

図版２

１　Ｔ－１近景（南東から）

２　Ｔ－１近景（南東から）

３　Ｔ－１近景（南東から）

１　Ｔ－６近景（南東から）

２　Ｔ－６近景（南東から）

３　Ｔ－６葺石（北東から）

図版４

１　Ｔ－７近景（南東から）

２　Ｔ－７近景（北東から）

３　Ｔ－７葺石（北から）

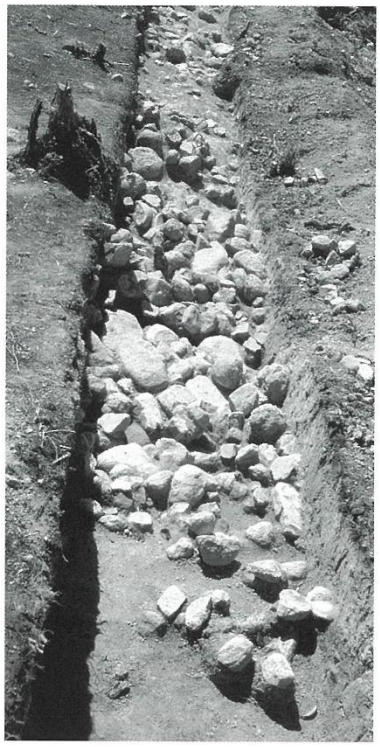
１　Ｔ－８近景（南から）

２　Ｔ－９近景（南東から）

３　Ｔ－14近景（南東から）

図版６

１　Ｔ－15近景（北東から）



２　Ｔ－３近景（北東から）

３　Ｔ－３葺石（北西から）

１　Ｔ－16近景（北東から）

２　Ｔ－16葺石（北西から）

３　Ｔ－５近景（北西から）

図版８

1　Ｔ－10近景（南西から）

2　Ｔ－12近景（北西から）

3　Ｔ－13葺石（南西から）

１　４号墳トレンチＦ墳頂部（西から）

３　４号墳トレンチＪ完掘状況（南東から）

２　４号墳トレンチＦ遺物出土状況（南東から）

図版10

1　６号墳トレンチ⑦北端
（南東から）

2　６号墳トレンチ⑦中央部分
（北西から）

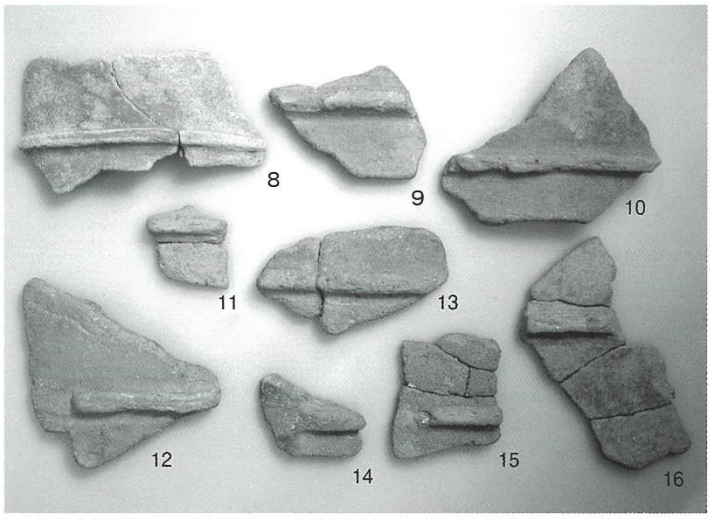
3　６号墳トレンチ②（南西から）

1　６号墳トレンチ⑤近景
（北東から）

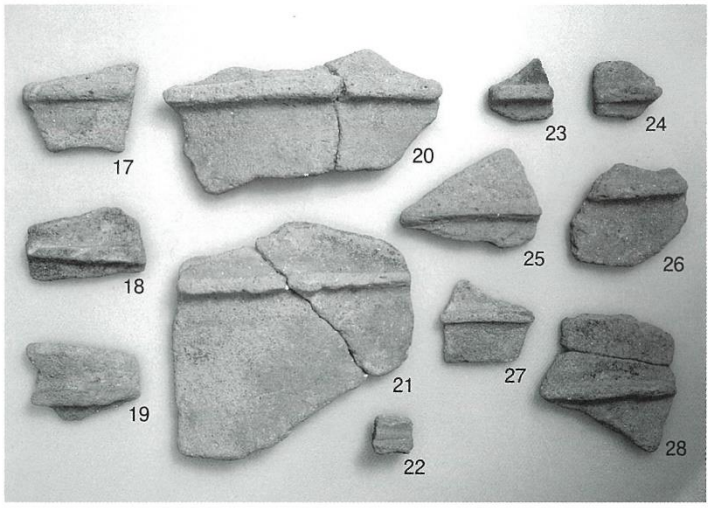
2　１号墳調査前
（南から）

3　３号墳から１号墳をみる
（北東から）

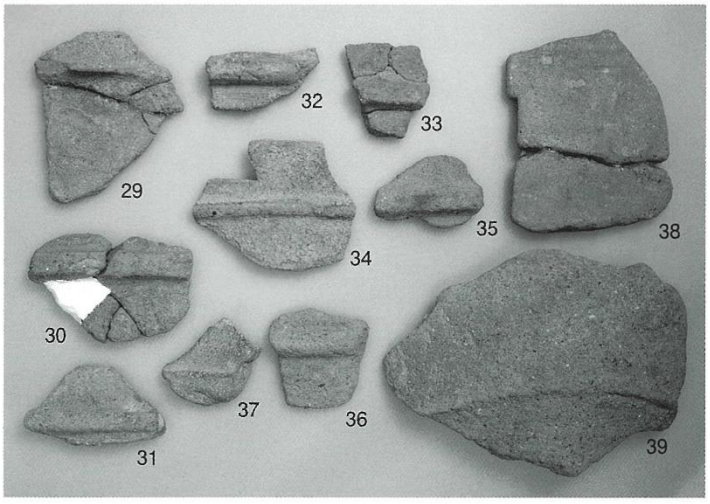
図版12



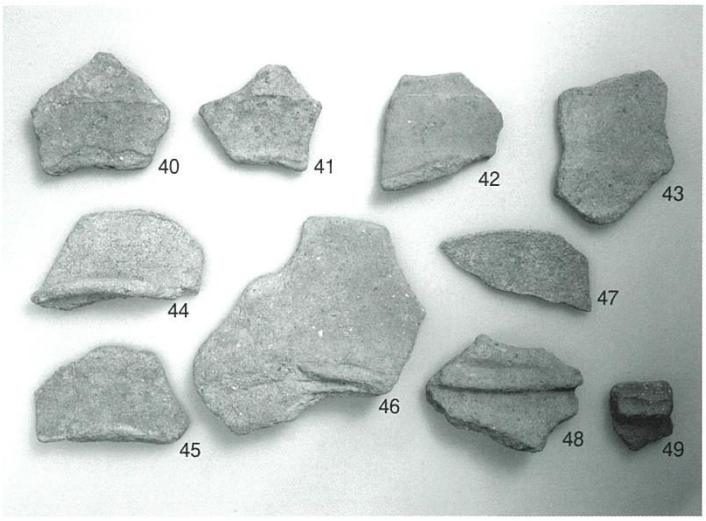
1　一丁坑１号墳出土埴輪①



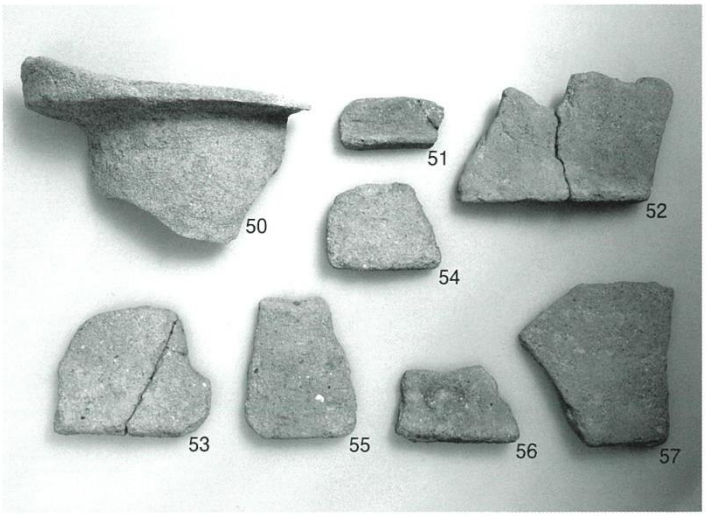
2　一丁坑１号墳出土埴輪②



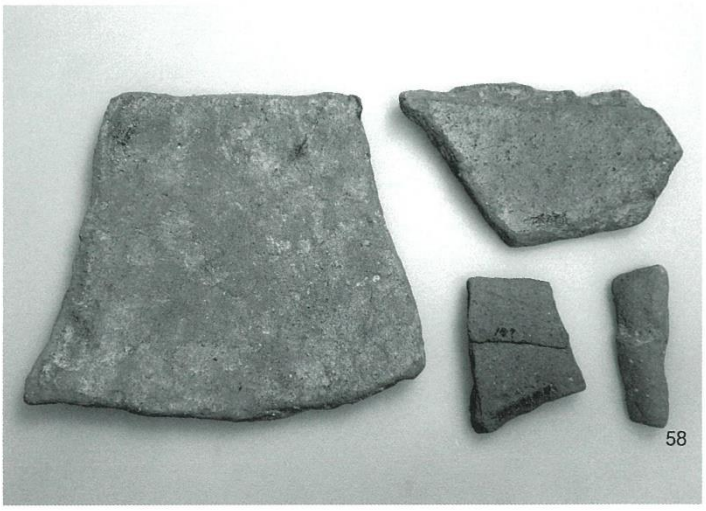
3　一丁坑１号墳出土埴輪③



1　一丁坑１号墳出土埴輪④

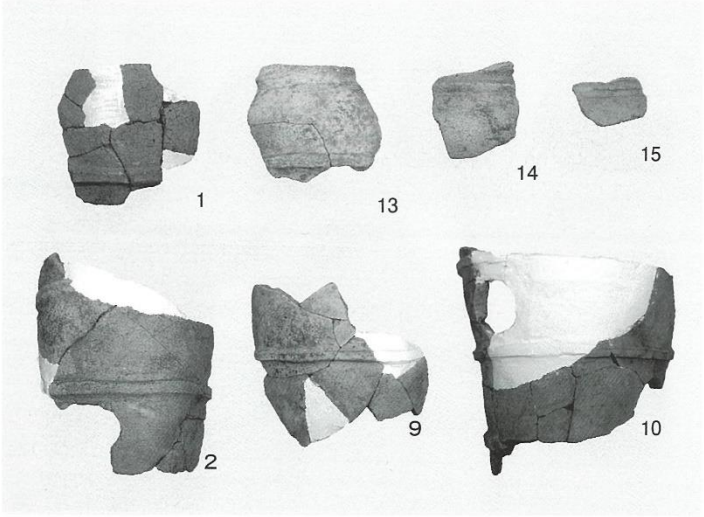


2　一丁坑１号墳出土埴輪⑤

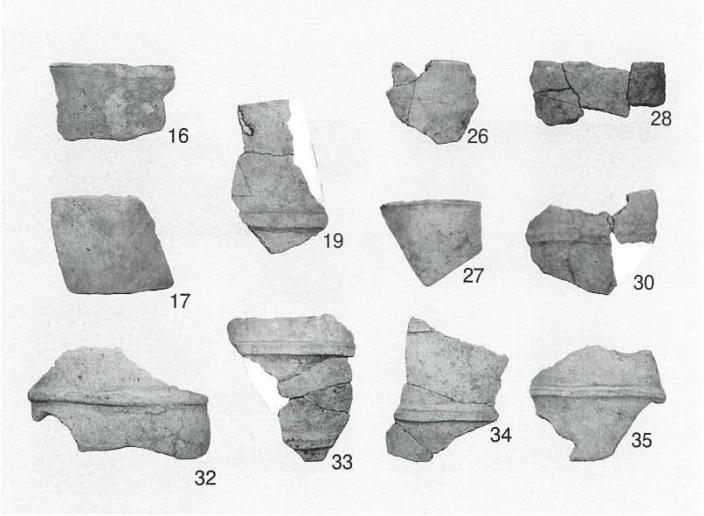


3　一丁坑１号墳出土埴輪⑥

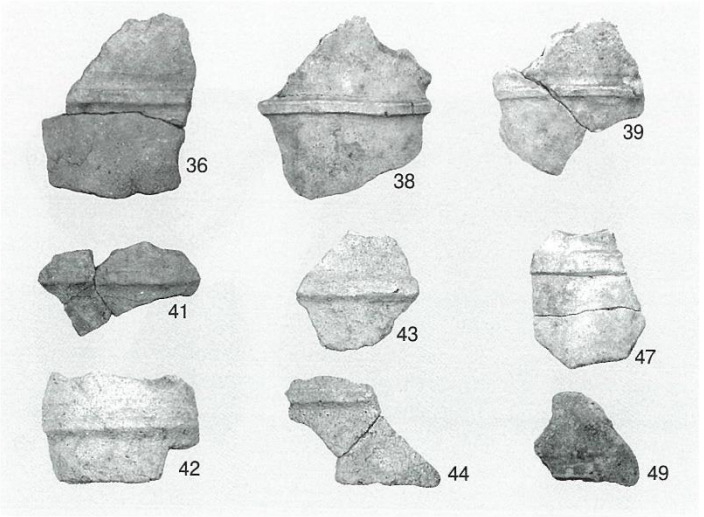
図版14



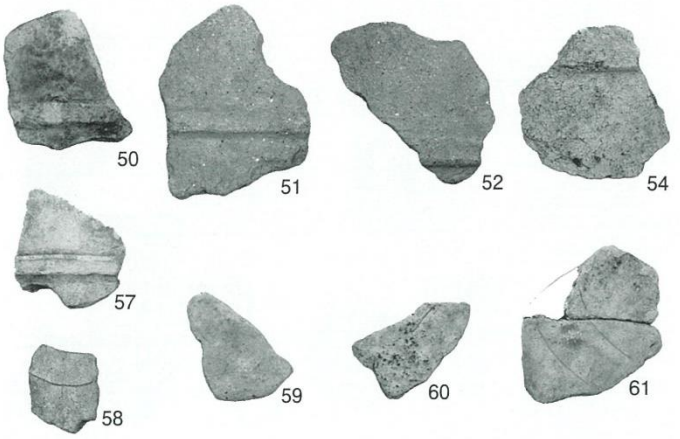
1　一丁坑４号墳出土埴輪①



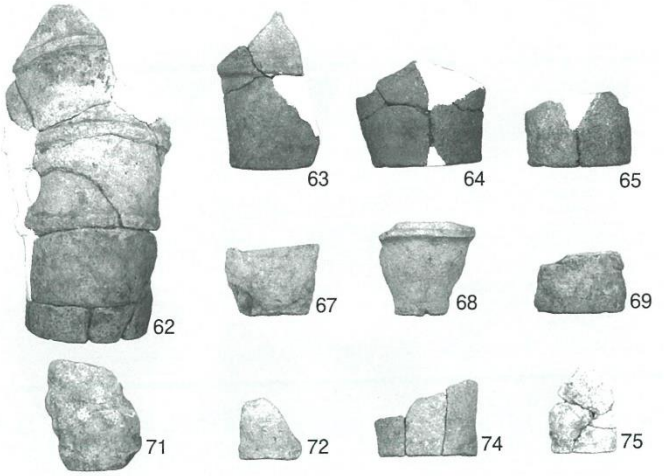
2　一丁坑４号墳出土埴輪②



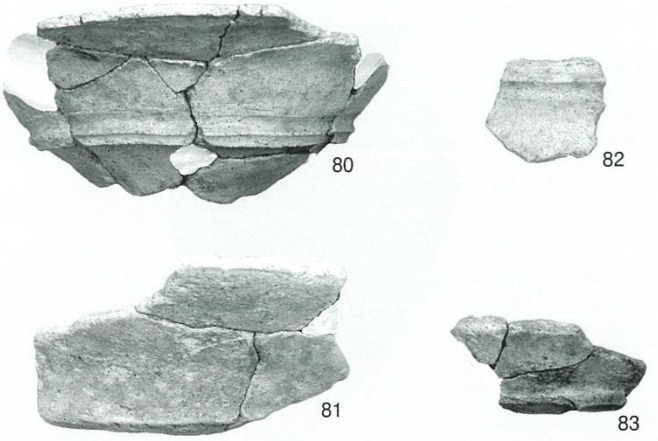
3　一丁坑４号墳出土埴輪③



1　一丁坑４号墳出土埴輪④

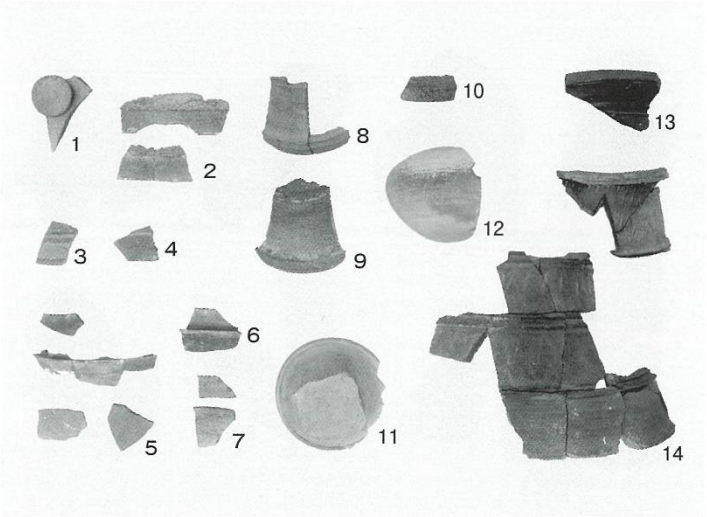


2　一丁坑４号墳出土埴輪⑤

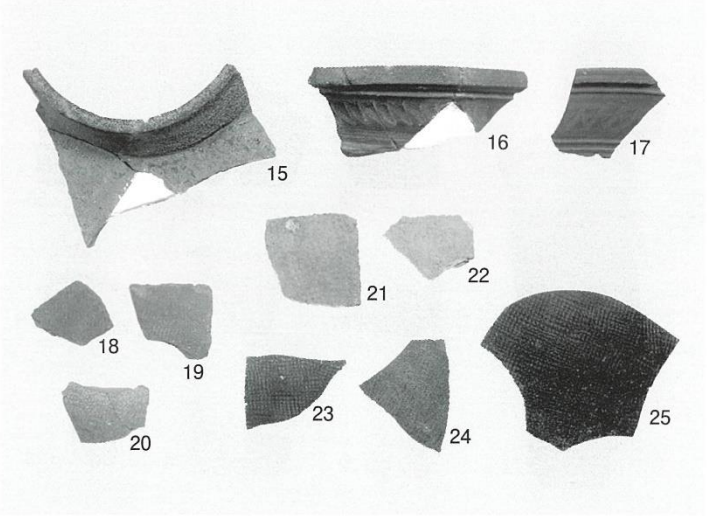


3　一丁坑４号墳出土埴輪⑥

図版16



1　一丁坑４号墳出土須恵器①



2　一丁坑４号墳出土須恵器②

3　一丁坑４号墳出土須恵器③

報告書抄録	
ふりがな	いっちょうぐろこふんぐん
書名	一丁坑古墳群
副書名	市指定史跡古墳確認調査
巻次	
シリーズ名	総社市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	23
編著者名	谷山雅彦　高橋進一　村田　晋
編集機関	岡山県総社市教育委員会
所在地	〒719-1192　岡山県総社市中央一丁目１番１号　TEL 0866-92-8363
発行年月日	西暦　2014年12月12日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ′ ″	東経 ′ ″	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
いっちょうぐろ 一丁坑 こふんぐん 古墳群	おかやまけんそうじゃしはだ 岡山県総社市秦	33-208	298	34°41′ 30.55″	133°42′ 29.77″	平成23年 ７月19日～ 11月30日	約430	史跡整備
はだおおぐろ こふん 秦大坑古墳	おかやまけんそうじゃしはだ 岡山県総社市秦	33-208	288	34°40′ 51.74″	133°42′ 48.46″	平成26年 ４月14日～ ６月27日		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
一丁坑１号墳	古墳	４世紀	葺石	埴輪	
一丁坑２号墳	古墳				
一丁坑３号墳	不明				
一丁坑４号墳	古墳	５世紀	石室	埴輪・須恵器	
一丁坑６号墳	不明				
秦大坑古墳	古墳	４世紀	葺石	埴輪	

要約	１号墳は４世紀前半に築造された全長約70mの前方後方墳。二段築成。周辺には小古墳が築造されている。１号墳の埴輪には線刻の模様があり，特殊器台形埴輪の最終時期のものと考えられる。４号墳は，石室をもつ方墳で出土遺物から５世紀後半の築造と考えられる。埴輪には，人物・馬などの形象埴輪があり，須恵器の大甕が墳丘に据えられていた。

総社市埋蔵文化財発掘調査報告 23

一丁坦古墳群

市指定史跡　古墳確認調査

平成 26（2014）年 12 月 1 日印刷

平成 26（2014）年 12 月 12 日発行

編集発行　岡山県総社市教育委員会
岡山県総社市中央一丁目 1 番 1 号

印　　刷　柳本印刷株式会社
岡山県総社市総社一丁目 10 番 24 号